

F83

5

F83-Tu5-3ウ



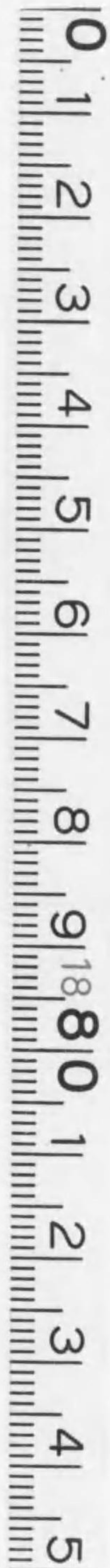
1200500765436

獵人日記

中

ツルゲーネフ作  
中山省三郎譯

岩波書店



始





F83

Tu 5-3

(2)



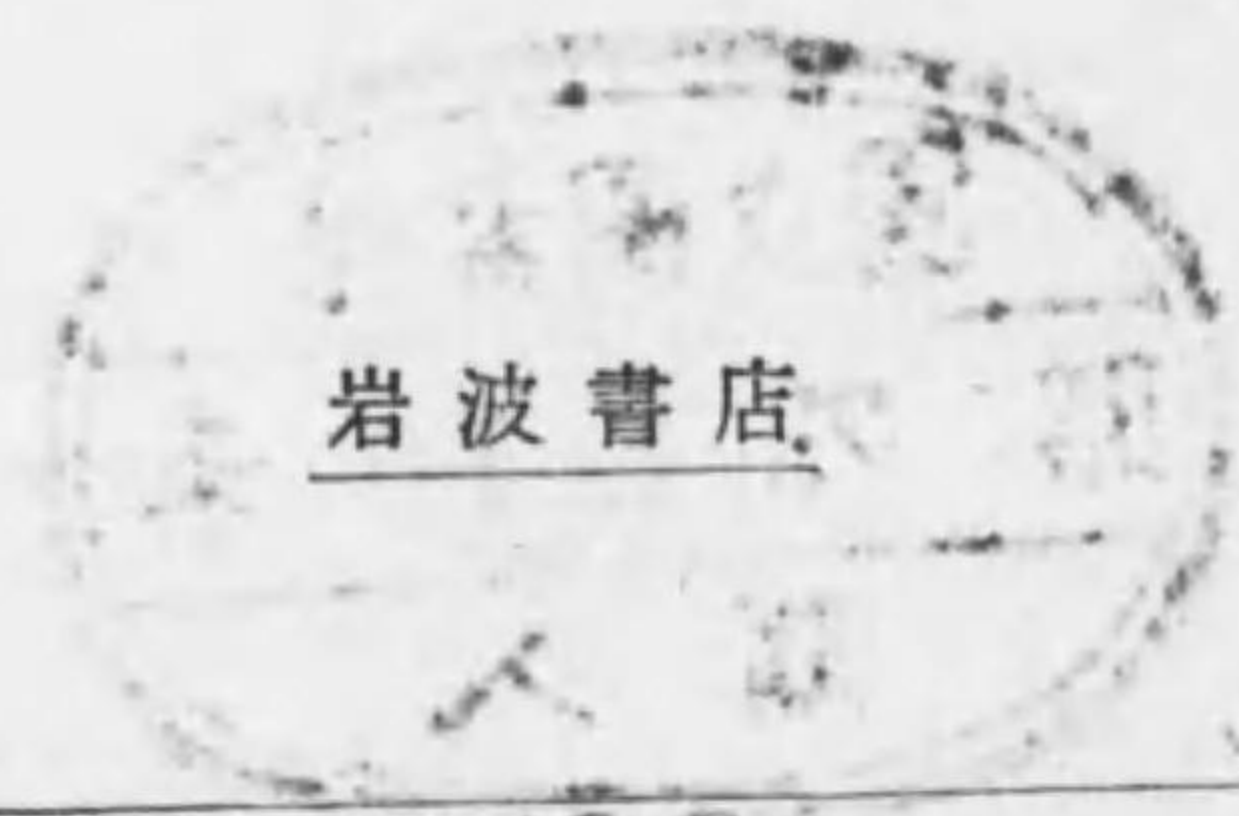
岩波文庫

1875-1876

獵人日記

中

ツルゲーネフ作  
中山省三郎譯



岩波書店



目次

支配人 ..... 七

事務所 ..... 三四

狼<sup>ビツユウ</sup> ..... 七一

二人の地主 ..... 八七

レベヂヤン ..... 一〇四

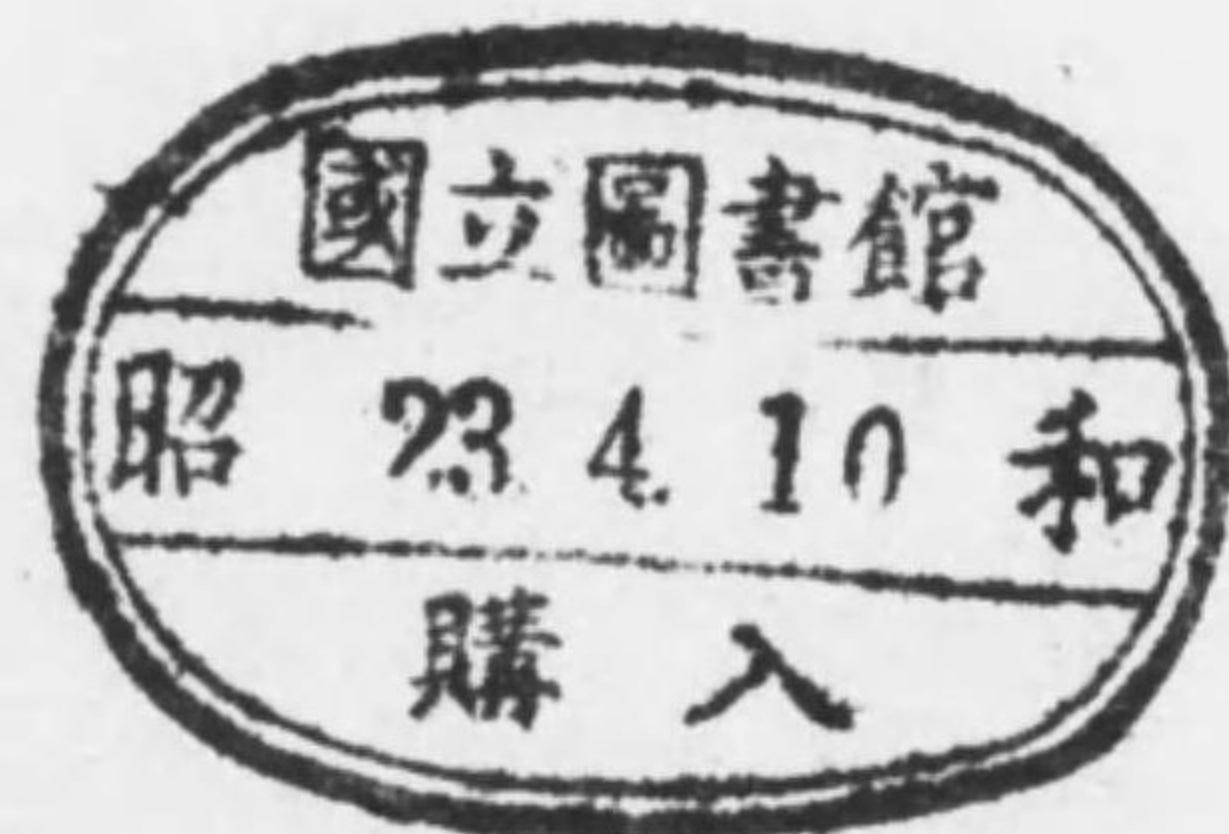
タチヤーナ・ボリーソヴナとその甥 ..... 一二八

死 ..... 一五二

歌うたひ ..... 一七四

ピョートル・ペトローキツチ・カラターエフ ..... 二〇七

註 ..... 二三九





獵  
人  
日  
記  
中



支配人

支

配

人

私の持村から十五露里ばかりの所に一人の知合ひが住んでゐる。若い地主で、近衛の退役士官、アルカーヂイ・パーウルイチ・ペノチキンといふ。その領地には野禽がたくさんゐるし、家は佛蘭西の建築家の設計によつて建てられてあり、下僕しもべたちには英國風の服装をさせ、客があれば立派な御馳走をして心から款待する。にも拘らず人は彼を訪ねることを好まなかつた。目先の利く、きつぱりした男で、一通りの教育を受け、軍隊にも勤め、上流社會にもまれて、今は領地の經營にいそしみ、なかなか旨くやつてゐるのである。アルカーヂイ・パーウルイチは、彼自身の言葉をもつてすれば嚴格ではあるが、公平で、目下の者の爲を慮り、また彼等の爲を思へばこそ罰しもある。『百姓どもは子供のやうに取扱はなければなりません。』と、かうした場合によくいふのである。『無智文盲、non cheri; il faut prendre cela en considération. (そこを考へてやらなければなりませんよ、あな)』さういふ御當人は、いはゆる悲しむべき必要の生じた場合には、辛辣、激烈な振舞ひを避けて、聲も荒立てることを好まず、いきなり相手を小突きながら、落ちつき拂つていふのである。



『ねえ、お前、私はかうしてくれるやうにいつたぢやないか。』とか、『一體お前、どうしたんだね。思ひ直してごらん。』とか。さういふ折には、少しばかり齒を喰ひしぼり、口を歪める。決して背の高い方ではないが、風采の粹な美男子で、手や爪はいつも特にきれいにして置き、紅い唇と頬とは見るからに健康さうである。聲を立てて気軽に笑つて、澄んだ蒼色の眼をよく人なつこげに細める。またすばらしく立派な、よい好みをもつた服装をしてゐて、佛蘭西の書物や繪や新聞などを取り寄せてゐる。尤も讀書にかけては大して好きな方ではなく、『永遠の猶太人』くらゐも讀みこなしたかどうか覺束ない。骨牌にかけては名人であつた。要するにアルカーヂイ・パーウルイチはこの縣で最も教養のある貴族で、花婿の候補としても最も羨むべき者の一人で、婦人たちは彼のこととなるとまるで夢中になり、殊に彼の態度を賞める。それでゐて、驚くほど身持がよく、猫のやうに用心深く、生まれてこのかた、ただの一度として他人に後ろ指をさされるやうな事にかかづらつたことがないのである。時と場合によつては骨のあるところを見せて、臆病者をまごつかせたり、ひどい目に會はせたりするのが好きではあつたけれど。いかがはしい交際が大嫌ひで、——名を汚すことを怖れてゐる。その代り、機嫌のよい時には、エビクロスの徒であると號してはゐるが、大體が哲學といふものを、獨逸の識者たちの霧のやうな食べ物であるとか、時にはただのたは言だとかいつて、あまりよく言はない。また音楽も好きで、骨牌をす

る時には、ぼんやりと、しかし情のこもつた調子で歌をうたふ。リユーチャヤソムナンプーラなどの曲も少しは覚えてゐるが、いつも甲高になりがちである。冬になればペテルブルグへ行つて暮らす。邸はたぐひないほどよく片附いてゐる。この風が馭者たちにまで及んで、毎日、馬の頸圍の拭掃除をしたり、外套を綺麗にしたりするばかりでなく、自分の顔までも盛んにみがき立てる。アルカーヂイ・パーウルイチの僕婢たちは、實際のところ、何だか胡散くさい顔附をしてゐる。尤もわが露西亞では、不機嫌なものと睡たいのとは區別がつかないのである。アルカーヂイ・パーウルイチが話をする時には、やさしい快よい聲で、ゆつくりと間を置きながら、満足さうに一言一句を香水の匂ふ美しい髭の間から洩らすのである。また例へば、『Mais c'est impayable! (何てすばらしいんだらうね)』だとか『Mais comment donc! (いや、それ)』だとかいふ佛蘭西語の表現をあれやこれや用ひる。しかし、かういふことがいくらあつたところで、少くとも私は、進んで訪ねる氣にはなれないのである。若しも鷓鴣や松鷄がゐなかつたら、全く交はりを絶つてゐたことであらう。彼の家に行つてゐると、何かしら妙な不安にとりつかれる。行届いたもてなしをして貰つても、一向に嬉しくない。いつも夕方、髪を縮らせた侍僕が、紋章入りの釦のついた空いろのお仕着せを着て前に現はれ、かしこまつて長靴を脱がしてくれるとき、この蒼白い、瘦せ細つた風貌の代りに、作男から引きあげられて間もない、しかもついこのごろ貰つた南豆木綿の上衣を、



もう十箇所も綻ばせてゐようといふ若い頭丈な男の恐ろしく廣い頬骨と、めつたにありさうにもない團子鼻が不意に現はれてくれたらと思ふ、——實際さうなれば、言葉では言ひ表はせないほど嬉しくなつて、長靴と一緒に自分の足の腿から下を引き抜かれるくらゐの危い藝當をやられてもいいといふやうな氣になるのである……

かやうにアルカーヂイ・パーウリチを嫌つてゐたにも拘らず、或る時のこと、餘儀なく彼のところに一夜を過ごしたことがある。翌る日は朝早く馬車の支度を命じたけれど、彼は英國風の朝食を振舞はずに歸すことを嫌つて、私を自分の書齋へ案内した。お茶と共にカツレツや半熟の卵、バター、蜂蜜やチーズ、その他のものが出た。綺麗な眞白い手袋をはめた二人の侍僕が、何ごとによらず、かゆいところに手の届くやうに、黙つてゐても何かと速かに用を足してくれた。私たちは波斯風の長椅子に腰をかけてゐた。アルカーヂイ・パーウリチはだぶだぶの土耳其風の絹のスポンを穿き、黒天鵝絨のジャケットを着、青い總のついた美しい土耳其帽をかぶり、踵のない支那風の黄いろいスリッパを穿いてゐた。彼はお茶を喫んだり、笑つたり、爪を吟味したり、クッションを脇腹の下にあてがつたりして大へん上機嫌であつた。腹一ぱいに、いかにも満足さうに朝食をしたためて、アルカーヂイ・パーウリチは赤葡萄酒を自らグラスについで唇のところに持つて行つたが、不意に眉を蹙めた。

「この葡萄酒はなぜ温めてないんだ？」

と彼はかなり鋭い聲で一人の侍僕を咎めた。

侍僕はどぎまぎして、釘づけにされたやうに立ちどまつて、眞蒼になつた。

「おい、訊いてるんぢやないか？」と侍僕をじつと見据ゑたまま、アルカーヂイ・パーウリチは落ちついて言葉をつづけた。

運の悪い侍僕はその場にもゐたたらぬ態で、ナプキンを弄りながら、一言もいはなかつた。

アルカーヂイ・パーウリチは頭を垂れて、額越しに、じつと物思はしげに侍僕を見つめた。

「Pardon, mon cher, (失禮いたしました、あなた)」と親しげに私の膝に手を觸れて、彼は快よい微笑をうかべながらいふのであつた。そしてまた侍僕を睨んだ。「さあ、行きなさい。」と、しばらく黙つてゐた後で附け加へて、眉をあげ、呼鈴を鳴らした。

間もなく、肥つて、色が淺黒く、髪の毛の黒い、額の狭い、肥え太つた肉づきにすつかり眼を塞がれてゐるやうな男が入つて來た。

「フォードルのことは……然るべく運んで置くやうにな。」とアルカーヂイ・パーウリチは落ちつき拂つて、低い聲でいつた。

「はい、畏まりました。」と肥つた男は答へて、出て行つた。



「Voilà, mon cher, les désagréments de la campagne. (どうも田舎には何のものと氣に)」とアルカーヂイ・パーウルイチは愉快さうにいつた。「時に、あなた、どちらへ？ まあ、いいぢやありませんか、もう少しごゆつくりなすつて。」

「いや、もうお暇いとましなくちやなりません。」と私は答へた。

「とおつしやると、また獵うまに！ まあ、鐵砲打ちといふものは仕様のないものでしてね！ さてこれから、どちらへお出かけで？」

「ここから四十露しじゆ里ばかり向ふの、リャポーヲへ。」

「リャポーヲへ？ ああ、丁度いい、それぢや私もお伴ともをしませう。リャポーヲは私のシユピロフカから五露ごろ里しかありません。なかなか折がないもんですから、ずるぶん永いこと行けないでゐたところです。これは丁度いい折です。あなたは今日はリャポーヲでお撃ちになつて、晩には私どもへいらつしやい。Ce sera charmant. (これは面白く) 御一緒に夕食を食たべませう、——うちの料理番を連れて行きますから、——私のところへお泊り下さい、うまい！ うまい！」と彼は私の返事も待たずに附け加へた、「C'est arrangé. (では、さう) ……おい、誰かゐるかい？ 馬うま車の用意をさせてくれ、大急ぎにだぞ。あなたはシユピロフカへいらしたことはございませんでせう？ 支配人の小舎へお泊め申すのは、お恥かしい次第ですが、いかがでせう、まあ、あ

なたはそんなことをやかましくおつしやる方かたでもありませんから。それにリャポーヲへお出かけになれば、乾草小屋へお泊りになるくらゐなものでせうから……さあ、出かけませう、出かけませう！」

かういつて、アルカーヂイ・パーウルイチは何か佛蘭西語の小唄コソウをうたひ出した。

「きつとあなたは御存じないでせうが、」と彼は立つたまま身體をゆらゆらさせながら言つた。「私はあそこの百姓どもを小作制度にしてゐましてね。さういふ家憲なものですから——致し方ありません。尤も、小作料はきちんきちんと納めてますがね。私は正直のところ、賦役かきの方をさせようと永いこと考へてはゐるんですが、何分にも地所が少い。實際、あの連中が帳尻をどうやつて合はして行くのか、私にはどうも不思議なくらゐるんですよ。しかし、c'est leur affaire. (これは私の知つたことぢやない) あそこに置いてゐるうちの支配人は出來た奴で、une forte tête (頭のしつつか)で、腕利きでしてね！ いづれお會ひになればお分かりでせうが……いや全く何て好都合に行つたものでせう！」

かうなつては仕方がない。朝の九時といふのが午後の二時になつて、やうやく私たちは出かけることになつた。遊獵家諸君には私の苛立たしい氣持がよく分かつてもらへるだらう。アルカーヂイ・パーウルイチは彼自身の言ひ草を藉せきりると、時をり自分を氣儘にしてやるのが好きな性質



で、下着や着替へや、服や香水やクッションや、さまざま化粧道具など、儉約で落ちつきのある獨逸人であつたら一年の用を足さうといふくらゐ、ふんだんに持ち出した。坂道を下るたびにアルカーヂイ・パーウルイチは簡單ながら力のこもつた注意を與へる。これによつて私はこの知合ひがよほどの臆病者であることを推察することが出来た。それにしても、途中には別狀がなかつた。ただ近ごろ修復したばかりの小さな橋のうへで、料理人の乗つてゐる馬車が片寄つて、料理人が車の後輪で腹を押しつけられたくらゐのものであつた。

アルカーヂイ・パーウルイチはお家育ちのカレムが落ちたのを見て、一方ならず驚き、早速、人をやつて、腕が大丈夫だつたかどうかを訊ねさせた。何事もなかつたといふ返事を耳にすると、彼は直ぐに安堵した。かういふことで、私たちは道中かなり永い時間を費やした。私はアルカーヂイ・パーウルイチと同車してゐたが、道の終り頃には堪らないほどの退屈を感じた。わけても最後の數時間に、相手がすつかり氣抜けして、自由主義者ぶつたりするに至つては尙更のことであつた。やつとのことで私たちは到着した。といつてもリャボーヲならぬ、シュピロフカへぢかに來てしまつたのである。どういふ加減か、さういふことになつたのである。その日はそれだけでなくも穢などすることが出来ないで、いやいやながら、兎に角、これも運だと諦めてしまつた。料理人は私たちよりも少し早目に着いたので、それぞれ手配をし、然るべき人たちに前觸れも

したらしく、私たちが村境ひに入ると、百姓頭（支配人の息子）が迎へに出てゐた。頑丈な、鬘の毛の赤い、七尺もある大男で、馬に乗つて、帽子もかぶらず、新しい上衣を卸もかけずに着てゐる。「ソフロンはどこにゐるのかね？」とアルカーヂイ・パーウルイチが彼に訊ねる。百姓頭は先づ、ひらりと馬から飛び下りて、且那に恭しくお辭儀をして、「いらつしやいませ、アルカーヂイ・パーウルイチ様、」と挨拶し、それから頭を上げて、身體をゆすり、ソフロンはベロフへ行つたが、すでに迎へに人をやつた旨を申し上げた。「さあ、後から縦いて來い。」とアルカーヂイ・パーウルイチがいふ。百姓頭は畏まつて、自分の馬をわきへ寄せて、それに跨がり、帽子を手に持つたまま、馬車の後を小走りに走つて行つた。私たちは村の通りを進んで行く。空の荷馬車に乗つた何人かの百姓に出會ふ。彼等は麥打場からの歸りで、身體ぢゆうをゆすぶり、足をぶらぶらさせながら唄をうたつてゐた。それが私たちの馬車と百姓頭の影を見ると、忽ち黙りこんで、てんでに冬帽子（時はいま夏である）を脱いで、命令を待つかのやうに起ちあがつた。アルカーヂイ・パーウルイチは懇ろに會釋する。どうやら不安な動搖が村中に擴がつたらしい。蒼盤縞のスカートを着けた農婦たちは見さかひもなく、やたらに吠え立てる犬に木ぎれを投げつける。殆んど目の眞下からかけて顔一面に髯の生えた跛の老人は水をまだ飲み終らない馬を井戸端から引き離して、どういふ仔細があつてか分からないが、横腹のあたりを一つ食はし、それか



ら丁寧にお辭儀をした。長いシャツを着た子供たちは喚きながら家の中に駆けこみ、高い關に腹を押しつけ、頭を下げて、兩足を上に躍らせ、くるりと戸のかけに身をかはしたかと思ふと、そのまま暗い玄關にかくれて、二度と姿を見せなかつた。牝鶏までがちよこちよこと門の下の嵌板のところに行つて行く。ただ一羽の、縞子のチョッキのやうに胸毛が黒く、鶏冠のきはまで赤い尻尾を卷いた厚かましい雄鶏は往來に踏みとどまつて、方にときを作らうとまでしかけたが、それも急におち氣ついて逃げ出してしまつた。支配人の小舎は他の家から離れて、青々と繁つた大麻の畑の中に立つてゐる。私たちは門の前に馬をとめた。ペノチキン氏は立ちあがつて、鮮かにマントを脱ぎすて、愛想よくあたりを見廻しながら馬車を出た。支配人の細君が腰低く禮をしなから私たちを迎へて、御主人の手へ接吻をしにやつて來た。アルカーヂイ・パーウルイチは思ひのままに接吻させると、上り段を昇つた。玄關の薄暗い隅には百姓頭の女房が立つてゐて、これも丁寧に辭儀をしたが、御主人の手に敢へて近づかうとはしなかつた。いはゆる夏小舎——玄關の右手にあたる部屋——には他の二人の女が甲斐甲斐しく働いてゐた。あらゆる見苦しい物や空瓶や、木のやうに堅くなつた毛皮の外套や、油じみた壺や、襦袢をたくさんに詰めた上へ瘡だらけの赤ん坊を入れた搖籃などを運び出しては、風呂箒で芥を掃き出してゐる。アルカーヂイ・パーウルイチは女どもを追ひ出して、聖像の下の床几に腰をかけた。馭者たちはトランクや函や

そのほかの手廻り品を、重たい長靴の音をなるべく立てまいと、てんでに氣をつけながらかつぎ込み始めた。

そのうちにアルカーヂイ・パーウルイチは百姓頭に向つて、作柄のことや種蒔きのことや、そのほか何のかのと農作のことについて訊ねてゐた。百姓頭は申し分のない返事をしたに相違ないが、いかにも話しぶりに元氣がなく、窮屈さうで、まるでかじかんだ指で上衣の釦をかけてゐるかのやうなまだるさであつた。彼は戸口のところに立つてゐて、絶えず氣を配り、ふりかへつては、手早い侍僕に道をあけてやつてゐた。その頑丈な肩越しに私は支配人の細君が玄關で、ひそひそと他のどこかの女を打ちのめしてゐるのを目にとめた。不意に馬車の音がして、階段の前にとまつた。支配人が入つて來た。

この、アルカーヂイ・パーウルイチのいはゆる『手腕家』は背が大きくない代りに、肩幅が廣く、胡麻鹽頭で、頑丈で、赤い鼻と、小さな青い眼と、扇形の髯をもつた男であつた。ついでに一言するが、露西亞の國があつてこのかた、富貴繁昌した人に濃い房々した髯のなかつた例がない。中には、ずつと永い間、薄い、楔形の鬚しかなかつた人もあるが、景氣がよくなると忽ちにして、後光のやうに顔一面に髯が生える、——一體どこからこれだけの毛が來るものであらう！——ところで支配人は、ペロフのところ一杯きこし召して來たものと見えて、顔の色もよく、



酒の匂ひがぶんぶんしてゐた。

「やあ、これはこれは、われわれの父にも等しいお情なまけぶかい御前様、」と彼は歌でも唄ふやうに、今にも涙でもこぼれさうな、感激にたへないといふやうな顔附をして言ひ出した、「やつとこのことで御光臨の榮をえまして！……お手を、どうか、お手を、」と早くも唇をさし出しながら附け加へる。

アルカーヂイ・パーウリイチは望みを叶へてやつた。

「さあ、どうだね、ソフロン、仕事の方はうまく行つてるかね？」と彼はやさしい聲で訊ねた。

「ああ、御前様、」とソフロンが叫んだ、「どうしてうまく行かない譯がございませう、仕事の方が！ われわれの父にも等しい、お情なまけぶかい御前様がお出で下されるで、この瘦せ村が明かるくなつて、死ぬまで仕合せにしていただきまして。まことに有難いことで、アルカーヂイ・パーウリイチ様、有難いことで！ あなた様のお慈悲をもちまして、みんな無事で居りますので。」

ここでソフロンはちよつと口を噤んで、主人の顔を見つめ、やがて又もや感きはまつたかのやうに（おまけに酒の酔ひも手傳つて）、もう一度お手をと願つて、前よりも一やう唄ふやうな調子になつて来た。

「ああ、父にも等しい御恩人、……いや、今さらこんなことを申し上げても！ 全く、私はあ

んまり嬉しくなつて頭が馬鹿になつてしまひました、……本當のところ、眼をあけてかうしてお顔を拜しながらも、ほんたうとは思へません、……ああ、私どもの父にも等しいお方……」

アルカーヂイ・パーウリイチは私をちらと見て、微笑みを洩らし、「N'est-ce pas que c'est touchant. (いぢらしむぢや) 」と訊ねた。

「ですが、アルカーヂイ・パーウリイチ様、」と支配人はなほもひるまず續ける、「これは一體どうしたこととございませう？ あなた様は私の贈つ玉をおつぶしなさる、お出になるといふお知らせもして下さらんで。今夜は、どちらへお泊りになりますので？ 何しろ、ここは穢い、芥……」

「何の、何の、ソフロン、」と微笑みながらアルカーヂイ・パーウリイチは答へる、「ここで結構だよ。」

「何ですと、御前様、誰がのに結構なのでございませう？ わしども風情の百姓には結構でもございませうが、何で、御前様、お情ぶかい御前様、ああ、……御前様は私どもの父にも等しいお方とございませう……どうかこの馬鹿者を御免なすつて下さい、私はあまりの嬉しさに気がちがつてしまつた、ほんたうに全く馬鹿になりましたので。」

そのうちに晚餐が出る。アルカーヂイ・パーウリイチは食べ始める。老人は伴の百姓頭を追ひ



出した、——あんまり酒臭いといつて。

「時に、爺さん、地境ひは決めたかね？」とペノチキン氏は明らかに百姓言葉を真似たつもりで、私に目くばせをして訊ねる。

「決まりましたでございます。御前様、これもみなあなた様の御恩で。一昨日、臺帳に記入いたしましたので。フルイノフの連中は初めは不服でした、……全く不服だったのです。かうしてくれの、……ああしてくれの、……と途方もない註文をつけるぢやございませんか。けども何しろ馬鹿の、阿呆どもの寄り集まりでして。それでもまあ、私どもはおかげ様で、仲に入つて下すつたニコライ・ミコライツチに厚くお禮を申して、御満足の行くやうにいたしましたね。萬事あなた様のお指圖どほりに致しまして、お指圖下すつた通りに致しましたので、エゴール・ドミートリツチに御承知おき願つて、萬事さう致しましたので。」

「エゴールから報告があつた。」アルカーヂイ・パーウリイチは重々しく言つた。

「たしかに、さやうでございますとも、御前様、エゴール・ドミートリツチなら、さやうでございませうとも。」

「まあ、これでお前たちも満足だらう。」

ソフロンはこの言葉ばかりを待つてゐたのである。「ああ、私どもの父にも等しい御恩人！」

と、また彼は唄ひ出した……「どうか私どもを可愛がつてやつて下さいまし、……全く、私どもも御前様のことを晝となく夜となく、神様にお祈りして居りますので……そりあもう、むろん、地面は少目すくなでございますけれども……」

ペノチキンはさへぎる。「まあ、いい、いい、ソフロン、お前がよく盡してくれることはよう知つとる、……時に、麥の出來高はどうかな？」

ソフロンは溜息をついた。

「へえ、どうも出來高はあんまり良い方ぢやございませんので。したがまあ、アルカーヂイ・パーウリイチ様、ちよつと申し上げますが、このあひだ困つたことが持ち上りましてね。(ソフロンはここで両手を擡げて、ペノチキン氏の方へ近づき、身を屈めて、片方の眼を細めた。) 手前どもの地内に死人が見つかりましたので。」

「そりや一體、どうしたんだ？」

「父にも等しい御前様、どうしたものだか、さつぱり見當がつきません。きつと仇敵かたきがおびき出したものと見えます。ところが仕合はせと、地境ひに近い所で見つかつたのです。尤も實を申しますると、こちらの地内に相違はございませんので。そこで早速それを畠の出つ鼻へ、まあだ問題の起きないうちに引きずり込ませまして、見張りをつけて、百姓どもには『黙つてをれ』と



いひつけとききました。兎も角も分署長へは『かういふ始末です』と説明いたしまして、ちよつと御馳走をした上に、いくらか握らせて置きました。……そこで、御前様、どうお考へで？　こちらの重荷は向ふの肩へ　つてしまつたぢやございませんか。何しろ死人が出れば二百ルーブリくらゐは、まんまとかつちやいますからね。』

ペノチキン氏は支配人の達者な計略を心から笑つて、頭で彼を指しながら、幾度か私にかういつた、*« Quel vaillant, (をかしな奴) え？」*

そのうちに戸外はすつかり暗くなつた。アルカーヂイ・パーウリイチは食卓を片付けて、乾草を持ち込むやうにいひつけた。侍僕は私たちのために、乾草のうへに敷布をのべて、枕をも並べてくれた。私たちは横になつた。ソフロンは翌日の指圖を聞いて、自分の部屋に引きさがつた。アルカーヂイ・パーウリイチは眠りかけながらも、露西亞の百姓の優れた性質について少しばかり話をし、それからまたソフロンが管理をするやうになつてからは、シュピロフカの百姓たちに一文の滞納もなくなつたと聞かしてくれた。……夜廻りが板木を叩き始めた。地主様が来たから遠慮をしようといふやうな氣持のまだ出て来ないらしい赤ん坊が、小舎のどこかで甲高い聲で泣き出した。……私たちはいつの間にか眠つてしまつた。

翌る日の朝、私たちはかなり早目に起きた。私はリャボーヲへ出かけるつもりでゐたのである。

が、アルカーヂイ・パーウリイチは自分の領地を見せたがつたので、私はその請ひをいれて足を止めた。あの『手腕家』ソフロンの優れた性質を實地に確かめるのも悪くないと私は思つたのである。やがて支配人が現はれる。青い外套を着て、赤い帯を締めてゐる。昨日から見るとずつと口數少く、眼光鋭く、主人の眼をじつと見詰めて、筋の通つた、要領を得た返事をする。私たちは彼と一しよに麥打場へ出かけた。ソフロンの息子で、七尺男の百姓頭は、どこから見てもかなり足りないやうな人物であるが、これもやはり私たちの後を蹤いて来る。それに村の書記のフェドセキツチが一しよになつた。これは退役の兵隊で恐ろしく大きな髭を生やし、頗る妙な顔附をしてゐる。まさしく、よほど前に何か一方ならずびつくりして、それ以來ずつと正氣に返らなかつたといふやうな顔附である。私たちは麥打場や穀倉や、乾場、物置、風車、家畜小屋や、野菜畑、大麻の畑などを見て廻つたが、話の通り何もかもよく整理がついてゐた。ただ百姓たちの元氣のない顔には、いささかの疑惑の念を覚えさせられた。實用といふことのほかに、ソフロンは風情といふことにも心を配つてゐた。堀端へはすつかり白楊を植ゑつけ、麥打場の禾堆の間には小徑をつけ、それに細かい砂を撒き、風車小屋には口をあけて眞赤な舌を出してゐる熊の形の風信子を作り、煉瓦造りの家畜小屋には、希臘風の破風といつたやうな類ひのものをとりつけ、その破風の下に『當家畜所壹阡八百四拾年、シュピロフカ村に建立』と白い字で誌して置



いた。アルカーヂイ・パーウルイチはすつかりいい氣持になつて、佛蘭西語で小作料制度の利益を説き始めた。が、しかも地主にとつては賦役をさせる方が一そう有利であるといつた、——まあ、これ式の内容は、もつともつと澤山あつた！……また支配人に向つては馬鈴薯の栽培法や、家畜の飼料の作り方や、そのほか、何のかのと、助言を與へ出した。ソフロンは注意ぶかく主人の言葉を聴きとつて、時をりは異論を述べたが、もはやアルカーヂイ・パーウルイチを父に等しいだの御恩人だのと稱揚はしなかつた。さうしてただ、地面が狭くて困るから、もう少し買ひ足しても悪くはないだらうと、そのことばかりを押しつけがましく言つてゐた。「うん、買つたらいい。」とアルカーヂイ・パーウルイチはいふ、「私の名儀でな、何も私は反對はせん。」この言葉に對してソフロンは一言も答へず、ただ髭を撫でるばかりであつた。「それにしても、これから森へ行つて見るのも悪くない。」とペノチキン氏は言ひ出した。直ぐに鞍を置いた馬が曳き出されて來た。私たちは森、すなはち私たちの方でいふところの『禁制林』へ出かけて行つた。この『禁制林』の樹木鬱蒼たる所へ出て、私たちは夥しい野鳥を見つけた。それを見たアルカーヂイ・パーウルイチはソフロンを賞めて、軽くその肩をたたいた。ペノチキン氏は植林に關しては露西亞在來の考へをもつてゐた。そこで非常に面白い——彼の言葉をかりていへば——事件を物語つた。それは或る剽輕な地主が自分の山番を懲らすのに髯を半分ばかり引つこ抜いて、林もこ

の通り樹を伐つてしまつては、とても繁るものでないといふことを證明してみせたといふ話である。しかし、ほかのことにかけては、決してソフロンもアルカーヂイ・パーウルイチも——共に新しいやり方をないがしろにはしなかつた。村に歸つて來てから、支配人はこのほどモスクワから取り寄せた簸穀機をお目にかけるといつて私たちを案内した。簸穀機はなるほどよく廻つてゐた。しかし、若しソフロンにして、この散策の終りに、どんなに不愉快なことが彼や旦那を待ち受けてゐるかが分かつてゐたなら、彼は恐らく私たちと一しよに家に留まつてゐた筈である。それはかういふことが起きたのであつた。私たちが穀倉から出て來ると、次のやうな風景が眼に觸れた。戸口から數歩離れたところに水溜りがあつて、その中で家鴨が三羽、平氣で水を撥ねかへしてゐたが、この水溜りの傍には百姓が二人佇つてゐた、——一人は六十ばかりの老人、もう一人は二十歳ぐらゐの若者である——いづれもつきはぎだらけの手織の襪衣を着て、跣足で、腰には繩をしめてゐた。書記のフェドセキッチがその傍で、しきりに談じつけてゐる。若しも私たちが穀倉でもつと暇どつてゐたら、必ずや百姓たちを説きつけて、うまく追ひ歸してゐたであらう。ところが、フェドセキッチは私たちの影を見ると、立ち竦んで、その場に氣が遠くなつたやうになつてしまつた。またそこには百姓頭がぼかんと口を開けたまま、やり場なげに握り拳をだらりと下げて立つてゐた。アルカーヂイ・パーウルイチは顔をしかめ、唇を噛んで、歎願



者のところへ近づいて行つた。二人は黙つて彼の足もとにひれ伏した。

「何の用があるんだ？ 何の願ひごとがあるんだ？」と彼はいくらか鼻にかかる嚴めしい聲で訊ねた（百姓たちは互ひに顔を見合はせて、一言も口をきかず、ただ、日の光が眩しいかのやうに眼を細めて、だんだんと呼吸をはずませるばかりであつた）。

「さあ、どうなんだ？」とアルカイヂイ・パーウルイチは繰りかへして、同時にソフロンの方を向いた、「どこの家の者だ？」

「トボレーフの家の者で。」と支配人はゆつくりと答へる。

「さあ、どうしたといふんだい？」とペノチキン氏はまたいひ出した、「舌がないのかい、え？ さあ、どんな用向きだか、いつて見い。」老人の方を顎でしやくつて附け加へる、「何も怖がることはない、馬鹿。」

老人は眞黒に日に焦けた皺だらけの頸を伸ばし、青味がかつた唇を斜に開けて、しはがれた聲で、「お殿様、庇つて下せえまし！」といつて、またもや額を地べたに押しあてた。若い方の百姓もまた同じやうにお辭儀をした。アルカイヂイ・パーウルイチは勿體ぶつた様子をして、百姓たちの頸筋を見おろし、反り身になつて、いくらか足をひろげて立つてゐた。

「何だ？ 誰の苦情を訴へるのか？」

「お殿様、御慈悲に！ どうか息をつかせてやつて下せえまし、……すつかり踏みつけられて、死ぬやうな目に會つて居りますんで。」（老人はやつとのことにかういつた）。

「誰がお前を虐める？」

「あの、ソフロン・ヤーコヴリッチでございます、且那樣。」

アルカイヂイ・パーウルイチは暫く黙つてゐた。

「お前の名は何といふ？」

「アンチープと申します。」

「では、こちらは誰だ？」

「私の件でして。」

アルカイヂイ・パーウルイチはまた暫く黙つて、口髭を軽く引つばる。

「なるほど、それでは、どんな風に虐めたんだ？」と髭越しに老人を見下ろしながら言ひ出した。

「且那樣、すつかり家を打つ潰されるやうな目に遭ひましたので。二人の件を、番も來ねえのに兵隊さやつちまひまして、今また三番目のまで取つて行かうとなさる。昨日は、且那樣、これつきりしかないといふ牝牛まで連れて行かれて、うちの嬖は嬖で散々に打ちのめされました、



「それ、そこのお方様に。」(といつて百姓頭を指さした。)

「ふん！」とアルカーヂイ・パーウルイチはいつた。

「どうかお蔭をもちまして、すつかり身上しんじやうを打つ潰されませんやうに。」

ペノチキン氏は顔をしかめた。「それにしても一體、どうした譯なんだ？」と支配人に聲低く、不愉快さうな顔をして訊ねた。

「飲んだくれでございます。」と、彼は初めて「ございます」言葉を使つて答へる、「それに怠け者でして、未納を片附けないのは、もう足かけ五年でございます。」

「ソフロン・ヤコヴリツチはなるほど私の未納金を納めては下さいました。」と老人はなほも言葉をつづける、「納めて下すつたのは、五年も前のこととして、納めてはくれましたが、そのかはり勝手なことに酷使こくしつて、且那樣、それにその……」

「それではどうして未納をこさへたんだ？」ペノチキン氏はおびやかすやうに訊ねる。(老人はうなだれてしまつた。) 多分お前は酒を食つて居酒屋をぶらつくのが好きなんだらう？(老人は口を開かうとした。) お前たちのことはちやんと分かつてゐる。アルカーヂイ・パーウルイチは性急に言ひ進んだ、「酒を飲んで、煖爐だんろの上に寝そべつてゐるのがお前たちの商賣なんだ。だから眞面目に働く者が、お前らの荷まで背負はなけりやならないんだ。」

「それに無禮者でして。」と支配人は主人の言葉に口を抉んだ。

「まあ、さういふことは分かり切つたことだ。いつもあることだから私も一度ならず見て来た。年が年中、放蕩しては無禮を働く、それでゐてここへ来て足もとに這ひつくばる。」

「且那樣、アルカーヂイ・パーウルイチ様、」と老人は生きた心地もなく言ひ出した、「お情けです、庇つて下せえまし。何で私が無禮者なんです？ 神様にお誓ひ立てて申しますが、そんなことがとても私に出来るもんぢやございません。ソフロン・ヤコヴリツチは可愛がつては下さらなかつた、可愛がつてなど下さらなかつた、どうした譯があつてか——それは神様にだけしか分かりません！ すつかり打つ潰さうとなさる……このたつた一人残つた末つ兒までも……その……(老人の黄いろい、萎びた眼には涙が光つた。) どうか、お殿様、お情けをもちまして、庇つてやつて下せえまし……」

「けんど、私等ばつかしでもねえんでして。」と若い方の百姓が言ひかけた……。

アルカーヂイ・パーウルイチは急に激昂した。

「誰が貴様に訊いてる、あ？ 貴様なんぞに訊いてゐないんだ。だから黙つてろ、……一體、何だといふんだ？ 黙れといつたら、黙れ！……ああ、忌々しい！ 何だ、これは謀叛沙汰だ。いやいや、俺んところ謀叛なんぞさせるものか、……俺んところで……」アルカーヂイ・パーウ



ルイチは一步前へ進み出たが、恐らく私のゐることを思ひ出したのであらう、引き返して、両手をポケットに突つ込んだ、……「Je vous demande bien pardon, mon cher. (どうも大へん失禮いたしました)」と作り笑ひをして、意味ありげに、聲を低めていつた。「C'est le mauvais côté de la médaille (これは農民の悪い半面です) ……まあ、いいよ、いいよ、」と百姓たちの方には眼もくれずにつづけた。「私がちやんと言ひつけて置く、……もういいから歸れ、(百姓たちは立ち上らうとしなかつた、) さあ、よろしいといつたぢやないか。さあ、行つた、行つた、言ふことを聽いて、……行けといふに。」

アルカーヂイ・パーウルイチは彼等に背を向けた。「いつまでもいつまでも不満ばかりで。」と彼は齒の間から押し出すやうにいつて、大股に家の方へ歩き出した。ソフロンが後をついて行く。書記は今にもどこか非常に遠いところへ跳んで行かうとしてゐるかのやうに眼を突き出した。百姓頭は水溜りから家鴨を追ひ出す。歎願者はなほ暫くその場に佇つて、互ひに顔を見合はしてゐたが、やがて振り返りもせずに、わが家をさして、靜かに歩いて行つた。

二時間ほど経つた時には、私はもうリャボーヨへ来て、馴染みの百姓のアンバヂストと共に獵に行く支度をしてゐた。私の出發の間際までペノチキンはソフロンに腹を立ててゐた。私はアンバヂストとシュピロフカの百姓のことや、ペノチキン氏のことなど話し出して、あそこの支配人

を知らないかと訊いてみた。

「ソフロン・ヤークヴリッチですか? ……あれつ!」

「ぢや、どんな人間なんだ?」

「犬ですよ、人間ぢやありませんねえ。あんな犬めはクワルスクまで行つたつて見あたるもんぢやありません。」

「何だつて?」

「何しろシュピロフカは、ええと、何ていつたつてな、さう、ペンキン、名儀はさうなんですけれども、本當はあの人があそこを握つてる譯ぢやなくて、ソフロンが握つてるんです。」

「まさか?」

「まるで自分の財産を持つてるやうな顔をしていますんで。そこらの百姓どもは彼奴にみんな借りがあるもんですから、まるで雇人みたいに彼奴のために仕事をしてるんです。荷馬車を引つぱつて遣らされる者もあれば、やれ何のかの……。そりやもうすつかり酷い目に遭はされてます。」

「あそこは地面が少ししかないやうだが?」

「少ししかつて? フルィノフの村からばかりでも八十丁<sup>サヤチナ</sup>歩借りてるし、この村からも百二



十丁<sup>ゴシヤチ</sup> 歩、それに向ふにや自分のが全部で百五十丁<sup>ヒヤチゴ</sup> 歩もあるんですからね。彼奴と来たら地所ばかりを商賣にしてるんぢやなくつて、やれ馬を商賣にする、家畜をやる、煙脂<sup>タバコ</sup>をやる、牛酪<sup>バター</sup>をやる、麻苧<sup>アサヒ</sup>をやる、何をやる、かにをやる……。抜け目のないことといつたら、とても抜け目がなくつて、金もある、あの狸め！ そのうへ悪いことには、百姓どもを無闇に擲ることです。人間ぢやなくつて獸だ。さつきも申しましたけれど、犬も犬、野良犬だ、ほんとに野良犬だ。」

「それでは、どうしてあいつを訴へないんだ？」

「とんでもございません！ 且那から見ればさうは行きません！ 未納がないのですから、いい譯ぢやござんせんか？ けんど、それ、」少し黙つてゐた後で附け加へる「訴へてもして御覽なせえ、いや、酷い目に遭ひますから、……まあ、見さつせえ……。それこそ彼奴がどんなことをするか……」

私はアンチープのことを思ひ出して、見たままのことを話してやつた。

「さあ、御覽なさい、」とアンパチストはいつた、「今にあいつは咬み殺しちやいますよ。男一匹咬み殺しちやいますよ、すつかり。百姓頭はこれからびしびし打ん撲るでせうし。何ちふ運の悪い奴だか、考へてみりや、可哀さうに！ なんて酷い目に遭ふかつていふと……寄り合ひの時にあの支配人と言ひ合ひをしたからですよ。よくよく勘忍袋を切らしちやつたんでせうがね……」

支 配 人

何も大問題ぢやありません！ それなのに、あいつはアンチープをちくりちくりやり出したんです。今に食ひ殺してしまふでせうよ。何せあんな野良犬だ、犬だ、どうか神様、悪態をつくやうですが、お許し下さいまし、——あいつは食ひつく相手をちやんと心得てる。少しでも金があつて、家族の多い年寄り株には、なかなか手を出しません、あの古狸め！ ところが、さうでない奴には容赦はねえ！ だから、アンチープの伴どもを番も来ねえのに兵隊にやりやがった。あの血も涙もねえ。べてん師め、野良犬め、どうか神様、この悪態をお許し下せえ！」

私たちは獵に出かけて行つた。

シレジアのザルツブルーンにて

一八四七年七月



## 事務所

記 日 人 獵

秋のことであつた。私はすでに數時間ものあひだ、鐵砲を擔いで、野原の中をぶらついてゐた。クワルスク街道の旅籠屋には三頭立ての馬車を待たせてあるが、日の暮れるまでには歸り着けさうにもなかつた。それに何分にも冷たい小糠雨が年老いた獨り身の女のやうに朝早くから息もつかせず味氣なく私にうるさく付きまとふので、たうとうどこか近い所へ行つて一時の雨宿りでもしなければならぬといふことになつた。どちらへ足を向けたものかとなほ思案してゐるうちに、ゆくりなくも豌豆の蒔いてある畑の傍に低い假小舎が眼に映つた。小舎の傍へ行つて、藁庇の下を覗きこむと、ロビンソン・クルーソーが無人島のある洞穴の中で見つけたといふ死にかかつてゐる牡山羊を直ぐに思ひおこさせるほど老いぼれた老爺がゐるのであつた。老爺は坐り込んで、朦朧とした小さな眼を半ば瞑ぢて、兎のやうにせかせかと、しかも念入りに（可哀さうに齒が一本もないので）、乾した堅豆を絶えず口の中に轉がしながら、もぐもぐ嚼んでゐた。あまりにそれに氣を取られてゐて、老爺は私の入つて來たのにも氣がつかないほどであつた。

「お爺さん！ おい、お爺さん！」と私は聲をかけた。

老爺は嚼むのをやめて、眉を高く上げ、やつとのことと眼を開けた。

「何よう？」と嘎れた聲で、もぐもぐ言ふ。

「この近邊に、村はあるかね？」と私が訊く。

爺さんは又もや一心に嚼みはじめる。私のいつたことが聴きとれなかつたのである。そこで前よりも一そう大きな聲で、もう一度訊いてみた。

「村かえ？……どんな用があんだね？」

「ほかでもないが、雨宿りがしたいんだ。」

「何よ？」

「雨宿りよ。」

「ああ！（といつて、老爺は日に焦けた頸筋を掻いた。）さあ、そんなら、お前さん、かう行けよ。」とだらしなく手を振りながら、いきなりいふ、「ほ……ほれ、林やまさつて行けば——暫くついて行けば、すぐに道さ出る。その道に構あねえで、右へ右へ、右へ右へと行かつせえ……ほれ、そこがアナニエヲ村になる。さもなけあ、シートフカへ抜けてもいい。」

老爺のいふことはなかなか聴きとれなかつた。髭が邪魔になる上に、舌が思ふやうに廻らな



つたのである。

「お前は一體どこの者だね？」と私は訊ねた。

「何よ？」

「どこの者かつていふのさ。」

「アナニエヲの者だ。」

「それで、ここで何してるんだね？」

「番人してんのよ。」

「それぢや、何の番してるんだ？」

「豌豆のよ。」

私はふき出さずには居られなかつた。

「なあるほど、呑氣な話だなあ、——で、年はいくつになる？」

「知りましねえ。」

「どうやら眼がよく見えないやうだな？」

「何よ？」

「眼がよくないんだらうつてさ。」

「へい、さつぱり耳も聞こえねえことがあんでさ。」

「何、それで、どうして番人が出来るね？」

「そんなことあ、目上の人の知つたことで。」

『目上の人！』と考へて、私は不憫に思ひ、哀れな老爺を眺めた。爺さんは懐ふところにさはつてみて、硬くなつた麵麩のきれはしを取り出すと、落ち窪んだ頬を一そう大儀さうに窪ませながら、子供のやうに、しやぶり始めた。

私は爺さんの教へてくれた通り、林の方へ歩いて、右にまがり、なほ右へ右へと進んで行つて、つひに大きな村に辿り着いた。村には新式の石造の教會がある。新式といふのはつまり、圓柱の並んでゐること、そこにはやはり圓柱のある広い地主の邸やしきもあつた。更に遠くから、降る雨の細かな網を透して、煙突の二本ある板葺の小さな家がほかの家よりも一段と高く見受けられたが、それは恐らく百姓頭の住居らしかつた。百姓頭のところへ行けばサモワールや、お茶や、砂糖や、あまり酸つばくならないクリームくらはあることと思つて、その方へ歩いて行つた。寒さに顫へる犬を連れて、段々を上り、玄關へ行つて、扉をあけてみると、田舎家に付きものの諸道具はなく、書類を堆高く積み重ねた幾つかのテーブルや、紅い二つの戸棚や、汚れたインク壺や、重さ一ブードもある吸取砂を入れた錫の函や、おそろしく長い鷲ペンなどが見える……。一つのテ



「ブルのうへには、ぶくぶく脹れて病人らしい顔附をし、眼は甚だ小さく、脂ぎつた額に、もみ上げがどこまでも續いてゐる二十歳くらいの若者が腰をかけてゐた。型のごとく、鼠いろの南京木綿の上衣きんぎょの、襟や腹のあたりが、着古して光つたのを着てゐる。

「何か御用ですか？」と、だしぬけに鼻面をつかまへられた馬のやうに頭を振り立てて、若者はかう訊ねた。

「こちらは執事さんのお住居ですか……それとも……」

「ここはお邸やしの第一事務所です。」と彼は私の言葉をさへぎつた、「それで私はいま當番なんのでして……。あなたは看板を御覽にならなかつたんですか？ そのために看板を掛けとく譯なんですがね。」

「どこか、着物を乾かすところはありませんか？ この村にどこか、サモワールのある家は無いでせうか？」

「サモワールがなくなつてどうしませう。」と鼠色ネズミイロの上衣ウエを着た若者は容體カラダぶつて應酬した、「サモワールならば、チモフェイ長老さんのところか、でなければ雇人の家か、でなければナザール・タラスイチのところか、鳥番のアグラフェーナのところへでもおいでなさい。」

「お前、誰と喋つてんだい、この馬鹿野郎？ 眠れねえや、この馬鹿！」と隣りの部屋からど

なる聲が聞こえる。

「今、どこかの旦那が見えて、どこか着物を乾かすところはないかつて仰つしやるんで。」

「どんな旦那だい？」

「よくは知りません。犬と鐵砲を持つてなさる。」

隣りの部屋に寢臺の軋む音がする。扉が開いて、肥つた、背の低い、五十ばかりの人が入つて來た。牡牛のやうに太い頸をして、團栗眼どんぐりまなこで、頬がおそろしく圓く、顔ぢゆうがてら光つてゐる。

「どういふ御用ですか？」と私に訊く。

「身のまはりを乾かしたいので。」

「ここぢや駄目ですよ。」

「事務所とはつい存じませんで。ですけども入費はきつと拂ひますから……」

「いや、なに、それや此處だつて出來ないことはありませんがね。」と肥つた男は私の言葉を引きとつた、「まあ、こちらへお入りになりませんか。(かういつて、自分の出て來たのとは違つた部屋へ私を案内した。) ここでよろしうございますか？」

「結構です……。ところでクリーム入りのお茶は願はれませんかしら？」



「畏まりました、唯今すぐ。お支度をおとりになつてお休みになつて居れば、その間にぢきに  
お茶の支度が出来ますから。」

「時に、これはどなたの持村で？」

「ロスニャコワ夫人、エレーナ・ニコラエヴナ様のものです。」

彼は出て行つた。私はあたりを見まはす。この部屋と事務室とを隔ててゐる仕切り壁に沿つて、  
大きな革張りの長椅子があり、往來に面した、たつた一つの窓の両側には背當の非常に高い、こ  
れも革張りの椅子が二つ置いてあつた。薔薇の花の模様をついた緑いろの壁紙を張りつめた壁に  
は大きな油繪が三枚かかつてゐる。一枚のには青い頸輪をはめたセッター犬が描いてあつて、頸  
輪には『これぞこれ吾が楽しみ』と書いてある。犬の足もとには川が流れ、川の向ふ岸の松の樹  
かげには、度はづれて大きい兎が耳を立ててうづくまつてゐる。次の繪には、二人の老人が西瓜  
を食べてゐて、西瓜のかげに遠く、『満足の殿堂』と刻まれた希臘風の柱廊が見える。三番目の  
繪には足を縮めた (Gen raccourci) ポーズで、赤い膝株に、ひどく肥つた踵をした半裸體の女人  
が描かれてゐる。私の犬は何らの躊躇もなく、一方ならぬ骨折りをして長椅子の下へ潜り込んだ  
が、よほどひどい埃でもあつたと見えて、さかんに鼻をくくんく鳴らしてゐる。私は窓ぎはへ行  
つてみた。通りを横切つて、地主の邸から事務所へ斜に板を渡してあるが、まことによい思ひつ

きである。あたりはここいらの黒土の地盤へもつて来て、降りつづく雨のために、おそろしい泥  
濘になつてゐたからである。通りを背にして立つてゐる地主の邸の邊には、地主の屋敷のあたり  
につきものの風景が望まれる。色のあせた更紗の上着を着た女中があちこち駈けずり廻つてゐた  
り、下男が泥濘の中をのろのろ歩きながら、ふつと立ちどまつては、物思はしげに背中を掻いた  
りしてゐる。繫がれた小頭の馬は物憂げに尾を振り、鼻面を高くさし上げて籬を噛つてゐる。牝  
鶏はこっこつと鳴き、肺病やみの七面鳥たちは絶えず呼び合つてゐる。おそろく湯殿であらう、  
薄暗い崩れかかつた離れ家の上り段には、ギターをもつた屈強な若者が腰をおろして、向ふ見ず  
な調子で、

ええ——花のみやこをあとにして

わたしや荒野の草となる

などといふ有名な小唄をうたつてゐる。

肥つた男が私のゐる部屋に入つて来た。

「お茶を持つて参りました。」と氣持のよい微笑をうかべながらいふ。



事務所の當番をしてゐる例の鼠色ネズミイロの上衣カウチを着た男が古めかしい骨牌臺オシロイのうへにサモワールサモワールや急須キシュや、缺けた皿に載せたコップコップや、クリームクリームの壺ヒラや、燧石ヒラのやうに堅いボルホフボルホフ麵麩メンゴの束クニをずらりと並べる。肥つた男が出て行く。

「あれは何、」と私は當番に訊く、「執事？」

「いいえ、さうぢやございません。もとは會計の主任でございましたが、唯今では事務所長格に昇進いたしました……」

「すると、こちらには執事といふやうな人はゐないんですか？」

「いいえ、居りません。ミハイル・ヴァイクロフといふ支配人が居りまして、執事は居りませぬのです。」

「では管理人は？」

「それはむろん居ります。リンダマンドルといふ獨逸人で、名前はカルロ・カルルイチと申しますが、——これは別に管理の方はやつて居らんです。」

「では誰が管理をしてゐるんです？」

「奥様が御自身で。」

「まあ、さう！……それで何かね、この事務所には皆さん大ぜいゐるの？」

「六人をります。」

「誰と誰？」と私は訊ねる。

「まあかうです。先づワシーリイ・ニコラエキツチ、これが會計の主任、それから事務員のピョートル、またピョートルの弟のイワン、これも事務員、もう一人のイワン、これもまた事務員、コスケンキン・ナルキーズフ、これもやはり事務員、それにこの私と——なかなか全部は數へ切れません。」

「多分、こちらには召使ひも大ぜい居ることだらうね？」

「いいえ、大ぜいといふほどでもありませんが……」

「では、どれくらゐ？」

「ざつとまあ、百五十人くらゐ寄つてませうね。」

二人は一寸のあひだ黙つてゐた。

「さあ、どうだらう、君は書く方は巧いんだらうね？」と私はまた始める。

若者は相好をくづして笑ひ、頷いて事務所の方へ行つて、一ぱいに字の書いてある一枚の紙片を持つて來た。

「これが私の書いたものです。」と相變らず微笑みながらいふ。



見ると灰色の四つ切りの紙には、綺麗な、しつかりした手つきで次のやうに書いてあつた。

達示

アナニエヲ邸第一事務所ヨリ支配人ミハイロ・ヴィクトロフニ達ス、第二〇九號  
達示受領ノ上ハ即刻次ノ件ノ審理ヲ要ス、昨夜酩酊ノ體ヲ以テ、如何ハシキ俗謠ヲ放吟シ、英  
國庭園ニ紛レ入り、佛蘭西人家庭教師アンジェーヌ夫人ノ安眠ヲ妨害シタルハ何者ナリヤ、又、  
守衛ハ何モノカヲ見ザリシヤ、尙庭園ノ守衛ニハ何人ガ當リ居リテ、斯様ノ失態ヲ許容セシニ  
ヤ。以上記載ノ件ニ關シ詳細取調べノ上即刻事務所ニ報告スベシ

事務所長 ニコライ・フゾオストフ

この達示には「アナニエヲ邸第一事務所之印」といふ大きな定紋形の印章が捺してあり、その下には「嚴密ニ執行ノ事、エレーナ・ロスニヤコワ」といふ但し書が記されてあつた。

「これは奥様の直筆かね、え？」と私は訊ねた。

「むろん直筆でございます。いつも直筆でして。さもないと、達しが有効になりませんので。」  
「さあ、それでは何だね、この達しは支配人の所へ送りつけるのだね？」

「さうぢやございません。向ふからやつて来て、讀むのです。いや、實は讀んで聞かして貰ふのです。何しろこの支配人は字を知りませんので。」(當番はまたちよつと黙つてしまふ。)  
「ですけど、如何でございますう。」と微笑みながら附け加へる、「よく書けとりませうか？」

「よく出來てる。」  
「實を申しますと、文を作つたのは私ぢやありません。この方はコンスケンキンが名人でして。」

「え？……それではここのお達しは、先づ仲間うちで下書きを作るのかね？」

「さうですとも、でなければ、どうして書けませう？ ぶつつけに綺麗になんか書けませんですよ。」

「それで、君は給料はいくら貰つてる？」と私は訊いてみた。

「三十五ルーブリと、別に靴代として五ルーブリ。」

「それで君は充分かね？」

「それはもう、充分ですとも。私等が方では誰もが事務所へ入れる譯ではございませんし。正直のところ、これも全く神様のお蔭でして、叔父がこちらの家令をしますんで。」

「それで結構かね？」



「結構でございますとも。ですが、實を申しますと、」と彼は溜息をつきながら続ける、「例へば、何ですね、商人のところへ奉公しますと、同じ私等が仲間でもずつとましなんでしょう。商人のところにある連中は、大へんにいいのですよ。昨晚もヴェネツから商人が参りまして一しよに來たその手代が話してましたが、……そりや好いんですよ、好いの位ぢやありません。」

「ぢや何かね、商人の方が給料をよけいに呉れるんだね？」

「とんでもありません！ 商人に給料のことなんか持ち出したら、直ぐにお拂ひ箱ですよ。何でも商人のところでは、のるかそるかで行かなくちやなりません。さうすれば食べさせて、飲まして、仕着せもしてくれれば、何でもしてくるんです。うまく気に入らさへすれば、その上のこともしてくれますし……。給料のことなんぞは！ そんなものはまるで要らないくらゐですよ……。それに商人は、われわれ風情と同じやうに、露西亞風に、あつさり暮らしてますから、一しよに旅なんぞしても、主人がお茶を飲めば、こちらで飲める。向ふが食べれば、こちらで食べるといふ譯で。商人は……比べものにはなりませんね、商人は旦那衆とは譯がちがふ。商人は馬鹿な眞似はしない。まあ、怒つたところで、拳固の一つもくれれば、事が済んでしまひます。小うるさく何のかんの言つたり、皮肉を飛ばしたりなぞしませんし……。ところが旦那衆と一しよになつたら、それこそ災難ですよ！ 何をしてもお氣に召さないで、あれもいけない、あれも

御意に召さないと来るんですからね。一寸まあ水を入れたコップか食べ物を持つて行くとします。すると『ああ、この水は臭い、この料理は臭い！』と、かうです。仕方がないから持つて出て、扉の外に暫く立つてみて、またそのまま持つて行くと、今度は『まあ、これなら宜しい、まあ今度は臭くない。』てんでせう。それに奥様方と來たら、それこそお話にならないんで、……それからまたお嬢さま方と來たら！……」

「フェーヂュシカ！」事務所の方から肥つた男の聲がかかる。

當番は足早に出て行く。私はお茶を一杯飲み乾して、長椅子の上に横になつたが、そのまま眠りこんでしまつた。私は二時間ばかり眠つた。

眼が覺めて起きあがらうとは思つたが、身體がだるくてたまらない。眼をつむつたけれど、もう二度と眠りはしなかつた。仕切り壁の向ふの事務所ではひそひそ話をしてゐる。私は聞くともなしに耳を傾けた。

「さうでございます、さうでございます、ニコライ・エレメーキツチ、」と一人がいつてゐる、「さうでございますとも。そいつを勘定に入れない譯に行きません。行きませんが、全く……。ふむ！」(話手は咳をした。)

「もうわしに任しときなさいよ、ガヴリーラ・アントーヌイチ、」と先ほどの肥つた男が言葉



を返す、「この仕きたりなら知らねえことあるもんかね。まあ、考へても見さつせ。」

「そりあ、あんたが知らんで誰が知る、ニコライ・エレメーキッチ、あんたはここではいはば御大將だ。さあ、それでどうしたもんでがせう？」聞き覚えのない聲の主はつづける、「どう決着をつけたもんでがせう、ニコライ・エレメーキッチ、それを聞きたいもんですな。」

「どう決着をつけるつて、ガヴリーラ・アントーヌイチ？ それはつまり、あんた次第ですよ、あんたは何だか氣乗りがしないやうですね。」

「とんでもない、ニコライ・エレメーキッチ、何をおつしやる？ 商賣するのがわし等の渡世だ。わし等の商賣は賣り買ひすることだ。いはば、それで立つてゐるんですよ、ニコライ・エレメーキッチ。」

「そんならブードハルーパーで。」と力を入れて肥つた男がいふ。  
溜息が聞こえる。

「ニコライ・エレメーキッチ、それはあんまり高いでせう。」

「ガヴリーラ・アントーヌイチ、それよりほかにあ仕方がねえ、神様の前に出たつて、仕方がねえものは仕方がねえ。」

沈黙がやつて来る。

私はそつと身を起こして、仕切りの隙間から覗いてみた。肥つた男はこちらを後ろにして坐つてゐる。それに對ひ合つて、瘦せこけて、蒼白い、亞麻仁油でも塗つたやうな顔をした四十恰好の商人が腰かけてゐる。彼は絶えず髯を撫でながら、かなり忙しさに瞬きをしては唇を歪める。

「今年の出来は、實際、すばらしいものぢやござんせんか、」と彼はまた言ひ出した、「私もこちらへ来る途々、ずつと見とれてましたよ。ヴォローネシュからかけてこの邊一帶、とてもすばらしい出来で、全く一等物でござんすよ。」

「たしかに出来は悪くないな、」と事務所の頭は答へる、「けども、ガヴリーラ・アントーヌイチ、あんたも知つての通り、秋の満作、春のまにまにつてこともあるぢやありませんか。」

「いや、それは全くさうですともね、ニコライ・エレメーキッチ、何もかも神様の御意のままだ、あんたの仰つしやる通りですよ、……時に、どうやらお客さんが眼を覺ましたやうでござんすが。」

肥つた男は振り向いて、……耳を澄ました……

「いや、眠つてる。尤も、ひよつとすると、それ……」

彼は戸口に近づいた。

「やつぱり眠つてる。」と繰り返して、もとの席にかへる。



「さあ、そこでどうしたもんでせう、ニコライ・エレメーキッチ？」と商人は又しても始める、「こんなつまらんことは早く片づけなくちやなりません……。では、仰つしやる通りにしませう。ニコライ・エレメーキッチ、その通りにしませうよ、」と絶えず瞬きしながら続ける、「鼠札二枚\*しらの白札一枚があんたの役得として、向ふへは（彼は邸の方を顎でさして）、ブード六ルーブリ半として。それで手打はどうです？」

「鼠札四枚だ。」と事務所の頭は答へる。

「では、三枚！」

「鼠札四枚の白札なし。」

「三枚ですよ、ニコライ・エレメーキッチ。」

「三枚半、もうそれより一カベイカも引きなし。」

「三枚ですつて、ニコライ・エレメーキッチ。」

「もう言ひつこなし、ガヴリーラ・アントーヌイチ。」

「まあ、何て剛情こつこな人なんでせう、」と商人は呟いた、「こんなことなら、いつそ奥様とぢかに決着つけよう。」

「勝手になさるがいい。」と肥つた男は答へる、「もつと早くさうすりやよかつたのに。いや、

實際、何もよけいなことを気にするがものはねえでせう？ ……その方がよつほど好い！」

「いやもう澤山、澤山、ニコライ・エレメーキッチ。つい氣が立つたもんだから！ しかし、あんなことは一寸いつてみただけの話ですよ。」

「いや、なあに、全くのところ……」

「もう澤山だつていふのに……。冗談にいつたんだつて言ふのに。さあ、取つて下せえ、三枚半。お前さんにかかつちや堪まんねえ。」

「四枚もらふ筈だつたのに、馬鹿をした、急いいだたために。」と肥つた男が呟く。

「ぢあ、向ふのお邸へは六ルーブリ半でござんすよ、ニコライ・エレメーキッチ。麥は六ルーブリ半で買ふ勘定ですよ？」

「六ルーブリ半つて疾うにきまつてる。」

「さあ、それでは手打ちだ、ニコライ・エレメーキッチ、（商人は擴げた指で事務所の頭の掌を打つた。）ぢや、さよなら！（商人は立ちあがつた。）さて、ニコライ・エレメーキッチ、これから奥様のところへ參つて、お取次を願つて、『ニコライ・エレメーキッチさんと六ルーブリ半でお話をお決めたしてござりまする』と、さう申しあげませう。」

「まあ、さう申し上げて下さい、ガヴリーラ・アントーヌイチ。」



「さあ、それではお取んなすつて。」

商人はあまり厚くない札束を事務所の頭に手渡し、お辭儀をして、頭を振つて二本の指で帽子をつまみ上げ、肩をすくめて、身體をくねらし、長靴をいかにもお上品に軋ませながら出て行つた。ニコライ・エレメーキッチは壁のところへ行つて、どうやら商人から渡された紙幣をあらため出した様子であつた。やがて扉のかげから頬髯の濃い、髪の赤い頭が覗いた。

「え、どうだつた？」と頭が訊く、「萬事、うまく行つたかい？」

「ああ。」

「いくらだ？」

肥つた男は忌々しさうに片手を振つて、私のみる部屋を指さした。

「ああ、それはよかつた！」頭はかう答へて見えなくなつた。肥つた男はテーブルのそばに歩み寄つて腰をおろし、帳簿をひろげ、算盤を取り出してばちばち弾き出したが人差指を使はずに中指を用ひた。その方が一そう體裁がよいからである。

當番が入つて來た。

「何用だい？」

「ゴロブリョーキからシードルが參りました。」

「あ！ それぢや通して。ちよつと待つた、待つた……。よその旦那がまだおやすみか、それともお眼覺めになつてゐるか、見て來ておくれ。」

當番は用心深く私の部屋に入つて來た。私は枕の代りになつた獲物袋に頭をのせて、眼をつむつた。

「おやすみです。」と事務所へ戻つて行つて當番がささやいた。

肥つた男はぶつぶつ言つてゐる。

「それぢや、シードルを通して。」彼はやうやく言ふ。

私はまた起きあがつた。背の高い三十恰好の百姓が入つて來た。逞しさうで頬が赤く亞麻色の髪をして、短い縮れた髯のある男である。彼は聖像に祈りを上げ、事務所の頭にお辭儀をして、帽子を両手で持つて、腰をのばした。

「シードル、今日は。」と肥つた男は算盤をばちばちやりながら言葉をかける。

「今日は、ニコライ・エレメーキッチ。」

「さて、道はどんな鹽梅だね？」

「それほど悪かねえですよ、ニコライ・エレメーキッチ。泥濘もほんの少しで。」(百姓はゆつくりと、あまり高くない聲でいふ。)



「細君は丈夫かね？」

「むろん丈夫でやんすとも！」

百姓は溜息をついて、片足を前へ出した。ニコライ・エレメーキッチは鷲ペンを耳に挟んで、鼻をかんだ。

「どうだ、何の用事で来たんだ？」と彼は碁盤縞のハンカチをポケットにしまひながら訊ねる。

「實はね、ニコライ・エレメーキッチ、お邸で私等が方の大工をよこせつて仰つしやるもんですかね。」

「それで何かね、お前の方に大工が居らんといふのかね、え？」

「大工がゐねえなんてことはありませんよ、ニコライ・エレメーキッチ。私どもん所は御承知のやうに森ん中にあんですかね。けんども何しろ今は仕事の節ですかねえ。」

「仕事の節だつて！ それはさうと、他人さまの仕事は喜んでするが、奥様の仕事をするのは厭だつていふんだね、……どつちにしたつて同じぢやないか！」

「仕事するのに變りはねえです、全く、ニコライ・エレメーキッチ……けんども、その……」

「それで？」

「手間賃がまことに……その……」

「何も今さら珍しいこつちやねえ！ 我儘をいふにも程があるよ。とんでもねえ！」

「それに、もう一つ言はしていただきますと、ニコライ・エレメーキッチ、一週間の仕事しかないのに、一月も引つ張られる。材料が足りないといつては引つ張られるし、さうかと思ふと、お庭の徑の掃除に追ひ使はれるし。」

「そんなこと、何も珍しかねえ！ 奥様が御自分でお吩ひつけになることだもの、俺にしろ、お前にしろ、とやかくいふ筋はねえんだ。」

シードルは黙り込んだ。そして足を交る代り出しかへて休み始めた。

ニコライ・エレメーキッチは首を横にかしげて、一心に算盤を弾き出した。

「私どもの村の……百姓どもが、……ニコライ・エレメーキッチ……」とシードルは一言一句いひ淀みながら、つひに口を切つた。「あなたによろしく申してくれろつて、……それで、……ここに、……その……」(彼は大きな手を外套の内がくしへさし入れて、赤い花模様のあるハンカチの包みを取り出しにかかつた。)

「何だつていふんだ、何だつて、この馬鹿、氣でもふれたのか、え？」と肥つた男は呆れてゐる百姓を押し出すやうにしながら言葉をつづける。「家へ行つて嬬に言つてくれ、……お茶くらゐは出すだらうからな。わしもいま直ぐ行くから、まあ、さきに行つててくれ。まあ、いいから



行つててくれろつてことよ。」  
シールドルは出て行つた。

「何ちふ……熊みてえな野郎だらう！」と、出て行つたあとで呟いて、頭を振り、また算盤をばちばちやる。

不意に道の方で「クープリヤ！ クープリヤ！ クープリヤは押しころばせぬぞ！」といふ叫び聲が聞こえ、また上り段のところからも聞こえて来る。すると間もなく、背の低い、見たところ肺病にでも罹つてゐるらしい男が事務所へ入つて来た。非常に長い鼻をして、大きなじつと動かない眼をし、ひどく高慢ちきな様子をしてゐる。ふらし天の襟をかけ、極めて小さな卸のついたアデライド色——すなはち私たちの方でいふオデルロイド色の古ぼけた、ぼろぼろのフロックを着てゐる。彼は肩に薪の束をかついでゐる。五人の下僕がこの男を取り巻いて、口々に「クープリヤ、クープリヤ！ クープリヤは押しころばせぬぞ！ クープリヤが燧燼焚き、燧燼焚きに出世した！」と叫んでゐる。しかし、ふらし天の襟のついたフロックを着た男は自分の仲間が亂暴なことをいつても耳も藉さず、顔のいろひとつ變へなかつた。先づ歩調を整へて、燧燼のところへ歩み寄り、肩の荷を投げ下ろして、腰をのばし、うしろのポケットから煙草入れを取り出すと、眼を大きく見張つて燃えさしの混つてゐる金花菜オドニツクの葉を鼻につめ始めた。

この騒々しい連中が入つて来ると、肥つた男は肩をひそめて、席を立つたが、その仔細を知ると、微笑んで、ただ喚き立てるのではない、隣の部屋には獵をするお方が眠つて居られるのだから、といふばかりであつた。「獵をするお方かたつてどんな人さ？」と二人ばかりの者が聲を揃へて訊ねた。

「地主様よ。」

「へえ！」

「騒ぐなら騒げ。」と、ふらし天の襟をつけた男が両手を擴げながらいふ、「何したつてかまあねえ！ 俺に觸らなけりあ。俺あ燧燼焚きに出世したんだ……」

「燧燼焚きに！ 燧燼焚きに！」とみな面白きうに後をつける。

「奥様のお達しだ、」と彼は肩をそびやかしてつづける、「けんど、まあ待つててみる、……今にお前らは豚番にされるから。俺はこれでも仕立屋で、モスクワ一流の師匠とここで仕上げた腕で、大將方てんしやうがたの仕立までしたんだ、……こいつばかりは抜き差しなるめえ。一體、手前ら、何を威張るんだ？ ……何を？ この穀つぶし、油蟲、それだけの價値かちやくしかありやしねえ。俺なんざ、ここを追ひ出されたつて、——餓死うへじはしねえ、のたれ死なだれじはしねえ。俺に旅行免狀をくれてみる、……立派に年貢を持つて来て、且那方を喜ばせるぞ。それなのに手前らはどうだ？ 蠅みてえに、



くたばる、くたばる、それが關の山だ！」

「いい加減に出まかせ言つてけつかる、」と痘痕面あきたづらで、眉も睫毛も眞白く、赤いネクタイをつけ、兩臂の破れた着物を着た若者が口を入れた、「手前、旅行免狀を貰つて行つた癖に、且那樣にや年貢をお目にかけてたこともねえし、手前でも總一文も稼ぎもしねえで、やつとこさで、くたびれ足を引き摺つて歸つたんぢやねえか。それからつていふもの、年百年ぢゆう着たきり雀すずめであるんだ。」

「そいつは仕方がねえ！ コンスタンチン・ナルキーズイチ、」とクープリヤンが言葉を返す、「人間は女に惚れたが最後、うかぶ瀬はねえんだ。お前もまあ俺がしただけのこたあ、してみろよ、コンスタンチン・ナルキーズイチ、それから俺のことを兎や角いふがいいんだ。」

「女に惚れたつて、一體どんな代物しろものを見つけたんだ！ きつと化け物みてえな阿魔だらうよ！」

「いやいや、そんなこと言ふもんぢやねえ、コンスタンチン・ナルキーズイチ。」

「誰がほんとにするもんか？ だつて、俺はあの女を見たんだよ。去年、モスクワで、この二つの眼で、ちやあんと見たんだ。」

「去年は彼女おんなは實際、器量が少し落ちてたんだが。」とクープリヤンが言譯をする。

「えいや、みんな等、」と背の高い瘦せぎすな男が、蔑むやうな、ぞんざい聲で言ひ出した。

顔中に面胸おもとの吹き出た男で、毛を縮らして、香油をつけてみると、恐らく侍僕であらう。「一つクープリヤン・アフナーシイッチに歌をうたはせようぢやないか。さあ、おい、始めた、クープリヤン・アフナーシイッチ！」

「さうだ、さうだ！」と他の連中も尻馬に乗る、「アレクサンドラには墳り役だ！ クープリヤンには持つて來いだ、申し分がねえ。さあ、歌つたり、クープリヤン！ ……アレクサンドラ、うまいぞ！（下僕たちは折々、男のことをいふ場合にも、一そつ優しみを加へるために女性の語尾aを用ひる。） さあ歌つたり！」

「ここは歌うたふ場所ぢやねえ、」とクープリヤンはきつぱりと應酬する、「ここはお邸の事務所だ。」

「それがどうしたんだ？ 手前、事務員にでもならうと目をつけてんだな、きつと、」無駄な笑ひ聲を立てながら、コンスタンチンが答へる、「それに相違ねえ！」

「みんな御主人様のお心まかせだ。」と哀れな男がいふ。

「そうれ見ろ、とんでもねえところへ目をつけやがつて、ちえつ、何ちふ野郎だ？ わあ！ わあ！ ああ！」

一同どつと大笑ひする。中には跳ねあがる者もある。殊に一番大きな聲で囃したのは十五ばか



りの少年で、恐らくは下僕仲間の幅利きの息子でもあらう。青銅の釦のついたチョッキに、薄むらさきのネクタイをつけ、もう一人前に小さな腹を突き出してゐる。

「ね、本當のことをいつてみい、クープリヤ。」と、見受けたところ、面白がつて聞いてゐるうちにすつかり気が柔らいだらしいニコライ・エレメーキッチがいい氣になつて、言葉をかける。「どうだい、燧燼焚きは厭な商賣だらうな？ どう見ても、つまらん仕事だらう？」

「え、何をおつしやるんです、ニコライ・エレメーキッチ。」とクープリヤがいひ出した、「あんたも今ぢやお邸の事務所（むち）をしてなさる、實際。それに違えはねえけれど、あんただつて元は追つ拂はれて、やつぱり百姓小屋に暮らしてたんぢやねえか。」

「氣をつける。誰の前へ出て物いつてるんだ。」肥つた男は、むつとして遮つた、「手前のやうな馬鹿だから、みんなが冗談口の一つもきいてやつてるんだ。この阿呆奴、胸に手をあてて考へてみる、手前のやうな馬鹿を相手にして下さるだけでも有難いと思へ。」

「ついつつかり舌がすべつたんで、ニコライ・エレメーキッチ、堪忍して下せえ……」

「そりやさうだらうよ、舌がすべつたんだらうよ。」

扉が開いて、小姓（こじやう）が駈け込んで来た。

「ニコライ・エレメーキッチ、奥様のお招（ま）びでございます。」

「奥様のところには誰がゐる？」と小姓（こじやう）に訊く。

「アクシーニヤ・ニキーチシナと、ヴェネフから参つた商人と。」

「直ぐに参りますつて。それから、お前たち。」と説きつけるやうな調子でつづける、「新米の燧燼焚きを連れて、向ふへ行つた方がいいぜ。萬一、獨逸人（どいつじん）でも来ると、すぐに言ひつけられるぞ。」

肥つた男は髪の手を撫でつけ、フロックの袖に殆んどかくされてゐる手を口にあてて、咳拂ひをして、釦をかけ、大股に奥様のところに出かけて行く。暫くすると、連中一同、クープリヤンを連れて後からぞろぞろとついて行つた。後に残つたのは古馴染の當番ばかりであつた。彼は鷲ペンを尖らしにかかつたが、椅子に腰をかけたまま寢込んでしまつた。蠅が四五匹、折こそよしとやつて来て、口のまはりにとまる。蚊がまた一匹、額にとまつて、先づきちんと脚をひろげ、ゆるゆるとその針を柔らかな肉にすつかり挿し込んだ。さつきの頬髯のある赤毛の頭が又もや戸口に現はれて、しきりに中を覗いて見たが、やがて事務所へ入つて来た。顔も醜いが、身體も不細工な男である。

「フェーヂュシカ！ おい、フェーヂュシカ！ いつも眠つてる！」と頭（あたま）がいふ。

當番は眼を開けて、椅子から立ちあがつた。



「ニコライ・エレメーキッチは奥様とこへ行つたのかい？」  
「さうです、ワシーリイ・ニコラエキッチ。」

「ははあ！なるほど！」と私は考へた、「これだな、會計主任は。」

會計主任は部屋の中を歩き出した。尤も、歩くといふよりはむしろ抜き足差し足、まるで猫そつくりであつた。肩の邊には裾のきはめて狭い、古ぼけた黒の燕尾服がだぶついてゐた。片方の手を胸にあてて、もう片方の手で高く盛りあがつた窮屈さうな、馬の毛づくりのネクタイをつかんで、やうやくのことで首を廻してゐる。音のしないキッドの靴を穿いて、かなり氣をつけて歩いてゐる。

「けふ、地主のヤグーシキンがあなたを訪ねて見えましたよ。」と當番が付け加へる。

「ふむ、訪ねて來たつて？ どんなことを言つたね？」

「今晚、チュチュエーレフへ行つて、あなたをお待ちしてゐるとかつて。ワシーリイ・ニコラエキッチと話したいことがあると仰つしやつて、どんな御用事だか、それは仰つしやいませんでした。もうワシーリイ・ニコラエキッチには分かつてると申して。」

「ふむ！」と會計主任は答へて、窓のところへ近づいた。

「どうだ、ニコライ・エレメーキッチは事務所かね？」玄關に大きな聲が聞こえる。と思ふと、

背の高い、怒つてでもゐるやうな風をした男が闖を跨いで入つて來た。不細工ながら、表情に富んだ、元氣のある顔をして、かなりさつぱりした服装をしてゐる。

「ここにはゐないのか？」とあたりをさつと見廻して訊ねる。

「ニコライ・エレメーキッチは奥様のところゐる、」と會計主任が答へる、「一體、何の御用で、パーウエル・アンドレーキッチ、私が聞いときませう……、どんな御用で？」

「何の御用事だ？ 何の御用事だか聞きたいのか？（會計主任は力なく頷いた。）俺は彼奴をとつちめてやりたいのだ。あの碌でなしのでぶ公め、要らない藤口をきく卑怯者め……。俺はあいつに、せいぜい藤口をきかしてやる！」

パーウエルは椅子にどつかと腰をおろす。

「何を、何をいつてるんだ、パーウエル・アンドレーキッチ？ 靜かにしなさいよ、見つともないぢやないか？ ちやんと考へてみなさいよ、相手が誰だか、パーウエル・アンドレーキッチ！」と會計主任はおどおどしながら言つた。

「相手が誰だかつて？ いくら彼奴が事務所の頭になつたからつて、何がおそろしいもんか！ いや、全く申し分のねえ偉い代物をお引き上げになつたもんだ！ 全く何のこたあねえ、豚に眞珠といふもんだ！」



「結構、結構、パーウエル・アンドレーキッチ、もう結構だ！ そんなことは止しなさい……、何てつまらないことを言ふんだらう！」

「へん、お狐どの、また尻尾を振り始めたな！ ……ぢやあ、彼奴を待つてよう……」とパーウエルはふりふりしながらいつて、テーブルを一つ叩いた、「いや、彼奴がやつて来る、」と窓の方に眼を向けて付け加へる、「噂をすれば影とやら、これはこれはようこそ御入来だ！」（彼は立ちあがつた。）

ニコライ・エレメーキッチは事務所に入つて来た。彼の顔は大恐悦といふ顔であつたが、パーウエルを見ると、いささかどぎまぎした。

「今日は、ニコライ・エレメーキッチ、」とパーウエルは意味ありげに言つて、徐ろにニコライの方へ寄つて行つた。

事務所の頭は何ひとつ返事をしなかつた。戸口に商人の顔が見える。

「なんで返事をなさらんのですね？」とパーウエルは詰めよつた、「尤も、いや、……よさう……」と付け加へる、「これぢや話にならん。どなり散らしたんぢや何にもならねえ。いや、あんたも打ちとけて、よく話してくれ。ニコライ・エレメーキッチ、何だつて、あんたは俺をいぢめるんだ？ 何だつて俺を潰したがるんだ？ さあ、聞かしてくれ、聞かしてくれ。」

「ここはお前さんと兎や角いふべき所ぢやないし、」と事務所の頭はやや興奮して答へる、「それにその時機でもないし。ところで、正直にいふと、ただ一つ不思議なことがあるんだ。わしがお前さんを潰さうとしてるの、いぢめるのつて、どうしてそんなことを思ひついたんだ？ 一體、このわしがどうしてあんたをいぢめられる？ この事務所にあんたが勤めてる譯ぢやないんだし。」

「無論だとも！」とパーウエルが答へる、「この上そんな目に遭つてたまるもんか！ けんど、何だつて白ばつてくれんだ、ニコライ・エレメーキッチ？ ……俺のいふことは、ちやんと解かつてくるくせに。」

「いや、解からん。」

「いや、解かつてる。」

「いや、神に誓つて解からん。」

「もう一度神に誓つて！ どうしても解からんていふんなら、どうだね、さあ、神様が怖くないのかね！ さあ、何だつてお前さんは、あんな可哀さうな娘をあんな目に遭はせる？ あの娘をどうしようつていふんだね？」

「誰のことを言つてるんだ、パーウエル・アンドレーキッチ？」と肥つた男は呆れたやうなふ



りをしていふ。

「何と！ きつと御存じあるまいて？ 俺はタチャーナの話をしてるんだ。ちつたあ、神様を怖ろしいと思つたがいい、一體、何の恨みなんだ？ 恥つてもものも考へたがいい。お前さんは女房のある身で、俺ぐらゐの大きな子供まであるんぢやないかね、俺はほかぢやあねえ……一人前に女房を貰ひたいつていふんだ、……俺は疚しいことはしてゐないんだ。」

「それで何でわしが悪いんだ、パーウエル・アンドレーキッチ？ お前さんたちが一緒にいるのを奥様がお許しにならないんだ、御主人様の思召しぢやないか！ 俺は一體どうすればいいんだ？」

「どうすればつて？ それぢや、あんたはあの女中頭の鬼婆としめし合はしてなかつたつて、え？ 要らない蔭口はきかないつて、え？ 聞かして貰ひてえ、あの頼りねえ娘つ子を何だのかんだのつて、ありもしねえことを言はねえつていふんだな？ あの娘が洗濯係からお勝手の皿洗ひにされたのは、お前さんのせみぢやないつていふんだね？ それに、打つたたかれたり、棒蒺の着物なんか着せて置かれるのも、あんたのせみぢやないんだね？ ……ちつたあ、外聞つてことも考へたらいい、いい年をして！ まあ、考へてみたらいい、中氣で、いつ何時やられるかも知れねえのに、……おつつけ、神様のお裁きを受ける身なんだ。」

「減らず口も休み休み叩くがいい、パーウエル・アンドレーキッチ、……勝手な熱をふかして貰へるのも、永いことはあるまいよ！」

パーウエルはかつとなつた。

「何だと？ 俺を脅かすつもりか？」と怒氣を含んでいふ、「俺が貴様を怖がつてるとでも思ふのか？ お氣の毒だが、お生憎さまだよ！ 何を貴様なんぞ怖れるもんか？ ……俺なんぞ、どこへ行つたつて食ひはぐれはねえ。貴様なんぞと譯がちがふんだ！ 貴様なんぞあ、へばりついで、蔭口きいて、盗人なんぞしてられるのも、ここでだけだ……」

「よくも天狗になりやがつたな、」と、これも我慢がしきれなくなつて來た事務所頭が彼をさへぎる、「この醫者の手傳ひが、ただの手傳ひが、この膏藥張りの手傳ひが、……聞いて呆れる、ふん、手前は偉えお方だよ！」

「さうよ、醫者の手傳ひだ。さういつたつて、この手傳ひがみなかつたら、今ごろ手前は墓場の中で腐つてらあ、……それを癒してなんぞやつたのは魔がさしたといふもんだよ。」とパーウエルは齒ざしりしながら付け加へる。

「貴様が俺を癒したつて？ ……とんでもねえ、毒殺するつもりで、蘆薈なんぞを飲ませやがつて。」事務所頭は後を引きとる。



「蘆會のほかに貴様に利くものがなかつた日には仕方がないぢやねえか？」

「蘆會を使ふのは醫師法で差し止めになつてゐるんだ、ニコライは更に追究する、「わしは今だに貴様に文句があるんだ、……手前はわしを殺すつもりだつたんだ、それに違ひねえんだ！ けど、神様はさうはおさせにならなかつた。」

「もういいよ、二人とも、もういいよ、」と會計主任が中に入った……

「放つといてくれ！」と事務所の頭はわめき立てる、「こいつはわしを毒殺するつもりだつたんだ、そらあ、お前にも分かるだらう？」

「そんなことどうだつていいよ、……なあ、ニコライ・エレメーキッチ、」とパーウェルは自棄半分の調子でいひ出した、「最後にもう一ぺんお願いだが、……これといふのも貴様が無理にさしたことだ、……俺はもう我慢がならないんだ。俺たち二人を放つといてくれ、いいか？ さもないと、誓つて俺たちのどつちかに災難が湧いて来るんだ。俺は貴様のことをいつてるんだがな！」

肥つた男は憤然とした。

「俺は貴様なんぞにびくびくしないぞ、」と喚き立てる、「いいか、この青二才！ わしはな、貴様の親父も取つちめてやつたんだ、奴の鼻つ柱を挫いてやつたんだ、——いい手本だ、氣をつ

けろ！」

「親父のことなんぞ言ふな、ニコライ・エレメーキッチ、言ふな！」

「そうれ見ろ！ 貴様がわしの指圖をするのか？」

「言ふなつて言ふのに！」

「そんなら俺もいふが、のぼせ上がるな、……どんなに貴様がお邸の大事者だからといつて、奥様が二人のうち、どつちをお残しになるかつて言や、手前なんぞ、置いちゃ貰へねえんだぞ、おい！ 誰だつて目上の者に楯突くことが許されるもんぢやねえんだ、氣をつけるがいい！（パーウェルは忿怒に顫へてゐた。）それにあの小びつ娘のタチャーナは因果應報だ、……今に見ろ、もつともつと酷い目に遭はしてやるから！」

パーウェルは両手を振り上げて飛びかかつた。事務所の頭はいやといふほど床の上へ投げ倒された。

「ふん縛れ、ふん縛れ、」とニコライ・エレメーキッチは呻くやうにいふ……

この光景の結末を私は述べようとは思はない。私はこれだけ書いたのでも既に讀者の優しい感情を痛めはしなかつたかと怖れてゐるのである。

私はその日のうちに家に歸つた。それから一週間ばかり経つて、ロスニャコーワ夫人はパー



ウエルもニコライも元通り邸に置いて、婢はしたるのタチャーナだけをよそへやつてしまつたといふことを耳にした。もはやタチャーナには用がなくなつたものと見える。

ピリユーク  
狼

或る晩、私は競走馬車に乗つて、ただひとり獵から歸るところであつた。家まではまだ八露里ほどあつた。足並の早い、うちの駿馬は時をり鼻を鳴らしたり、耳を敬てたりしながら、埃の立つ道を勇ましく走つてゐた。疲れた犬は車に縛りつけられてゐるからのやうに、車の後輪あとぶらから一歩も後れずに駈けて來た。雷雨がやつて來さうになつた。行く手を見ると、薄むらさきの巨きな夕立雲がむくむくと森のかげから湧きあがつて來る。長い、灰色の雲が頭の上に落ちかかるやうに漂つて來る。楊がざわざわと動いて、さざめく。息づまるやうな暑さは忽ちに濕りを帯びた冷たさに變り、物蔭は見る見るうちに濃くなつて來る。私は手綱を絞り、馬にひとむち一鞭あてて、谿を下り、野楊のやなぎの一面に生ひ繁つた水のない谿川を涉つて、山に登り、森の中へ入つた。行く手の道は、早くも闇につつまれた胡桃の叢林しげみの間を曲りくねつてゐる。私はやつとのことで馬を進める。馬車は、深い縦溝——百姓馬車の轍の跡を引きも切らずに横切つてゐる古い柵や菩提樹の堅い根っこに乗り上げる。馬もやうやく躓きがちになつて來た。強い風が俄かに高く唸り出し、樹々がざ



わめくと思へば、大粒の雨がはげしく落ちて来て、樹の葉を鳴らす。電光が閃いて、雷が凄しく鳴る。雨は瀧のやうに降りそそぐ。少しばかり踏み出してはみたが、間もなく停まらざるを得なくなる。馬は竦んでしまふ。一寸先も見えなくなる。どうにかかうにか、廣い叢林に逃げ込んだ。身を屈めて、顔を蔽ひ、私は嵐のやむのを待つてゐた。すると不意に電光の明りに、背の高い人影が道に見えて来た。じつと眼を凝らして、私はその方を見た、——その人影は馬車のあたりの地面から湧き出て来たかのやうであつた。

「誰だ？」と、よく徹る聲で訊ねた。

「お前こそ誰だ？」

「俺はここの山番だ。」

私は自分の名を乗つた。

「あ、存じてます！ お歸りになるところですか？」

「さうだ。だが、何しろこの雷雨で……」

「さうでござんす、えらい雷雨で。」と、その聲が答へる。

白い電光が山番の頭の先から足の先まで照らす。すると忽ち耳をつんざくばかりの雷がそれに續いて鳴り渡る。雨は一層はげしく押し寄せて来た。

「直ぐには止みませんねえ。」と山番はつづける。

「どうしたもんだらう？」

「何なら、私の小舎へ御案内しませう。」と切れ切れに山番がいふ。

「さうして貰はう。」

「まあ、お乗んなさいまし。」

彼は馬の頭のところへ行つて、轡を取つて引き出した。馬車は動き出した。私は『海に漂ふ猿木舟のやうに』、揺れる馬車のクッションに身を凭せて、犬を呼んでゐた。可哀さうに、馬は難儀さうに泥濘に足をぼちやぼちやと突き込みながら、辻つたり、躓いたりした。山番は轡の前を、右に左に幽霊のやうに揺れて行く。私たちはかなり永いあひだ、驅つて行つた。つひに私の案内人は立ちどまつた。「さあ、且那樣、ここが手前どもの家で。」と彼は落ちついた聲でいつた。木戸がきしむ。幾匹かの仔犬が一せいに吠え立てる。頭をあげて、電光の光に見ると、籬をめぐらした廣い庭の眞ん中に小さな小舎があつた。一つの小さな窓からぼんやりと灯影が洩れてゐる。山番は上り段の際まで馬を曳いて行つて、戸を敲いた。「唯今、唯今！」と細い聲が聞こえる。ばたばたと跣の足音がして、門が軋むと、粗末な襦袢を着て、布の耳を締めた十二ばかりの女の子が提灯をさげて、闕のところを現はれた。



「旦那に灯をお見せ。」と山番は娘にいひつけ、私には「馬車は檐の下へ入れて置きます、」といふ。

女の子は私をちらと見て、奥に入る。私は後からついて行つた。

山番の小舎は煤けて、低く、がらんとして、天井床もなく、仕切りもない、たつた一つの部屋があるばかりであつた。壁にはぼろぼろの毛皮外套がかかつてゐる。腰掛には單發銃が置いてあつて、片隅には襪襪ぎれが山のやうに積まれ、燂爐のわきには大きな壺が二つ置いてある。テーブルの上には木片が燃えて、物悲しさうに燃えあがつたり消えたりしてゐる。小舎の眞ん中には、長い竿の先に括りつけた揺籃が下がつてゐた。女の子は提灯の火を消して、小さな腰掛に腰をかけ、右の手で揺籃をゆすぶり、左の手で木片を直しはじめた。あたりを見まはすと、——私の胸は疼き出した。夜分、百姓家へ入つて来るのは氣持のよいものではない。揺籃の中の赤ん坊は苦しきうに、せかせかと呼吸をしてゐる。

「お前、ここに一人つきりかい？」と私は女の子に訊ねる。

「はい。」と、やつと聞こえるやうな聲でいふ。

「お前、山番の娘かい？」

「はい。」と囁く。

戸が軋めいて、山番が頭をかかめながら、鬮を跨いで入つて来た。提灯を床から取り上げて、テーブルのところに行き、蠟燭に火をつけた。

「何でせうな、木片のあかりなんかお珍しいでせうな？」といつて、縮れた毛をゆるがす。

私は彼を眺める。こんな立派な男を見たことは、めつたになかつた。背が高く、肩幅が廣くて、見るからに均齊がとれてゐる。濡れた、手織りの襦袢のかけから逞ましい筋肉がむくむくと盛りあがつてゐる。黒い縮れた髯は、嚴めしく、男らしい顔の半ばを蔽ひ、兩方が繋がつてゐる太い眉毛のかけからは、さして大きくない蒼色の眼が憚るところなく覗いてゐる。彼は手をかろく腰にあてて、私の前に立ち止まつた。

私はお禮をいつて、名前を訊いた。

「名はフアマールですけれど、」と彼は答へた、「綽名を狼と申します。」

「え、お前が狼だつて？」

私は一そう強い好奇心をもつて彼を眺めた。うちのエルモライやその他の人たちから、この邊の百姓の誰も彼もが火のやうに怖れてゐる山番のペリュクの話は度々聞いてゐた。彼等にはせると、世界廣しといへども、自分の仕事をあれほど巧くやつてのける者は未だ曾てなかつたとのことである。「あいつは枯枝の一把も持つて行かせねえ。そんなことでもしたら、いつ何



時でも、たとひ眞夜中だらうが、雪なだれのやうに、いきなり押つかぶさつて来るんだ。あいつに手向ふなんて考へたつて駄目だ、——何ていつたつて悪魔みてえに馬鹿力はあるし、すばしこいんだから……。どんなにしたらつて、こつちの者にや出来ねえ。酒を飲ましたつて、錢をつかましたつて、どんな困をかけたつて駄目だ。これまでも上手な連中が彼奴を娑婆から追ひ出さうと目ろんだことが一度や二度ぢやなかつたが、駄目の皮だ、うまく行きやしねえ。」

近所近邊の百姓たちは、ビリュークのことをかういつて噂してゐたのである。

「それぢや、お前が狼なんだね、」と私は繰り返した、「お前のことは噂に聞いたことがあるよ。お前は誰にも容赦がないさうだな。」

「眞直ぐに、するだけのことをするまででさ。」と彼は無愛想に答へた、「何もしないで、御主人様に食べさしていただく譯には行きやんせんもの。」

彼は腰に挟んだ斧を取つて、床に腰をおろし、木片を割り始めた。

「時に、お前、女儀さんはないのかね？」と私は訊いてみた。

「はい。」と答へて、力いつばい斧を振る。

「亡くなつたんだね、して見ると？」

「いんえ……はい、亡くなつたんです。」と附け加へて、わきを向いてしまつた。

私はそれきり黙つてゐた。彼は眼をあげて、私を見た。

「實は田舎廻りの商人と駈落ちしましてね、」と彼は痛々しげな微笑をうかべていつた。女の子は顔を伏せた。赤ん坊が眼を覺まして泣き出したので、女の子は揺籃のそばへ行つた。「それ、これをやれ、」とビリュークは汚いおねぶりを娘の手へそつと渡しながらいふ、「まあ、こいつまで見棄てて行つちまつたんで、」と赤ん坊の方を指しながら聲低くいひつづける。彼は戸口へ近づいて、立ち止まり、こちらを振り向いた。

「きつと、旦那様なんかは、」と彼はいひ出した、「わつし共の麵麩なんかはお上りにならんでせうが、さうかといつて、ここには麵麩のほか……」

「お腹は空いてゐないよ。」

「それぢや、どうか御随意に。サモワールくらゐ支度してもよろしうございますが、生憎お茶がありませんんで、……まあ、ちよつと行つて、お馬を見て参りませう。」

彼は表へ出て、戸をびたりと閉めた。私はもう一度あたりを見廻した。小舎は前よりも一そつ物悲しく思はれた。冷たい煙のはげしい匂ひが不快に私の息をつまらせる。女の子はその場を少しも動かさず、眼をあげなかつた。時をり揺籃を押ししたり、さがつて来る襦袢をおづおづと肩に引き上げたりしてゐた。露はな足は微かに動くこともなく垂れてゐた。



「お前の名は何ていふの？」と私は訊ねた。

「ウリータ、物悲しさうな顔を更に俯向けて女の子はいふ。

山番が入つて来て、腰掛に腰をおろす。

「雷もやみました、」と暫く黙つてゐた後でいふ、「何なら、森の出口までお伴しませう。」

私は立ちあがつた。ピリユークは鐵砲を出して、藥池をあらためる。

「そんなものをどうするんだ？」と私は訊ねた。

「森の中にいたづらをする奴がゐるやんしてね、……『馬ヶ谷』んところの樹を伐るもんですから。」と私の不審さうな眼つきに答へて附け足した。

「へえ、それがここから聞こえるのかね？」

「おもてへ出れば聞こえます。」

私たちは連れ立つて外へ出た。雨はやんでゐた。遠くの方にはまだ雨雲の團々が重く群がつてゐて、時をり長く稲光りが光つてゐた。けれども、空を見上げると、ここかしこに紺碧の空が見えて、疎らに、箭のやうに飛んで行く雲のかけには、星がちらちらと覗いてゐる。雨に濡れ、風に揺れる樹々の形は闇の中からくつきりと現はれはじめる。私たちは耳を澄ます。山番は帽子を脱いで、うつ向いた。「あ……あれです、」と彼はだしぬけに言つて、手をさし伸べた、「御覽な

さい、こんな晩を選つて來たんです。」私には樹の葉のざわめきのほかには何も聞こえなかつた。ピリユークは檐の下から馬を連れ出した。「だが、こんなことをしてゐると、ひよつとして、」と大きな聲で附け足した、「取り逃がすかも知れん。」「私も一緒に行かう、……構はなかつたら？」「どうぞ、」かう答へて、馬をまた曳き入れる。「今ぢきに捉まへて、それからお見送りしませう。さあ、参りませう。」

私たちは出かける、ピリユークが先に立つて、私がそれに蹤いて。彼がどうして道を見分けるのか、それはまるで分からなかつた。彼はほんの一二度、立ち止まつたが、それは斧の音に耳を傾けるためであつた。「ほら、」と彼は齒を喰ひしばつたまま呟いた、「聞こえませう？ 聞こえるでせう？」「一體どこに？」ピリユークは肩を竦めた。私たちは谿へ下りて行つた。一しきり風が静まる。調子をとつて打ちおろす斧の音が、はつきりと私の耳にも聞こえて來た。ピリユークは私をちらと見て、頭を振つた。私たちは濡れた羊齒や蕁麻を押し分けて、ずんずん進んで行つた。低い、籠つたやうな唸りが聞こえて來た……。

「轉がしやがつたな……」とピリユークが呟いた。

その間に、空はだんだんと霽れて來て、森の中も仄明るくなつて來た。やつとのことで私たちは谿間を出た。「ここで一寸お待ちなすつて、」と私に舌うちして、山番は身をかがめ、鐵砲を上



にさしあげながら、叢林の中へ消えて行つた。私は息を殺して耳を欬てた。絶え間ない風のざわめきに交つて、間近いところから微かな物音が聞こえるやうな気がした。あたりに氣をつけて枝を拂ふ斧の音や、車輪のきしめき、馬の鼻息など……。「どこへ行くっ？ 止まれっ！」ピリュークの破れ鐘のやうな聲が俄かに響き渡る。もう一人の聲は、畏にかかつた兎のやうに、おどおどと憐れな叫び聲であつた……。組打ちが始まつた。「ふざあけやがる、ふざあけやがつて！」とピリュークは息をはずませながら繰り返した。「逃がすもんか……。」私はどよめく方を目ざして飛んで行き、一足ごとに躓きながら摺合ひの現場へ駆けつけた。地べたの、伐り倒された樹のそばに、山番は蠢いてゐた。彼は泥坊を組み敷きながら、帯で後ろ手に縛り上げてゐたのである。私はそばへ寄つて行つた。ピリュークは起きあがつて泥坊を引き立てた。見ると、襦袢を身につけ、長い髯をかき亂し、濡れ鼠になつてゐる百姓であつた。そこには、ごつごつした席を半分かぶつたやくざ馬が荷馬車の空の車臺をつけられて立つてゐた。山番は一言も物をいはない。百姓もまた黙り込んで、頭をふらふらさせてゐるばかりである。「放してやれ、」私はピリュークの耳に囁いた、「樹の代は私が拂ふから。」

ピリュークは黙々として、左手で馬の額毛を引つつかみ、右手で泥坊の腰帶をつかまへた。「さあ、急げ、この狐鼠盗奴！」と彼は荒々しくいつた。「そこにある小斧を取つて下せえ。」と

百姓は謔言のやうに呟いた。「これを失くして堪まるかい！」といつて山番は斧を拾ひ上げた。みな歩き出した。私はうしろから跟いて行く……。雨はまたぼつぼつ降り出して、忽ち土砂降りになつた。やつとのことで私たちは小舎に辿り着いた。ピリュークは捕へて來た馬を庭の眞ん中にうつちやらかして、百姓を部屋に連れ込み、帯の結び目をゆるめて、片隅に坐らせた。燧燻のそばに深い眠りに落ちかかつてゐた女の子がむつくり起きあがつて、口もきかず怖ろしさうに私たちを眺め始めた。私は腰掛に腰をおろす。

「や、ひでえ降雨だ、」と山番がいふ、「やむまではどうしてもお待ちなすつて。横にでもおなんなすつては？」

「ありがたう。」

「旦那様のお邪魔になりやんすから、こいつを物置へでもぶち込んで置きたいんだけど、」と百姓を指しながら言葉をついだ、「でもその門が……。」

「そこへ置いてやれよ、そつとして置けよ。」と私はピリュークを遮つた。

百姓は上眼づかひに、そつと私の方を見た。私は心の中で、どんなことがあつてもこの哀れな男を放してやらうと誓つたのである。百姓は身動きもせず腰掛に腰をかけてゐた。提灯のあかりによつて、頬のこけた皺だらけの顔、垂れさがつた黄色な眉、きよときよと落ち着かない眼、



瘦せ切つた手足などを私は見分けることが出来た……。女の子は百姓のすぐ足もとの床の上に横になつて、また寝入つてしまつた。ピリュークは両手で頭を抱へながら、テールブルに向つてゐた。蟋蟀が隅の方で鳴いてゐた、……。雨は屋根をたたいて、窓づてに滑り落ちる。私たちはみんな黙つてゐた。

「ファマー・クヂミッチ、」不意に百姓が纏れた微かな聲で言ひ出した、「ファマー・クヂミッチ。」

「何だ？」

「勘忍してくろよ。」

ピリュークは返事もしない。

「勘忍してくろよ……、食ふに困つて、やつたことなんだ……、勘忍してくろよ。」

「貴様らがことは分かつてるんだ、」山番は無愛想にやつつけた、「貴様らが村はみんなさうなんだ……、どいつもこいつも泥坊だ。」

「勘忍してくれろ、」と百姓は繰り返すばかりである、「お邸の執事さまがひどいんで……、俺らは落ちぶれさせられて、ほんとに……勘忍してくれろ！」

「落ちぶれたつて！……いくら落ちぶれたからつて、盗むつちふ法はねえんだ。」

「勘忍してくれろ、ファマー・クヂミッチ、……あんまりな目に遭はせねえでくろよ。あの執事には知つての通り、咬み殺されるだらうからな、きつと。」

ピリュークはわきを向いた。百姓は熱病にでもとりつかれたかのやうに、ぶるぶる顫へてゐる。頭をかくかく動かして、とぎれとぎれに呼吸をしてゐる。

「勘忍してくれろ、」と百姓は失望落膽して繰り返した、「勘忍してくれろよ、後生だから勘忍して！ 金は拂ふから、それあ、きつと拂ふから。全くのところ、食ふに困つてしたことだ、……、餓鬼どもが泣くんで、お前も覚えがあるだらうが。全く、どうにもせつばつまつて。」

「だと言つて、とにかく、盗むつちふ法はねえんだ。」

「でもあの馬を、」と百姓は言ひつづけた、「あの小馬を、せめてあれだけなりと……、あれは、後にも先にもたつた一つしかねえ生物いさまものなんだから……放してやつてくれろ！」

「駄目だといふのに。俺だつて自由の身ぢやなし、役目があるんだ。そんなことをしたら、こつちが罪を着るだけだ。それに、貴様らの言ひなりにしちや置けねえんだ。」

「勘忍してくろよ！ 困つたからしたことだ、ファマー・クヂミッチ、困つたからなんだ、ほんとに、何も別に譯はねえんだから……、勘忍してやつてくろよ！」

「分かつてるんだ！」



「なあ、勘忍してくろよ！」

「ええ、貴様なんぞと兎や角いつたつて仕様がねえ。おとなしく坐つてろ、言ふこと聞かかけりや、いいか？　ここに旦那のいらつしやるのが見えねえのか、あ？」

哀れな男はうなだれてしまつた……。ピリユークはあくびをして、テーブルの上に頭をもたせかけた。雨はまだ止みさうもない。私はどうなることかと待つてゐる。

百姓はいきなり反り身になつた。彼の眼は輝き、顔は朱を注いだやうに眞赤になつた。「やい、さあ、來い。斬るなり焼くなりしてしろ、さあ、」と眼を釣り上げ、口もとを歪めて言ひ出した、

「さあ、この罰あたりの人殺し、基督信者の生血が飲めたら、飲んでみる……」

山番はくると向き直る。

「貴様に言つて聞かしてるんだ、貴様に。この外道奴、人非人！」

「酔つばらつてんのか、あ、何を悪態つくつもりなんだ！」山番は呆れてかう言ひ出した、

「氣でも違つたのか、あ？」

「酔つばらつたつて！……酔はうと酔ふまいと、貴様の世話になつたか、この罰當りの人非人、畜生、畜生、畜生！」

「ええ、この野郎……ようし、貴様を一つ！……」

「俺をどうするつて？　どつちみち同じことだ、どうせ駄目なんだ。馬を取られて、どうなるもんか！　叩き殺せ、いつそ一思ひに殺せ。餓え死しようとして、ここで殺されようと、結局おんなじことだ。みんな死んじまへ、女房も餓鬼も、——みんなくたばれ……。だが、貴様は待つてろ、それだけのことはしてやる。」

ピリユークは立ちあがつた。

「叩け、叩き殺せ、」と百姓は殺氣だつた聲で詰め寄つた、「殺せ、さあ、さ、殺せ、」(女の子はあわてて跳び起きて、百姓に眼を注いだ。)

「殺せ！　殺せ！　殺せ！」

「澤山だ、澤山だよ、フアマ、」と私は叫んだ、「放つとけよ……構ふなよ。」

「黙んねえぞ、」と不幸な男はいひつづけた「おんなじことだ、——どうせ、一度はくたばるんだ、この人非人、畜生、貴様も打つ潰されねえでおくものか、……まあ待つてろ、勿體ぶるのも永くはねえぞ！　追つつけ貴様の首も締められるんだ、待つてろ！」

ピリユークは百姓の肩をつかんだ。私は駆け寄つて、百姓を助けようとした……。

「旦那、構はねえで下せえ！」と山番は私を囁きつけた。

私はこの脅やかしをも怖れず、すでに手をさしのべてゐた。ところが、實に驚いたことには、



山番はぐいと引つばつて百姓の臂を括つた帯をほどき、襟元をつかまへて、帽子を目深にかぶせ、戸を開けて表へ突き出した。

「馬をつれて、さつさどどこへなと行きやがれ！」と彼は百姓の後ろから呼びかけた。「だが、氣をつけろよ、今度おれん所へ来たら……」

彼は小舎へ引き返して来て、隅の方で何かを掻き探し始めた。

「や、ビリユーク」と漸く私は口を切つた。「たまげたぞ。今の様子を見ると、お前はなかなか素晴らしい奴だなあ。」

「いや、もう結構です、旦那」と彼は忌々しきうに、私の言葉を遮つた。「それだけは仰つしやらないで。それよりももう、そろそろお見送りをいたしませう」といつて、なほ附け足した、「これくらゐの小降りならお待ちになるがものはないでせうから……」

表では百姓の馬車の車輪が軋り出した。

「ふむ歩き出した！」と彼は呟くやうにいつた、「しかし、俺はあいつを！……」

半時間ほどして、彼は森の出口で私に別れを告げた。

## 二人の地主

好意を寄せらるる讀者諸君、私はすでに數名の隣人諸氏を諸君に紹介するの榮を得たが、ここにまた序でながら（私たち作家仲間にとつては、いつも序でながらであるが）、なほ二人の地主を紹介させていただきたい。私はこの人たちのところへ、よく獵に行つたものであるが、いづれも極めて立派な、氣だてのよい人たちで、普くこの地方の人たちから尊敬されてゐた。

最初に私は退役陸軍少將ギャチエスラフ・イラリオノキッチ・フヴァルインスキイのことを述べようと思ふ。先づ心に描いていただきたい、背の高い、昔は恰好がよかつたが、今ではいづらか肉のたるんだ、しかもいささかも元氣が衰へず、年寄りくさくもなく、男ざかりで、いはゆる『今が花』の人を。たしかに若い時分のきちんとした、今でも感じのよい顔つきは、いくらか變つて来た。頬にゆるみができる、眼のまはりには皺が寄つて来る、齒はプーシキンが書いたサディの言葉のやうに、或るものはすでになくなつてゐる。亚麻色の髪の毛も、少くとも残つてゐるだけは、すっかり薄むらさきに變つてゐる。これはロームヌイの馬市で自らアルメニヤ人と



稱してゐた或る猶太人から買った調合薬のおかげである。しかし、ギャチェスラフ・イラリオノキッチは歩き方などもしつかりしたもので、笑ふ聲も朗かで、拍車を鳴らし、口髭をひねり、自ら老騎兵だといつてゐるが、知つての通り、ほんたうに年をとつた人ならば、自分を老人だなどといはない筈である。いつもフロックコートを着て、上まで釦をかけ、糊の堅いカラーにネクタイを盛りあがらせ、軍隊式の霜降りのズボンを穿いてゐる。帽子は額をかくさんばかりの前かぶり、頭のうしろの方を丸見えにしてゐる。本來が氣立のまことに善い人ではあるが、甚だ變つた考へや癖をもつた人である。財産がなかつたり地位がなかつたりする貴族を自分と同格の間として取扱はないなどもその一例である。かやうな貴族と話をするときには、通例として、堅い白のカラーにしつかと頬をもたせて流し目に彼等を見る。さうかと思ふと、不意に向き直つて、鋭い眼光を浴びせかけ、黙々として、髪の毛にかくれた頭の皮膚をそこいらぢゆう動かすのである。更にまた、いろんな言葉を自己流に發音する。例へば、『ありがたう、パーウエル・ワシーリエキッチ、』とか、『どうぞこちらへ、ミハイル・イワノイチ、』とかいふやうなことをいはずに、『あれがとう、パルル・アシリッチ』とか、『ど・ぞう、こちらへ、ミハイル・ワノイチ』とかいふ。社會的地位が自分よりも低い人たちに對すると、彼のやり方は一そう奇妙になつて來る。てんで相手を見向きもしないで、希望を述べるとか、命令を下すとかする前には、心配ごとでも

あつて、あれこれと考へてゐるやうな様子をして、幾度となしに、『お前の名は何ていふんだ？……何ていふんだい、お前の名は？』とつづけざまに繰り返すのであるが、その『何て』といふ言葉にひどく力を入れて、あとの言葉は實に早口にいつてしまふので、全體がまるで鶉の牡の鳴き聲でも聞くやうであつた。世話やきで、また恐ろしい慾ほけであつたが、領地の經營者としては拙い人であつた。彼は、小露西亞人で、無類の抜作である退役の曹長を支配人として迎へた。尤も領地經營の間拔さ加減にかけては、ペテルブルグの或る顯官にかなふ者はこゝら界限にゐなかつた。この顯官は執事の報告によつて、領分内の穀物乾燥場が時をり火災に見舞はれ、ために多くの穀物が烏有に歸したのを目のあたり見て、今後は火の氣のすつかりなくなるまで、穀束を乾燥場に入れてはならぬと、いとも嚴重な達しを下した。やはり同じ高官が全く見たところたわいもない算盤を弾いたあげく、畑一面に罌粟を播かうと企てた。罌粟は裸麥よりも値がよい、従つて罌粟を播く方がずつと有利だといふのである。彼はまた、ペテルブルグから取り寄せた雛形に則つた頭飾を女の農奴に被るやうにといひつけた。だから實際、今日に至るまで彼の領分内の農婦は頭飾をかぶつてゐる……但し當り前の頭巾の上に……。ところでまた、ギャチェスラフ・イラリオノキッチにかへらう。ギャチェスラフ・イラリオノキッチはおそるべき女好きで、郡の町の散歩道などで、きれいな人を見つけようものなら、早速あとをつけて行くが、忽ち跛を



引くやうな足取りになる。ここが注意すべきところである。骨牌をやるのは好きであるが、ただ自分より身分の低い者とでなければやらない。かういふ連中ならば『閣下』といつてくれるし、こちらはこちらで思ふ存分に罵つたり、叱りつけたりすることが出来るからである。それが偶々、知事だとか、何か高い位をもつた人とかのお相手をするやうなことになる、驚くほどの相違が出来て来て、妙に微笑んだり、うなづいたり、目の色ばかり窺つて、甘い蜜でも垂らしさうな様子をしてゐる……。たとひ負けても泣言をいふやうなことはない。ギャチエスラフ・イラリオ・ノキッチはめつたに本を讀まない。讀むときには、恰かも顔の下から上へ波を越させるやうに、絶えず口髭や眉を軽く動かすのである。ギャチエスラフ・イラリオ・ノキッチの顔にあらはれるこの波のやうな運動は、どうかして(勿論、客のゐるところで)『Journal des Débats』の何段かを走り讀みするやうなときに殊に著しきものがある。選挙の際には、かなり重要な役割をつとめるのであるが、貴族團長といふやうな名譽ある地位を、ふところ工合から考へて辭退してしまふ。『諸君』と、彼は自分に付きまとふ貴族たちに向つていふのが常である。しかも、あくまでも謙讓に、自尊心をもつた聲でいふのである、『この光榮を深く感謝いたします。しかしながら、わたくしは餘暇を孤獨のうちに過ごさうと決心いたしましたから。』さて、かう言ひながら頭を幾たびか右に左に振り向けて、それから鹿爪らしく、顎と頬とをネクタイのうへにのせる。若い

時分には、或る偉い人の副官を勤めてゐたさうで、いつもその人を馴れ馴れしく、呼び名で呼んでゐた。人の噂によると、副官ばかりをしてゐたのではなかつたとか、何でも大禮服を着て、ホックまでかけて、長官を風呂で蒸してやつたとかいふことであるが、——しかし、人の噂を傳へるかも知信するわけには行かない。それにしても、フヴァルインスキイ將軍自身は自分の勤務先の話をしたがらない。これもずいぶん妙な話である。實戦に加はつたことはないらしい。フヴァルインスキイ將軍は大きな家に、たつた一人で暮らしてゐる。夫婦生活の幸福といふものを味はつたことがないので、未だに花婿の候補者とされてゐる。それどころか、無くてはならぬ婿科であるとされてゐる。その代り、家には家政婦として、眼も黒く、眉も黒く、肥つてゐて、みづみづしい、薄髭の生えた三十五ばかりになる女を置いてゐるが、この女はふだんの日でも糊のついた着物を着て歩き、日曜にはモスリンの袖のついたのまでも着てゐる。ギャチエスラフ・イラリオ・ノキッチは地主連が知事やその他のお歴々を招んで大盤振舞ひをする席では、かなり機嫌がよい。かういふところに彼の本領が全くあらはれるのだともいへる。こんな場合には大てい知事の右手でないまでも、少くとも餘り遠くないところに坐る。宴會の初めには、大いに威嚴を見せる氣になつて、うしろに反り返つたまま、昂然として、お客の丸い後ろ頭や立襟などを、わきから見おろしてゐる。ところが、食事の終る頃には陽氣になつて、四方八方へ微笑みかける(知事



の方を向いては食事の始まる時から微笑みかけてみたが。また彼にいはせると、女性は地球の装飾ださうであるが、彼は時折この女性の名譽のために祝杯を挙げようと言ひ出したりさへもする。フヴァルインスキイ將軍はあらゆる嚴肅な公けの儀式だとか、品評會だとか、集會だとか、展覽會だとかに出席しても、また機嫌の悪いことはなかつた。祝福をうける時なども、それ相當なものであつた。ギャチエストラフ・イラリオーノキッチの下僕たちは、芝居のはねる時でも、渡し場でも、そのほかのさういつたやうな混雜の場所でも、騒いだり喚いたりは決してしない。それどころか、群集を押しわけたり、馬車を呼ぶときには、快よいバリトンの喉聲で、『御免、ごめん、フヴァルインスキイ將軍を通して下さい。』とか、『フヴァルインスキイ將軍の馬車を……』とかいふ。實際、フヴァルインスキイの馬車と來たら實に古風で、馬丁の仕着せは見事に擦り切れてゐる（赤い細縁がついてゐる灰色の仕着せであるといふやうなことは殆んど述べる必要もないことと思ふ）。馬もかなり年をとつてゐて、今までの長い歳月をずるぶんお役に立つて來た。しかしながらギャチエストラフ・イラリオーノキッチには粹なことをしようといふ氣持が更になく、金持らしく見えを張るのは、自分の身分には不相應なこととまで考へてゐる。フヴァルインスキイは特に口巧者といふわけには行かない。それとも恐らくは雄辯を發揮するよい折がないのかも知れぬ。なぜかといふに單に議論ばかりではなく、一體に反駁をされるのが大嫌ひで、あらゆる

長談義、殊に若い人たちとの長談義を努めて避けてゐるからである。成程、これは全く間違ひのない方法である。さうでもしなければ今時の連中にかかつてはひどい目に遭ふのが落ちで、一旦、服従しなくなると、もう尊敬することを忘れてしまふ。フヴァルインスキイ將軍は自分より地位の上な人のところへ出ると、大抵は黙りこんでゐる。しかし、見たところ輕蔑はしてゐるらしいが、やはり交際だけはしてゐる自分以下の者に對しては、切れ切れにずるぶん辛辣なことをいふ。次のやうな文句の出ることはもう始終である。『だがあんなの今いつてゐることは、くだらない。ことだ。』『かうなると、あんな、結局、わしもやむなく注意しなければならんのおや。』とか、『結局、しかし、あんなも相手が誰なのか、覺えとく必要がある筈だ。』などと、こんなことをいふ。郵便局長や、郡役所あたりの小役人や、驛長などは彼を特に怖れてゐる。彼は自分の家の人に應待することはなく、人の話では守錢奴のやうな暮らしをしてゐるとか。さういふことがいくらあつたにもせよ、彼は押しも押されぬ立派な地主であつた。近所界限の人たちは、『老軍人で、淡泊な人で、行狀の正しい、Vieux Brognard (老不平家)』といつてゐる。ただ縣の檢事だけは、人にすぐれて、しつかりしたフヴァルインスキイ將軍の性質を人がわきで褒めそやしてゐるとき、ひそかに冷笑を洩らしてゐたが、——しかし、嫉妬といふ奴はどうにもしやうがないのである！……



それにしても、今はもう一人の地主の話に移らう。

マルダライ・アポロヌイチ・スチエグノフはどこを取つて見てもヴァルインスキイに似たところはない。彼はどこかに勤めたことがあるかどうか怪しいものだし、一度として美男子といはれたこともなかつた。マルダライ・アポロヌイチは背の低い、やや肥り気味の、頭の禿げた小柄な老人で、二重顎で、やはらかい手をして、かなりでぶでぶの腹をしてゐる。大のお客好きで、おどけ者で、いはゆる『面白可笑しい』その日その日を送つてゐる人である。冬も夏も綿入れの縞の圍衣を着てゐる。ただ一つだけヴァルインスキイ將軍と一脈相通ずるところがあるが、それは彼がやはり獨身であることである。彼のところには五百人の農奴がある。マルダライ・アポロヌイチは自分の領地といふものを實に表面的に取扱つてゐる。時勢におくれないやうにと十年ほど前に、莫斯科のブツチェノフから脱穀機を買ひ入れて、それを物置の中へしまひこんで置いて、それでもう時勢に従つてゐると、いい氣になつてゐる。時をり夏の晴れた日など、競争馬車の用意をさせて、畠へ出ることがあるが、作物を見たり、矢車菊をちぎつたりするくらゐが關の山である。マルダライ・アポロヌイチは全く昔流に暮らしてゐる。家も昔の建て方で、玄關へ入ると、型のごとくクワスや獸脂の蠟燭や糝し革の匂ひがする。その右手には脇棚があつて、パイプや布巾が置いてある。食堂には家の人たちの肖像畫が蠅の糞にまみれてかかつて居り、

ゼラニウムの大きな鉢や、調子の狂つたピアノが置いてある。客間には安樂椅子が三つ、テーブルが三つ、それに鏡が二つと、彫刻した青銅の針のついた黒の瑛瑯塗りの嘎れた時計。書齋へ通ると、書類の載つたテーブルがある。前世紀のいろんな著書から切り抜いた繪を貼りつけた青味がかつた衝立がある。微くさい書物がつまつてゐて、蜘蛛が巣を張つたり、黒い埃のたまつた書棚がある。ふはふはした脇掛椅子もあれば、伊太利風の窓もあつて、それに庭へ出る扉は密閉されてゐる……。一言にしていふと、凡ゆるものが、きまりきつてゐるのである。マルダライ・アポロヌイチのところにはたくさんの下僕があるが、いづれもみな古めかしい服装をしてゐる。高襟のついた長い青い色の上衣を着て、色合のどんよりしたズボンを穿き、短い黄色味がかつたチョッキを着こんでゐる。彼等はお客にむかつて『あんた様』といふ。一家の經濟をきりもりしてゐるのは毛皮外套の裾まで届きさうな髯の生えた百姓あがりの支配人である。また家のことを取締つてゐるのは肉桂色の布を頭にくくりつけてゐる皺くちやな、吝嗇な老婆である。マルダライ・アポロヌイチの厩には、三十頭の大小さまざまの馬がある。主人が外に出かける時には、自家製の重さ百五十ブードもある幌馬車に乗る。彼は極めて慇懃にお客を迎へて、すばらしい御馳走をする。とりも直さず、人をぼんやりさせるやうな露西亞料理の持ち前を利用して、日の暮れるまで骨牌でもするよりほかには何も出来ないやうにするのである。自分自身はといふと、



何もせずのらくらしてゐて、『夢あはせ』すらも讀まなくなつてゐる。けれども我が露西亞には、かういつたやうな地主は、まだまだ澤山あるのである。『どんないはれがあつて、また何のために、この男の話を持ち出したのか?』とお訊ねになる向があるかも知れぬ……。それならば、お答へする代りに、マルダライ・アポロニーチのところを訪ねた或る日の話をさしていただきたい。

私は夏の或る晩の七時頃に彼のところへ行つた。晩の祈禱いのりが今しがた済んで、坊さんは、年の若い、見たところまことに内氣で、つい近ごろ神學校を出たばかりらしい人であつたが、客間の戸口に近いところに、椅子の端の方に腰をかけてゐた。マルダライ・アポロニーチはいつものやうに、極めて懇ろに私を迎へた。彼はどんなお客が來ても心から喜んだ。それにまた概してごく氣だてのよい人でもあつた。坊さんは立ち上つて帽子をとつた。

「まあ、まあ、ちよつと待つて下さい。あんた。」とマルダライ・アポロニーチはまだ私の手も離さないうちに言ひかけた、「まあ好いでせう……。今ウオトカを取りにやりましたから。」

「私はいただけないんでございます。」と坊さんはまごつきながら、小さい聲でいつて、耳まで眞赤にした。

「御冗談でせう!」とマルダライ・アポロニーチが答へる、「ミーシカ! ユーシカ! ウォ

トカを持つておいでよ!

ユーシカといふ背の高い、八十ばかりの瘦せこけた老人が、肉色の黠々が一面についてゐる、塗りの黒つばいお盆にウオトカのコップをのせて入つて來た。

坊さんはことわり始めた。

「まあ、おあがんなさい、あんた、さう氣どんなさんな、それぢや却つていけませんよ。」と地主はたしなめるやうな調子でいつた。

可哀さうに、年の若い方はたうとう降参してしまつた。

「さあもうこれで歸んなすつてもいい、あんた。」

そこで坊さんはお辭儀をしはじめた。

「いや、結構、結構、おいでなさい……」

「いい男ですよ、」マルダライ・アポロニーチは坊さんの後を見送りながら言葉を繼いで、「あれには私は全く何不足ありませんが、ただ一つ——まだ若いもんですからね。時にあんたはどうです、え? ……いけませんよ、何を仰つしやるんです? まあ露臺バルコニーへ出てみようぢやありませんか——何しろ、とてもいい晩ですからね。」

私たちは露臺へ出て、腰をかけて、話をし始めた。マルダライ・アポロニーチは下をちらと



見たが、不意にひどく興奮してしまつた。

「あれはこの家の鶏だ？　どこの家の鶏だ？」と彼はどなり出した。「あの庭を歩いてゐる鶏はこの家のだ？　……ユーシカ！　ユーシカ！　あの庭を歩いてゐるのは誰の鶏だか見て来い。」

……あれは誰の鶏だ？　何度とめたかわかりはしない、何度いつたか分かりはしない！　ユーシカが駆け出した。

「何ていふ不始末だ！」とマルダレイ・アポロイヌイチはきめつけた、「話のほかだ！」

運のわるい雄鶏は、今なほ記憶するところでは、二羽は斑点のあるやつで、一羽は白で、冠毛があつたが、折々ときをつくつて、その感情をあらはしながら、林檎の樹かけを悠然と相も變らず歩いてゐたものである。ところへ不意に、帽子もかぶらず棒きれを手にしたユーシカと、ほかに三人のいい年をした下僕とが、みんな一せいに鶏めがけて突進した。面白いことになつた。雄鶏は啼く、羽ばたきをする、跳びあがる、耳も聳せんばかりに鳴き立てる。下僕たちは駈ける、つまづく、ころがる。主人はまるで無我夢中になつたかのやうに露臺の上から嗚鳴つてゐる。「つかまへろ、つかまへろ！　つかまへろ、つかまへろ！　つかまへろ、つかまへろ、つかまへろ！　……それは誰の鶏なんだ、誰の鶏なんだ？」たうとう、一人の下僕が鶏の上のしかかつて、冠毛のある雄鶏をつかまへることが出来た。すると丁度その時、すつかり髪をふり亂した十

一ばかりの女の子が、手に枯枝を持つて、村の通りから庭の籬を飛びこえて入つて来た。

「あゝ、誰の鶏だか分かつたぞ！」と地主は勝ち誇つたやうに叫んだ、「馭者のイエルミルの鶏だ！　あいつ奴、鶏を追ひ込むのにナタールカを寄越しやがつた、……さすがにパラシヤを寄越せなかつたと見える！」と地主は聲低く附け加へて、意味ありげに微笑んだ。

「おい、ユーシカ！　鶏はほつとけ、ナタールカをつかまへて来い。」

しかしユーシカがすつかり肝を冷やしてゐる小娘のところへ行き着く前に、どこからとも知れず家政婦の老婆が現はれて来て、いきなり女の子の手を引つつかみさま、つづけさまに可哀さうな子供の背中を殴りつけた……。

「その調子、え、その調子、」と地主が傍から口を入れる。更に「テ、テ、テ！　テ、テ、テ！　……それから鶏も取り上げるんだ、アウドーチャ。」と聲高く附け加へ、晴々した顔をして私の方をふり向いた。「あんた、今の獵はどうでしたね、え？　見てみて、汗までかいちまつて、御覽なさい。」

かういつて、マルダレイ・アポロイヌイチはからからと笑つた。

私たちはなほも露臺にとどまつてゐた。全く珍しく良い晩であつた。

お茶が出た。



「あの、何ですかね、」と私は口を切つた。「マルダリイ・アポロイヌイチ、あの向ふの谿の道ばたに引つ越しさせられたのは、あれはあなたの百姓なんですか？」

「さうです、……どうして？」

「あなたらしくもないぢやありませんか、マルダリイ・アポロイヌイチ？　ほんたうに罪なお話ですねえ。百姓にあてがつた小舎と來たら汚らしくつて、窮屈で、まはりには立木一本あるぢやなし、生簀一つあるぢやなし、たつた一つ井戸があると思へば、何の役にもたたないし。どこか別の土地は見つからなかつたんですか？　……それに人の話では、百姓の元の大麻畑まで取り上げちやつたとか？」

「今の地面の割當てではどうなるんですか？」と、マルダリイ・アポロイヌイチは答へた、「私もこの地面の割當てのことは、ちやんとここにあるんですがね（といつて自分の後ろ頭を指して見せた）。今の割當てでは一寸もいいことはあるまいとは見てゐます。それから麻畑を取り上げたとか、生簀を、何だとか掘つてやらなかつたとか、——さういふことはもう私も、あんだ、ちやんと自分でも知つてゐますがね。私はただの人間で、昔風にやりますのでな。私の頭では、地主は地主らしく、土百姓は土百姓といふもんでしてね、……まあ、さうですとも。」

こんなはつきりした、口先のうまい議論にかかつては、もちろん返答する由もないのである。

「それに何ですよ、」と彼は言葉をつづけて、「あそこの百姓どもは、ひどい奴等で、まるでうお話にならん奴等なんです。中でもひどいのが二軒ありましたね。亡くなつた親父も——天國に憩はせたまへ——あれには愛想をつかしましてね、ひどく愛想をつかしたものです。それで私にも、あなただから申しますが、かういふつもりがあるんですよ、親が泥坊なら息子も泥坊つてことがですね。あなたはどうお思ひになるか知らんが、……いや、血筋ですな、血筋といふものは、大へんなもんですよ！」

こんな話をしてゐる間に、あたりはすつかり静まりかへる。ただ時をり、風がそよそよと吹きよせる。家の近くへ来て、ばつたり静かになると、厩のあたりから調子を取つて頻りに物を敲く音を私たちの耳に運んで来る。マルダリイ・アポロイヌイチは茶を注いだ下皿を今しがた唇のところへ持つて行つて、鼻の孔をひろげて香ひを嗅ぎにかかつたところであつた、——生粹の露西亞人は御承知のやうに誰も彼もが、こんな手敷をかけてお茶を喫む——が、彼は直きにそれをやめて、耳を澄まして、うなづいて、お茶を嚥つた。それから皿を卓子の上に置きながら、いかにも人の好きさうな微笑を洩らして、知らず識らず敲く音に合はせるかのやうに言ふのであつた、

「チュキ・チュキ・チュク！　チュキ・チュク！　チュキ・チュク！」

「どうしたんです？」と、私はおどろいて訊ねた。



「なあに、私のいひつけで、いたづら者を懲らしめてるんですよ……、食堂番のワーシヤを御存じでせう？」

「ワーシヤといふと？」

「それ、このあひだ、食事の時に給仕してくれましたらう。あの頬髯を一ぱい生やしてる。マルダリイ・アポロノイチの晴れやかな、やさしい眼附を見たら、どんなに悲憤慷慨してる人でも手の出しやうがないであらう。」

「どうなすつたんです、あなた、え？」と彼は頭をふりながら言ひ出した、「私、悪人かなんかでもあるんですか、そんなにじつと見てらして？　しかし、『愛すればこそ懲らす』つていひますね。これはあなたも御承知でせう。」

それから十五分ばかりして、私はマルダリイ・アポロノイチに別れを告げた。馬車で村を通つて行くと、食事方のワーシヤの影が見えた。彼は村の通りを歩きながら、胡桃を噛つてゐた。私は馭者に言ひつけて、馬を止めさせ、彼を呼び寄せた。

「おい、どうだ君、今日は折檻されたらう？」

「まあ、どうして御承知で？」とワーシヤは答へた。

「旦那が話してたよ。」

「御自分で？」

「どういふ譯でまた旦那は折檻なんかしたんだらう？」

「いや、それは私が悪かつたもんで、あんた、當り前なんです。私どもん所ぢや、つまらんことと折檻なんかされません。私どもの所には、そんな仕きたりはねえんでして。それこそ、うちの旦那はそんな人ぢやありません。うちの旦那は……あんな旦那はこの縣内どこを探したつてあるもんぢやありません。」

「さあ、出した。」と私は馭者にいひつけた。

『これだな、つまり昔ながらの露西亞は！』と私は歸る道すがら考へた。



## レベヂャン

記 日 人 衆

わが親愛なる讀者諸君、遊獵の主要な利益の一つは、人を絶えずあちこちと歩かせるところにあつて、これはまた閑人にとつては極めて愉快なことである。いふまでもなく、時として（わけても雨のよく降る頃に）、田舎道をうろついたり、道のない野原を横ぎつたり、逢ふ百姓ごとに、『おい、君！モルドフカへ抜けるにはどうしたらいいかね？』と訊いて足どめをさせたり、今度はモルドフカへ来て、ぼんやりな百姓女に（働き手はみんな野良へ出てゐるので）、街道筋の宿屋まではまだ遠いかとか、どう行つたら行けるかと嚇したりすかしたりして訊ねたり、それから十露里<sup>じゅうろ</sup>ほども行つて宿屋のかはりに地主が有つてゐる、ひどく荒廢したフッドブノフの小村へ出て、通りの真ん中の暗褐色の泥に膝までつかつて、驚かされようとは夢にも思はなかつた豚の群れをこの上もなく驚かせるといふやうなことは、あんまり面白いことではない。なほまた、足の下で跳ねを打つやうな橋を渡つて、谿へ下りて行き、泥川の淺瀬を涉つたりするのも愉快なものではない。馬車に乗つてゆく、一晝夜も青草が海のやうに蓬々と生ひ茂つた街道に乗つてゆ

く、或ひは（そんなことは御免だが）、一方にN一方にNといふ數字の書いてある染分けの里程標を前にして何時間も泥まみれになつてゐる、そんなことも、氣持のいいことではないし、何週間も續けて、卵や牛乳や、賞めはやされてゐるライ麦の麵麩で暮らすのも楽しいものではない……。それにしても、こんな不自由や失敗は、別種の利益と満足とによつて全く償はれるものである。それはさうとして、本筋の話をはじめよう。

これだけの話をしたからには、五年前にレベヂャンの馬市の雑沓のただ中に私がどうしてめぐり合はせたかを讀者に説明する必要はない。私たち遊獵家といふものは、天氣のよい朝などに自分の、兎も角も祖先傳來の持村から、翌る日の晩方までには歸つて来るつもりで出かける。ところかだんだんと鷓など撃ちつづけてゐるうちに、しまひに恵まれたベチョーラの川岸などへ出てしまふことがあるものだ。それに鐵砲や犬の好きな人は又きまつて、この世で最も高尚な動物とされてゐる馬を鍾愛するものである。ところで私はレベヂャンへ来たので、旅館に泊まつて、着物を着かへて市へ出かけた。（給仕はひよる長い、瘦せこけた二十歳ばかりの、きれいな鼻にかかつた低音で物を言ふ若者であつたが、\* \* 聯隊の馬匹補充官であるN公爵閣下がここの旅籠屋に泊まつてゐることや、他にも且那方がたくさん来てゐることや、毎晩ジプシーが歌をうたひ、劇場ではドヴァルドーフスキイの興行があるといふことや、馬の相場はかなりいいが、それにし



ても良い馬が相當に出てゐるといふことなどを、豫め聞かしてくれてゐた。

市場の廣場には見とほしのつかない位に車が立ちならんで、その後ろにはありとあらゆる種類の馬がゐる。競争馬、種馬、荷馬、馬車馬、ただの百姓馬といふやうに。中に肥えた艶のよい馬共で、それぞれに毛色で分けられ、色とりどりの馬衣を着、高い架木に綱短かに結びつけられてゐるのが、うしろにゐる自分の持主である博勞の、あまりにもお馴染みの鞭をおおづと流し目に見てゐるのがある。百露里、二百露里むかふの曠野の貴族が、よぼよぼの馭者だとか、二三人の石頭の馬丁に世話をさせて送り出した持馬は、長い頸を振つたり、足ぶみをしたり、退屈まじりに柵をかじつたりしてゐる。茸毛のヴァトカ馬はお互ひにびつたりと、くつつき合つてゐる。尻尾がふさふさして、足に毛々々と毛の生えた石垣馬や、烏毛、鹿毛など、尻の太い駿馬は嚴然と獅子のやうに立つてゐる。目の肥えた人たちは、その前に來ると感心して立ち止まる。車の列で自然に形づくられた通り路は貴賤老若、あらゆる風采の人がごつた返してゐる。青い上衣に、高い鍔なしの帽子をかぶつた博勞は、食へない顔をして、様子を窺ひ、買手を待ち受けてゐる。團栗眼の、縮れ毛のジブシーたちは狂人のやうに、あつちへ行つたり、こつちへ行つたりして、馬の齒を調べたり、足や尻尾を持ち上げたり、わめいたり、罵り合つたり、仲裁役を勤めたり、籤を引いたり、或ひはまた、軍帽をかぶり、海狸の襟のついた外套を着て、馬匹補充官におべつかを

つかつたりしてゐる。頑強さうなコサック兵が一人、鹿のやうな頸をした瘦せた去勢馬に跨がつて顔を出し、その馬を『そつくり』、つまり、鞍も馬勒もつけて賣り拂はうとしてゐる。百姓たちは、腋の下の破けた毛外套を着て、人ごみの中を無闇に突きぬけて、『試し』をすべき一頭の馬に曳かせた一つ車へ何十人でもぎつしり乗り込む。さうかと思ふと、わきの方では、狡猾なジブシーの取り持ちで、根の盡きるまで値段の駆引きをして、互ひに自分の言ひ値を押し通しながら、百べんも續げざまに手ばかりたたいてゐるのがある。ところが一方では、押問答の對象になつてゐる見すほらしいやくざ馬が、反りかへつた籠を着せられて、まるで他所ごとでもあるかのやうに、やつと眼をしばたたいてゐる……また實際のところ、誰の手に打たれようとも馬の身にとつては同じことなのだ！ 鬘を染めて、嚴めしい頭つきをして、波蘭風の三角帽をかぶり、吳細の短衣を片袖だけ通した額の広い地主たちは、羽毛帽子をかぶつて、緑の手袋をはめた麥酒樽のやうな商人たちと、心おきなく話をしはじめ。處々方々の聯隊から來た士官たちもあちこちをぶらついてゐる。獨逸生まれの、恐ろしくひよろ長い鐵騎兵が、跛の博勞をつかまへて、氣のないやうな聲で、「その栗毛をいくらで賣りたいのか？」と訊いてゐる。年の頃は十九くらゐの髪の毛の美しい驃騎兵は、瘦せた跑足の馬に組合はせる添馬を物色してゐる。孔雀の羽をさした山の低い帽子をかぶり、茶色の上衣を着て、細い緑いろの帯に革の手袋を差しこんでゐる郵便



馬車の馬丁は軸馬をさがしてゐる。馭者たちは馬の尻尾を撚り合はしたり、鬣を濡らしたり、恭しげに主人に口添へをしたりしてゐる。契約を済ませた連中は、それぞれの身分に應じて、料理屋へなり、居酒屋へなり、さつさと引き上げる……。かうして誰もが騒ぎ廻つたり、どなつたり、うようよしたり、口論をしては仲直りをしたり、悪態をついては笑つたり、みんな膝まで泥につかつてゐるのである。私はこのごろ持馬がどうもうまく行かなくなつたので、幌馬車につける手頃な三頭立てを一組買はうと思つてゐた。二頭は見つかつたが、あとの一頭はうまく擇り出せなかつた。今ここで絞べる氣になれないやうな不味い食事を済ませてから（昔の悲しみを思ひ起こすことがどんなに辛いか、これは既に遠くイニアスが知つてゐた）、私は馬匹補充官や育馬所の主人や、そのほかの客が毎晩あつまつて来る、所謂『カフェー』といふところへ行つた。鉛色の波をなして煙草の煙の漲つてゐる玉突部屋には二十人ほどの人がゐる。そこには匈牙利風の短衣を着て、鼠色のズボンを穿き、もみ上げが長く、髭には油をつけて、上品に、憚るところなく、あたりを見てゐる氣樂な若い地主が居る。短いコサック風の上衣を着て、おそろしく猪頸で、眼が肥つた顔の中に埋もれてゐるやうな他の貴族たちが、そこにまた、苦しき呼吸をついてゐる。小商人たちはわきの方に、所謂『氣を許さない恰好で』坐つてゐる。士官たちは互ひに勝手氣儘に話をし合つてゐる。玉突をしてゐるのはN公爵で、これは二十二三歳の若い男で、快活な、ど

ちらかといふと傍若無人な顔をして、フロックの釦を一つもかけずに、眞赤な絹の襪衣を見せ、だぶだぶの天鵞絨のズボンを穿いてゐて、退職陸軍中尉ヴィクトル・フロバコフと玉を突いてゐた。退職陸軍中尉ヴィクトル・フロバコフは、小づくりな、色の浅黒い、瘦せぎすな、髪の毛の黒い、茶色の眼をした、ひしやげた獅子鼻の、三十恰好の男であるが、選挙場とか定期市とかには缺かさず出かけて行く。彼は飛んだり跳ねたりするやうな足つきをして、圓まつた手を勇ましく振り廻し、帽子をあみだにかぶり、青黒い寒冷紗の裏のついた軍服の袖をまくつてゐる。フロバコフ氏はペテルブルグから来る金持の道樂者のお氣に入る手際をわきまへてゐて、煙草も喫めば、酒も飲む、一緒に骨牌もやる、さうして彼等と呼ぶのに馴れ馴れしく『君』といふ。全體、どこがよくて御鼻負にあづかるのか、その邊のところはさつぱり解せないのである。別に氣の利いた男ではないし、まして愛嬌者といふ譯でもないから、道化者の仲間にも入らないのである。實際のところ、金持連中は、氣立てのいい、しかも少し足りない奴と思つて一時の氣まぐれに付き合ふので、二三週間は親しく交はるが、やがて忽ちのうちに挨拶もしなくなつてしまふ。すると、こちらはこちらで、もう知らぬ顔をしてゐる。陸軍中尉フロバコフの變つたところは、一年ぢゆう、時には二年もの間、調子外れであらうがあるまいが、いつも同じ言ひ廻しを用ひるところにある。その言ひ廻したるや別に面白くも何ともないのに、どうした譯か、みんなを笑はせるのである。



八年ほど前には、どこへ行つても、『畏れ入つたる、まことに忝ない次第で、』といつてゐた。その頃の彼を鼻負にする人たちはいつも笑ひ轉げて、『わざわざ『畏れ入つたる』を繰り返させたものである。その次には、『いや、もう、あなた、そのその、何ですて、かうなることになつたんで。』といふやうなひどく込み入つた言葉づかひをし始めたが、これがまた大成功であつた。二年ほどして、新しい駄洒落を發明したが、『御身、怒ること、やめよ、人は神の顔、羊の皮をまよふ』なんかと言ふのであつた。ところがどうであらう！ 御覽のとほり、奇抜でも何でもないこんな文句によつて、食ふことも、飲むことも、着ることも出来るのである。(自分の財産は疾うの昔に蕩盡してしまひ、今ではただ友達をたよりに生きてゐる。) 改めていつておくが、全く彼にはこれといつて人を引きつけるやうなところは少しもない。實際、一日にジッコフ煙草をパイプに百服もふかし、玉突きをやるときには右の足を頭よりも高く上げ、狙ひをつけながら、あられもなく片手に棒をふらつかせる。それにしてもこれ式の藝當を面白いと思ふやうな人は一人もゐない筈である。彼はまた飲むこともよく飲む、……しかし、露西亞で好酒家として人に擡んでゐることは容易ならぬことである。一口にいへば、彼の成功は私にとつては全く謎である……。ところがただ一つ恐らくは注意すべきことがある。すなはち彼が用心深く、内輪の話を外へ持ち出さないこと、人の悪口を少しもいはないことである……。

「さて、」私はフロバコフを見ながら考へた、「あの男のこの頃の定まり文句は何だらう？」  
公爵は白球を突いた。

「三十對零」と、暗い顔をして、眼の下に青い痣のある、肺病やみらしいゲーム取りが泣くやうな聲でいつた。

公爵は一突きで黄球を一番さきの凹處へ入れた。

「あれ！」と、隅の方で一本脚のゆらゆらする卓子にむかつてゐた、小肥りの商人が腹一ぱいの聲で感心して叫んだが、ふと氣がついて、これはいけなかつたと歎息して、どきまぎした。けれど幸ひ誰もそれには氣がつかかなかつた。彼はほつとして髯を撫でた。

「三十六對零！」とゲーム取りが鼻で叫んだ。

「おい、どんなもんだえ、兄弟？」と公爵はフロバコフに訊ねる。

「どんなもんですと？ たしかに、ルルルラカリオオオんだな、むろん、一も二もないルルルラカリオオオんだ！」

公爵はふき出してしまつた。

「おい、何だつて？ も一度いつて御覽！」

「ルルルラカリオオオン！」と得意げに退職陸軍中尉は繰り返した。



「なるほど、これだな、定まり文句は！」と私は思った。  
公爵は赤球を凹處へ送つた。

「ええい！ 違ひますよ、公爵、違ひますよ。」と、だしぬけに白つばい髪をした、眼の赤い鼻の小さな、あどけない寝ぼけ顔をした若い士官が恐る恐る口を出した、「さういふ風になすつちやいけません……、かうなさらなくちや……、それではどうも！」

「どうして？」と公爵は肩こしに問ひかへした。

「かうなさらなくちや……その……その三つ球でもつて。」

「さうかしら？」公爵はつぶやいた。

「時に、公爵、いかがでございます、今晚ジブシーを聞きにいらしては？」と若い男は、うろたへながら早口に後をつけた、「スチョーシカが唄ひますよ、……イリュエーシカも……」  
公爵は返事をしなかつた。

「ルルラカオオオンだよ、君、」とコロバコフは左の眼を、そつと瞬きしながら言つた。  
すると公爵は大笑ひをする。

「三十九對零」とゲーム取りが讀み上げた。

「零……よし見てらつしやい、この黄球をやつてみせますから……」

フロバコフは手の内で小刻みに動かし、狙ひをつけて、キックした。

「ええ、ルラカリオオン。」と、口惜しがつて叫んだ。

公爵はまた笑つた。

「何、何、何だつて？」

しかしフロバコフは同じ言葉をもう一度いはうとはしなかつた。やはり手管を弄しなければならぬのである。

「お外しなさいましたね、」とゲーム取りはいつた、「白墨を塗つて差し上げませう……四十對零！」

「さうだ、諸君、」と公爵は集まつてゐる全部の人たちにむかつて、しかも特に誰を見るときもなしにいひ出した、「今夜はあの、ヴェルジエムビーツカヤを舞臺へ呼び出さうぢやありませんか。」

「ほんとに、ほんとに、それがようございます。ヴェルジエムビーツカヤを必らず……」と、何人かの人が、公爵の言葉に答へることの出来るのを無性に嬉しがつて、われ先きにと争つて叫ぶのであつた。

「ヴェルジエムビーツカヤは立派な女優ですな、ソブニャコーワよりはずつと上手ですな。」



と眼鏡をかけた、髭のある不器量な男が隅の方から細い聲で言った。可哀さうに！ この男はひそかにソブニャコワにひどく懂れてゐたのである。公爵はこの男には眼もくれてやらなかつた。

「給仕、おい、パイプだ！」と一人の背の高い容貌の整つた威風堂々たる紳士がぼんやりいつた、——どこから見ても骨牌通りの親玉である。

給仕はパイプを取りに駈けて行つたが、やがて戻つて來ると、郵便馬車屋のパクラীগが閣下にお目にかかりたいと申してゐる由を申し上げた。

「ああ！ それでは暫く待つてゐるやうに言つてくれ、それからウォトカを持つてつてやつてくれ。」

「畏まりました。」

後で聞いたことだが、パクラীগといふのは、年の若い美男子で、ひどく甘やかされて、のぼせあがつた馬丁であつた。公爵はこの男を可愛がつて、馬をやるやら、一緒にトロイカを飛ばすやら、幾晩も一緒に夜を明かすやらしたものである……。今でこそ、この人がと思はれるだらうが、公爵も昔は道樂者で、金づかひが荒かつたさうである……。今では何といふ立派な、眞面目な、しつかりした人だらう！ あんなに職務には熱心だし、——それに、何より第一にあんなに物分かりがいいし！

それにしても、私は煙草の煙で眼が痛くなり出した。最後にフロバコフの定まり文句と公爵の大笑ひをもう一度聞いて、私は自分の部屋へ歸つて行つた。部屋には彎曲した高い背のある、獸毛製の、細長い、彈機バネのゆるんだ安樂椅子の上に、係りの給仕がすでに寢床を作つて置いてくれた。翌くる日、私は小舎へ馬を見に出かけた。先づ音に聞こえたシートニコフといふ博勞ボロのから見ることにした。耳門くわをぬけて、砂をまいてある庭へ入る。開け放した厩の戸の前には主人その人が立つてゐたが、もう若くない、背の高い、肥つた男で、立襟の折り返つたカ兎の皮の小さな毛外套トコを着てゐる。私の影を見ると、徐ろに私の方へ歩いて來て、両手で頭の帽子をおさへ、言葉を長く引つばつていふ、

「ああ、よういらつしやいました。多分、馬を御覽くださるでございませうな？」

「うむ、馬を見に來たんだ。」

「へえ、失禮ですが、どういふ馬でございませうな？」

「まあ、一渡り見せて貰はう。」

「さあ、どうぞ。」

私たちは厩舎へ入つた。白い仔犬が何匹か秣の中から起き上つて、尻尾をふりながら私たちの方へ走つて來た。髯の長い年寄つた牡羊は、不満さうにむかふへ行つた。丈夫な、しかし脂じみ



た毛外套を着た馬丁が三人、黙つて私たちにお辭儀をした。右にも左にも、特に一段と高くした馬置の中には、手入れのよく行届いた馬が三十頭ばかりも立つてゐる。鳩が横木から横木へ飛び移つて、くうくうと鳴いてゐる。

「一體、馬を何にお使ひになるんですか、馬車にですか、それとも種シゴに？」  
「馬車にも、種シゴにも。」

「いや、御尤もで、御尤もで、御尤もでございます、」と二々區切りをつけながら博勞がいつた、「ペーチャ、旦那に『黄オウノスライ 馳』をお目にかけてな。」  
私たちは庭へ出た。

「何でしたら、家から腰掛を持つて來させませうか？ ……御無用ですか？ ……どうぞ御自由シヨウに。」

板場を踏む蹄の音がきこえ、鞭が鳴つて、ペーチャといふあばた面の、色の淺黒い四十恰好の男が、灰色の、かなり容姿なりのいい牡馬をひいて、既から飛び出したが、先づ後足で立たせ、それから二度ばかり庭のまはりを驅けさせ、程よいところへ手ぎはよく引き留めた。『黄オウノスライ 馳』は伸びをして、鼻を鳴らし、尻尾をふり上げ、頭を軽く振つて、私の方を流し目に見た。  
「手馴れた奴だな！」と私は思った。

「ひとりで歩かせろ、歩かせろ。」とシートニコフは言つて、じつと私の顔を見た。

「あいつはいかがでございますませうかな？」と、彼は遂に訊ねた。

「悪くないな、前足が少し頼りないけど。」

「立派な足ですよ！」とシートニコフは確信ありげに言ひ返した、「それにあの腰は……、まあ御覽ください……、それこそ臥ペイチ煖ウツク爐ロぐらゐありますよ、樂に寝られるくらゐですからな。」

「どうも外くろ踝シが長いな。」

「何で長いことがありませう——とんでもない！ ペーチャ、曳いてみる、曳いてみる、跑ダダで、跑ダダで……駆ハけさせないで。」

ペーチャは又もや『黄オウノスライ 馳』を曳いて庭を廻つた。私たちはいづれも暫く黙つてゐた。  
「それでは、そいつを歸して、」とシートニコフが言ふ、『鷹ソコバ』を出せ。」

『鷹』は鬼蟲のやうに眞黒く、腰の下つた和蘭種の、瘦せがたの牡馬であるが、『黄オウノスライ 馳』より格別よいこともなかつた。『あいつは切つたり刻んだり、生捕りにする』と馬好きの人たちがいふ類ひの馬に『黄オウノスライ 馳』も入るが、この言葉の意味といふものは、向きをかへて、前足を左右に開いて、少ししか前へ進まないといふのである。中年の商人たちはかういふ馬が大好きで、步調を見ると小氣こけのきいた給仕の威勢のいい歩きぶりを思ひおこさせるが、これは食後の散歩などに一頭



立てで曳かせると好いものだ。この種の馬は痺れるほど食ひ過ぎた馭者や、嘈囂をわづらふ元氣のない商人や、病弱なその細君の、青い絹外套を着て、薄むらさきの布を被つたのを乗せた不細工な馬車を、刻み足で頸を曲げて一生懸命に曳いてゐるものだ。私は『鷹』をもことわつた。シートニコフはなほ何頭かの馬を出して見せた……。ただ一つ、最後にヴォイエコフ種の石垣馬が私の氣に入つた。私は嬉しくてたまらなかつたので、鬘甲を撫でてやつた。シートニコフはぢきに何喰はぬ顔をした。

「どうだ、うまく乗つて行けるかな！」と私は訊いた。（跑足の馬の話の時には『走る』とはいはない。）

「へえ。」と博勞は氣のない返事をする。

「試してみるわけには行かないかしら？ ……」

「どういたしましたして、宜しうございますとも。おい、クージャ、『追付』を馬車に繋げろ。」

その道の達人といふ調馬師のクージャが、通りを三度ばかり私たちを前にしてあちこちと御して見せた。馬はなかなかよく走つた、歩調を變へることもなく、よろめきもせず、ゆつたりと足を運んで、尻尾を振り分け、尻尾を高くあげたまま、この駿馬は。

「いくらで賣るね？」

シートニコフは無茶な値段を吹つかけた。私たちは、通りに立つたまま掛合ひをはじめた。すると不意に目ざましく揃つた三頭立の驛遞馬車が、けたたましく街角から飛び出して来て、シートニコフの家の門の前でびたりと停まつた。見ると氣のきいた小さな獵馬車にN公爵が坐り、わきにはフロバコフがきよとんとした顔を出してゐる。バクラーガが馬を馭してゐた……。その馭し方の鮮かさといつたら！ 奴と來たら馬車を驅つて耳環の中でもくぐりぬけようといふ、太い奴だ！ 鹿毛の側馬は、なりの小さい、活々した、眼と足の黒い奴で、すつかり逸り切つて、うづくまつてゐる。一寸でも口笛を吹かうものなら——消えてなくなるだらう！ 黒栗毛の軸馬は、頸を白魚のやうに曲げ、胸をつき出し、足を矢のやうに揃へて、しやんと立つてゐる。絶えず頭を振つては、誇りに瞬きする……。美事なものだ！ 復活祭にだつて誰がこんな立派な馬車に乗れるものか！

「閣下！ どうぞお入り下さいまし！」とシートニコフが叫んだ。

公爵は馬車から跳び下りた。フロバコフは徐かに別の側から下りた。

「やあ、今日は……いい馬はあるかい？」

「御前様のお役に立つやうなのが何で無いことがあるもんですか！ どうぞ、お入り下さいまし……ペーチャ、『孔雀』を連れて來い！ それから『褒めっ子』も用意するやうにいひつけて。」



それから旦那とは、と博勢は私の方を向いて言葉を繼いだ、「いづれまた改めて決めませう……  
フォームカ、御前様にお腰掛を。」

最初、私に氣のつかなかつた特別の厩から『孔雀』を曳いて來た。強さうな、黒味がかつた逞  
ましい鹿毛の馬は足も地についてゐないかと思はれた。シートニコフは頭をさへもわきへ振り向  
けて、眼を細くした。

「おお、ルラカリオン！」とフロバコフが聲をはり上げた、「ジユムサア！」  
公爵は笑ひ出した。

『孔雀』は引き止められたが、引き止めるのは容易でなかつた。馬丁を引きずつて庭の中を走  
つたが、たうとう終ひには壁に押しつけられた。それでもまだ鼻息を吹いては、身を顛はせて、  
うづくまる。またシートニコフはこれに鞭を振りあげて、一そう焦らしてゐる。

「どこを見てる？　そうれ一つくれるぞ！　うう！」と博勢は自分で自分の馬に思はず知らず  
見とれながら、やさしく脅やかすやうにかういつた。

「いくらだ？」と公爵が訊ねた。

「御前様のことでございますから五千留<sup>ル</sup>で。」

「三千だ。」

「とんだことで御座います、御前様、御冗談でせう……」

「三千でいいことよ、ルラカリオン。」とフロバコフが口を入れた。

私はこの取引の結末を待たずして、そこを立ち去つた。ふと見ると、通りの一番とつ先きの角  
に灰色がかつた小さい家があつて、その門に大きな紙が張りつけてある。上の方にはペンで馬が  
描いてあつて、尾は煙管<sup>タバコ</sup>のやうな形をし、頸はむやみに長い。そして馬の蹄の下には古風な書體  
で、次のやうな文句が書いてある、

『この處に毛色さまざまの賣馬有之候。タムボフ縣の地主アナスタセイ・イワーヌイチ・  
チェルノバイの有名なる曠野の育馬場より、當レベチャンの市<sup>いち</sup>に連れ來りしものに候。體格  
いづれも優等の馬にして、完全に馴育せられ、性質温順なるものに御座候。購買者諸賢は  
アナスタセイ・イワーヌイチに直接御問合せ下され度く、アナスタセイ・イワーヌイチにし  
て不在の節は、馭者ナザール・クブイシキンに御問合せ下され度候。希くは購買者諸賢、老  
生の年に免じ御來駕の榮を賜はらむことを！』

私は立ち止まつた。『よし、一つ有名なる曠野の育馬場主チェルノバイ氏の馬を見てやらう』  
と私は考へた。

私は耳門の中へ入らうとしたが、この邊の仕きたりとは違つて、見ると錠がかかつてゐるので



ある。私はとんとん敲く。

「どなた？ ……お客様？」と女の細い聲がする。

「さうだ。」

「唯今、旦那、唯今。」

耳門が開いた。五十恰好の老婆があらはれた。長靴をはいて、毛外套を無造作に引っかけて、何も被らずにゐる。

「さあ、どうぞお入んなさいまし、旦那様。おきにアナスタセイ・イワーヌイチのところへ行つて、さう申し上げますから、…ナザールや、ちよつと、ナザール！」

「何よ？」と七十老人のもくもくいふ聲が既の方から聞こえる。

「馬の仕度をした。お客様がいらしたんだよ。」

婆さんは家の中へ駆けこんだ。

「お客様か、お客様、」とナザールはぶつぶつ答へた、「俺あ、まあだ、尻を洗ひ切んねえのに。」

「ああ、桃源境だな！」と私は考へた。

「今日は、旦那、いらつしやいませ。」とうしろから瑞々しい、爽やかな聲が、ゆつたりと聞

こえて来た。私はふりかへつて見た。私の前には、青い裾の長い外套を着て、髪は眞白い、中背の老人が、愛想のよい微笑みを浮かべながら、きれいな青い眼をして立つてゐる。

「馬が入用ですかの？ よろしい、え、承知しました…が、まあ、私のところへ寄つて、お茶を一つあがりませんかの？」

私は禮をいつて辭退した。

「そんならまあ御隨意に。あなた、どうか大目に見て下さい、僕は昔風の者でしてな。」(チェルノバイ氏はゆつくりと、Oをそのままに發音する。)  
「僕ん所では何もかもむき出しですから、ねえ、…ナザール、おい、ナザール。」と別段高い聲を出すでもなく、言葉尻を引つぱつて附け足した。

ナザールは小さな鉤鼻と楔形の髯のある皺くちや爺で、既の鬨のきはに姿をあらはした。

「あなた、どんな馬が御入用かの？」とチェルノバイ氏はいひつづける。

「あまり高くないところで、幌馬車へつける奴を。」

「成程、…さういふのもある、よろしい…ナザール、ナザール、旦那にあの茸毛の去勢馬をお目につけな、それ、一番むかふの隅にゐる。それから星のある茸毛が、でなければ、もう一つの茸毛を、あの『別嬪』の子よ、知つてらだらう？」



ナザールは既へ引き返した。

「そのまま輪索をもつて連れて来い。」とチエルノバイ氏はうしろから大聲をかけた。「ここちや、あんた」と彼は明るい優しい眼で私をじつと見ながらつづける、「博勢相手にしてるやうに、だまされる氣遣ひはありませんよ！ あいつらんとこにや、いろんな妙薬がありますからね、鹽だとか、酒糟だとか、いやはや、ひどいことをいたしますよ！ ……それが手前んとこぢや、御覽なさい、何事も大つびらで、策略なんかありませんからのう。」

馬を曳き出して来た。どれも私の氣に入らない。

「さあ、そいつらは駄目だから連れて歸れ、」とアナスタセイ・イワーヌイチがいふ、「別のを出して見せ。」

他のを見せられた。たうとう私は、少し安いのを一回擇り出した。私たちは値段の駆引きを始める。チエルノバイ氏は腹を立てないで慎重に落ちついて話をするので、私はこの『老生の年に免じ尊敬を』拂はない譯には行かなかつた。そこで手金を渡してしまつた。

「さて、それでは、」とアナスタセイ・イワーヌイチが言ふ、「昔風に馬は裾から裾へお渡しすることにしてさしていただきませう、…あんたも私にお禮をいつても宜しうございますよ、…いきいきした奴ぢやごわんせんか！ 若い胡桃みたいに…手つかずの奴で…原つ兒で！ どん

な馬車につけたつて大丈夫。」

彼は十字を切つて、外套の裾を手の上にひろげ、その手で輪索をとつて、私に馬を渡した。

「さあ、どうぞあなたの持物にして下さい…、そこでお茶を一杯いかがですかの？」

「いや、大きに有難う、けど、もう歸る時刻だから。」

「ぢや、どうぞ御随意に…、ところで、別當に馬を曳かしてお伴させませうかの？」

「さうだな、さう願へるなら。」

「よろしい、うん、よろしい、…ワシーリイ、おい、ワシーリイ、旦那と一緒に行きな。この馬ひつばつてつて、お錢いたくだよ。それでは、あんた、さいなら、お達者で。」

「さやうなら、アナスタセイ・イワーヌイチ。」

馬は宿へ送り届けられた。翌る日になつて見ると、疲れた跛馬であることが分かつた。私は馬車につけて見ようとした。ところが尻込みして、鞭をくると、暴れる、蹴る、それにまた臥てしまふといふ始末。私は早速チエルノバイ氏のところへ出向いて行つた。

「在宅ですか？」

「はあ。」

「これは一體どうしたんです。」と私はいつた、「あなたは乗り潰した馬を私に賣りつけたぢや



ありませんか。」

「乗り潰した？ ……とんでもない！」

「それに、おまけに跛ひつこで、そのうへ、ぢやぢや馬と來てる。」

「びつこ？ それあ私も知つたことぢやない。あんたの別當が何か悪い扱ひをしたんでせう、…だが、儂は神様の前へ出て…。」

「とにかく、そんな譯だから、アナスタセイ・イワーヌイチ、馬は引きとつて貰はなければならん。」

「いや、あんた、さう怒らないで下さい。一旦、庭から出したら、話は済んだもんですからの前によく見て置いて下さりやよかつたのに。」

私は意のあるところを了解したので、これも運だとあきらめて、氣持よく笑つて引き上げた。仕合はせなことはない、私はあまり高い金を拂はずに教訓を得たのであつた。

それから二日ほどして、私はレベヂャンを去つたが、一週間のちに歸る途すがら、またそこへ立ち寄つた。カフェーへ行つてみると、殆んど同じやうな人たちがゐて、再びN公爵を玉突場に見いだした。しかし、フロバコフ氏の身の上には、早くも例の變化が起こつてゐた。公爵の寵は今や髪の美しい若い士官に移つてゐた。哀れむべき退職陸軍中尉は私のあるところ、おそらく

は前のやうにお氣に召されようと思つたものか、もう一度、例の定まり文句を放つてみたが、公爵は一向に笑ふどころではなく、苦い顔をして肩を竦めさへもした。フロバコフ氏は下を向いて、小さくなつて、こそそと隅の方へ身を寄せ、ひそかにパイプに煙草をつめかけた…。



## タチャーナ・ポリーツナとその甥

記 日 人 獵

親愛なる讀者よ、私に手をお出しなさい、さうして一しよに参りませう。天氣は麗らかである。五月の空は物やはらかに青く澄んでゐる。滑らかな柳の若葉は、洗ひたてたやうに輝いてゐる。廣い平らな道は、羊が好んで噛む赤らみがかつた草の小さな草にすつかり覆はれてゐる。長い丘の斜面には、右にも左にも、緑のライ麥が靜かに浪をうつてゐる。小さな雲の影は疎らな點を描いてその上を滑つて行く。遠くには森が黒く、池が耀き、村が黄いろく見える。幾百の雲雀は舞ひあがり、歌を歌ひ、眞逆様に落ちて来て、頸をさしのべ、土くれのうへに姿を見せる。白嘴鴉は街道の上を下り立ち、こちらを見ては、何かを啄ばんでゐる。馬車を通すには通す。二度ばかりびよんびよんと跳んで、大儀さうにわきの方へ飛ぶばかりである。谷の向ふの山のうへには百姓が畑を耕して居る。尻尾の短い、鬣のみだれた幼い石垣馬が母馬の後をたどたどしい足どりで追ひまはしてゐる。その細い嘶きが聞こえる。私たちは白樺の林に乗り込む。強い新鮮な香ひに快よくむせかへる。もう村の近くへ來た。馭者は車を降りる。馬は鼻を鳴らしてゐる。側馬はあ

甥のもとナヴソリーボ・ナーヤチダ

たりを見まはし、軸馬は尾を振つて、頸木の方に頭を仰向ける、……大きな門がぎいと開く。馭者は腰をかける、……さあ、行け！ 村は私たちの前にある。屋敷を五軒ほど通り過ぎて、私たちは右に折れ、窪地に下り、堤に乗り上げる。小さな池の向ふに、林檎や紫丁香花の圓い梢の間から、二本の煙だしのある、嘗ては赤かつた板屋根が見えて來る。馭者は生垣を左に沿うて、三匹の老いぼれた老犬が、細い嘎れた聲で吠えるのを聞きすてて、開け放した門に乗り入れ、廣い屋敷の厩や納屋の傍をぐるりと巧みに廻つて、物置の開いた戸口の高い閤を横向きになつて跨いでゐる年寄の女中頭に威勢よく挨拶し、やがて遂に明るい窓のついた暗い家の上り段の前に馬をとめる、……私たちはタチャーナ・ポリーツナの家へ來たのである。やがて彼女は自から風窓を開けて、私たちの方を向いてうなづいてゐる、……「今日は、小母さん！」

タチャーナ・ポリーツナは、大きな灰色の飛び出た眼をして、どちらかといへば團子鼻の、頬の紅い、二重顎の、五十ばかりになる婦人であつた。その顔には温情と親切の色があふれてゐる。嘗ては結婚したこともあつたが、間もなく孀になつてしまつた。タチャーナ・ポリーツナは實に立派な婦人である。どこへ出かけるといふこともなしに小さな持村に暮らして、近所づきあひもせず、ただ若い人たちにだけ應待して、他の人たちを好かない。もとはかなりに貧しい地主の家に生まれたので、これといふ教育もうけなかつた。といふのは、つまり佛蘭西語が話せな



いのである。モスクワにさへも一度も行つたことがない、……さて、かういふ缺點があるにも拘らず、質朴に善く身を持して、ものわかりがよくて、物の考へ方も自由で、暮らしの裕かでない奥方によくあり勝ちな悪い癖などにも殆んど染まつてゐない。これには全く驚かざるを得なかつた……。實際、年百年中、草深い田舎に暮らしてゐながら——蔭口をきくでもなし、泣き言を並べるでもなし、お世辞も言はず、騒ぎもせず、歎きに沈むこともなく、好奇心に顫へることもない、……これは驚異であつた！ いつも鼠色の琥珀織の着物を着て、薄むらさきのリボンのさがつた白い部屋帽子をかぶつてゐる。食へることは好きであるが、それも度を過こすといふわけではない。ジャムも乾した物も鹽漬けも家政婦にまかせておく。一體、あの女は一日中何をしてゐるのか？ と諸君はお訊ねになるだらう……本を讀んでゐるのか？ ——いいえ、本など讀んでゐる。實を申せば本の方から御免をかうむるのである……。わがタチヤーナ・ボリーソヴナは若しお客のない時には、冬ならば窓ぎはに腰をおろして靴下を編み、夏ならば庭へ出て草花を植ゑ附けたり、水をくれたり、仔猫を相手に何時間も遊んだり、鳩に餌をやつたりしてゐる……。こんな風で、殆んど家政の方はおかまひなしである。けれども、いざ自分の好きな近所の若い人でもお客に來たとなれば、タチヤーナ・ボリーソヴナはすつかり元氣づいて、椅子をすすめるやら、茶を振舞ふやら、お客の話に聞きとれて、笑顔を見せたり、時にはお客の頬を撫でたりする。

しかし、自分ではあまり口をきかない。哀れなことがあつたり、悲しいことがあつたりすれば、慰めてやつたり適當な助言をしてやつたりする。家庭の内情を打ち開け、心の祕密を打ち開けて、彼女の手をとつて泣いた人がどれだけあることだらう！ いつも彼女はお客と向き合ひに坐つて、そつと肘をつきながら、ひどく同情して相手の眼を見て、愛想よく微笑みを洩らすので、客は思はずも『タチヤーナ・ボリーソヴナ、あなたは何ていふ好いお方なんでせう！ どうかこの胸の中を聞いて下さい。』といふやうな氣持になつてくる。小さな小ぢんまりした部屋に入ると、誰でも居心地のよい温か味を感じる。若しかういふことがいへるなら、彼女の家はいつも上天気なのである。タチヤーナ・ボリーソヴナは不思議な女である。が、誰も彼女を不思議がりはしない。彼女のたしかな分別や、しつかりしたところや自由なところ、他人の悲しみや喜びに對する温かな同情など、一口にいへば、あらゆる彼女の美れた性質といふものは、全く生まれながらにして具はつてゐるもので、彼女にとつては何も骨の折れることでも面倒なことでもない、……といふよりほかに別に考へやうもないのである。従つて、わざわざ有難がるものもないのである。彼女は若い人たちの遊びや悪戯を眺めてゐるのが殊のほか好きである。胸に両手をかさね、頭を後ろへそらし、眼を細くして、にこにこしながら坐つてゐるかと思ふと、急に溜息をついていふのである、『ああ、子供よ、可愛い子供よ……』人は彼女のそばへ行つて、手をとつて、かういひた



くなる、『ねえ、タチャーナ・ポリソヴナ、あなたは御自分の價値を御存じないんですね、あなたはいくら素朴で、學問がおありにならないからといって、實に偉いお方なんですよ!』その名は何か親しい、なつかしい響きを傳へる。そして好んで口にされ、口にする人に人なつこい微笑みを浮かべさせる。例へば、道で出會つた百姓に訊ねたとする、『おい君、グラチエーフカへはどう行つたらいいだらう?』假に何度訊ねたとしても、『それは、且那、先づヴァゾヴォエへおいでになつて、そこからタチャーナ・ポリソヴナ様ところへおいでなさい。それから先は誰でも教へてくれませう。』と答へるに決まつてゐる。しかも百姓たちは、タチャーナ・ポリソヴナの名を口にするときには、何だか妙に頭を揺りうごかす。彼女は身分相應に僅かばかりの召使を置いてゐる。邸や、藏や、洗濯場や臺所は女中頭のアガフィヤといふ、もとはタチャーナ・ポリソヴナの保母をしてゐた極めて氣だての善い、涙もろい、齒もなくなつてゐる女が采配を振つてゐた。その指圖をうけてゐるのはアントーノフ林檎のやうにふつくりした紅い頬の、頑丈な二人の小間使である。侍僕や、執事や、食堂番の役目は七十二になる下男のポリカルプが勤めてゐる。この老人は學問のある男で、もとはヴァイオリニストで、ヴィオッティの崇拜家で、又あのナポレオン、いや彼の所謂ボナバルト奴を眼の仇にし、夜うぐひすが飯よりも好きだといふ珍しい變り者である。彼はいつも自分の部屋に夜うぐひすを五羽や六羽、飼つておかないこと

はない。春の初めになると、籠に寄り添つて、最初の一聲を待ちながら幾日も幾日も坐りこんでゐる。やがてやうやくその聲を聞くと、彼は両手で顔を覆ひ、「おゝ、可哀さうに、可哀さうに!」と呻き出して、さめざめと泣きはじめる。ポリカルプには手傳ひとして、自分の孫で、ワシヤといふ十二ばかりになる、髪縮れた、眼の鋭い男の兒が附いてゐる。ポリカルプはこの子を無性に可愛がつて、朝から晩まで世話をやいてゐる。彼はまたその教育も自分でしてやる。「ワーシヤ! ボナバルト奴は悪黨だつて言ひな。」と彼はいふ。「さうしたら何を呉れる? お祖父ちゃん。」「何を呉れるつて? ……なんにもやらないよ。…一體お前は何だと思ふ? 露西亞人がやないかえ?」「私はアムチャニンだよ、お祖父ちゃん。アムチャニスクで生まれたもの。」「ああ、この馬鹿野郎! アムチャニスクはどこにある?」「私、そんなこと知るもんかい?」「露西亞にあるんだぞ、アムチャニスクは。この馬鹿。」「露西亞にあるつたつて、それでどうしたの?」「それでどうだつて? お亡くなりになつたミハイロ・イラリオノキッチ・ゴレニシチェフ・クトツゾフ・スモレンスキ大公殿下がな、神様のお助けを藉りて、この露西亞の地からボナバルト奴を追つ拂つて下すつたんだぞ。此時だ、あの『踊るところか、ボナバルト、靴下留をおつことし』つていふ唄が出来たのは。わかつたかえ、大公殿下がお前たちの生まれた國を助けて下すつたんだよ。」「それで、私がどうしたつていふの?」「ああ、この頓馬野郎、この



頼馬！なあ、もしもミハイロ・イラリオノキツチ大公殿下がボナバルト奴を追つ拂つてくれなかつたら、お前なんか今頃はどの馬の骨かわからない佛蘭西人に脳天をステッキでたたかれてるんだぞ。その役人がな、こんな風にお前ん所へやつて来て、『機嫌はどうだ？』つていふだらう、それからこつん、こつんだ。『そしたら私、どんと一つ横つ腹を小突いてやらあ。』ところがな、『今日は、今日は、こつちへお出』なんかつていつて、頭の毛をつかむぞ。『そしたら私、そいつの脚を、ひよろひよろ脚を打つ叩いてやる。』うん、さうさう、奴等の脚はひよろひよろ脚だなあ、……さあ、それで、お前の手を縛つたらどうする？』『そんな真似させないや。私、別當のミヘイに加勢して貰ふ。』だが、どうだ、ワーシャ、佛蘭西坊とミヘイぢや勝負にならんぢやないか？』『ならないつて！ミヘイはほんとに強いんだよ。』『さあ、敵はなかつたらお前どうする？』『俺ら、うしろから叩いてやる、うしろから。』『そしたら『御免』つていふだらうな、』『御免、御免、どうぞ！』つて。』『そんなこといつたつて、『どうぞも糞もあるもんか、この碌でなしの佛蘭西坊！』つていつてやらあ……』『えらいぞ、ワーシャ！さ、そんなら『ボナバルト奴は悪黨だ！』つて呶鳴るんだ。』『呶鳴るから砂糖おくれよ！』『何だ、こいつ奴……』

タチャーナ・ポリソヴナは女地主連には殆んど會はない。女地主たちの方でも自ら進んで訪ねようとする。タチャーナは彼女たちを面白がらせることが出来ない。女たちがやかましくお

喋りをしてゐるのを聞いてゐると、つい睡たくなる。はつと気がついて、眼をあけようと努めるけれど、また睡氣がさす。タチャーナ・ポリソヴナは大體が女といふものを好かないのである。彼女の友達に、感心な、おとなしい青年があつたが、その男に一人の姉があつた。三十八九にもなる老嬢で、至つて氣だての善い人であるが、今は器量も落ちて、向ふ見ずで、ともすれば有頂天になる女であつた。弟が折々、近所のタチャーナの話を聞かせてゐた。ある天氣のよい朝、この老嬢はだしぬけに馬に鞍を置かせて、タチャーナ・ポリソヴナのところへ出かけて行つた。裾の長い着物を着、帽子をかぶつて、草色の面帕をつけ、髪を振りみだして、玄關へ入つて行つた。水妖かと思つて怖ぢ氣づいてゐるワーシャを尻目にかけて、彼女はどんどん客間の方へ駆け込んだ。タチャーナ・ポリソヴナは驚いて立ち上らうとしたが、足がすくんでしまった。『タチャーナ・ポリソヴナ、』と、この來客は哀願するやうな聲で話し出した、『無駄をお許し下さいまし、私はあなた様のお友達のアレクセイ・ニコライキツチ・K……の姉でございまして、お噂はいろいろ弟から承はつて居りますので、是非ともお近づきになつていただきたいと存じます。』『それはまあ、ようこそ。』と呆氣にとられて主は口ごもつた。お客は帽子を脱ぎすて、捲き髪をふさふささせながら、タチャーナ・ポリソヴナのわきに坐り、その手を取つた……。

「ああ、この方だつたわ」と彼女は物思はしげな、感きはまつたやうな聲で言ひ出した、「これ



こそ、あの氣立ての善い、さつぱりした、高尚な、心の清らかなお方なんだわ！ ああ、さうだわ、これがあの、あつさりしてゐて、深味のあるお方なんだわ！ うれしいわ、私、うれしいわ！ わたしたち、どんなに、お互ひに好きになるでせう！ わたし、これで、ほつとしましたわ……この方、こんなお方だつて、わたし想像してた通りだわ。」彼女はタチャーナ・ポリソヴナの眼をじつと見まもつたまま、囁くやうに附け足した。「あなた、ほんとに怒つてらつしやるんぢやありませんの、ねえ、あなた、ねえ？」「どう致しまして、ほんとに喜んでゐますわ……あの、お茶でも召し上がりませんか？」お客は慎ましく微笑んだ。「Wie wahr, wie unreflectant なんていふ打ちとけた、なんていふわたがかりのない方でせう」と、彼女は獨り言のやうに呟いた。「あなた、あなたを抱擁さして下さいな！」

老嬢はタチャーナ・ポリソヴナのところに、のべつまくなしに喋りつづけて、三時間も腰を据ゑてゐた。彼女はこの新しい知合ひに、しきりに自分自身の豪いことを説明しようとするやうに努めてゐた。このだしぬけなお客の歸るのを待ちかねて、困りはた主婦は風呂に入つて、菩提樹の煎茶をたくさん喫んで、床へ入つた。しかし翌る日にまた老嬢はやつて来て、四時間も過ごし、これからは毎日タチャーナ・ポリソヴナに逢ひに来ると約束して行つた。察するに彼女は當人の言葉を藉りていふと、自分はこの女の豊かな天分をあくまでも發達させ、完全に教育してやらうと

思つたのであつた。そして若しも第一に、二週ばかりするうちにこの自分の弟の友達のことにも『全く』幻滅を感じなかつたら、また第二に、遊びに来た若い學生に惚れこんで、直きに、まめやかな、はげしい手紙のやりとりなどをはじめなかつたら、それに手紙の中でお定まりのやうに、相手を神聖な、美しいものに祭りあげ、『一身を擧げて』犠牲にするといつたり、ただ願はくは姉と呼んで貰ひたいといつたり、更に自然の描寫に耽つたり、ゲーテやシルレル、ベッティナのことや獨逸の哲學のことを述べたりして、遂に可哀さうにも、この若者を暗澹たる絶望のうちへ追ひこむやうなことになるなかつたら、必らずやタチャーナはさんざに弱らされたことであらう。それにしても若い學生は若さによつて眼をさませられた。彼は或る晴れた朝、自分の『姉』にして、しかも最も親しい友達』に對する狂暴な憎惡に燃えて眼がさめた。そのために忿怒のあまり、すんでのことで侍僕を殴るところであつた。それからといふもの長い間、崇高な純潔な愛などといふことは一言聞いただけでも癪に障つてたまらないやうになつた……。さて、こんなことがあつてから、タチャーナ・ポリソヴナは前よりも一そう近所の女たちと附合ふのを避けるやうになつた。

悲しいかな！ この世には無常ならぬものはないのである。私が今までお話しした氣立てのよい女地主の生活のことは、何もかもが過去のことである。彼女の家にあふれてゐた靜寂は永久に破



られてしまつたのだ。今、彼女のところには、すでに一年餘りになるが、ペテルブルグから来た畫家の甥が住んでゐる。それは、かういふ事情からであつた。

八年ほど前、タチャーナ・ポリソヅナの許に十二ばかりになる男の子で、彼女の亡くなつた兄の息子にあたるアンドリュエーシャといふ孤し兒が引きとられてゐた。アンドリュエーシャは大きくばつちりして霑ほひのある眼と、小さい可愛らしい口と、よく整つた鼻と、美しく秀でた額をしてゐた。靜かな、きれいな聲で話をし、いつも身なりをきちんとし、行儀正しく、お客に甘へたり、媚びたりし、いかにも孤し兒らしく、いぢらしく叔母さんの手に接吻したりした。若し誰かが訪ねて行かうものなら、いち早く安樂椅子を持つてくる。彼は悪戯ひとつするではなし、物音ひとつ立てるではなし、本を持つて部屋の隅へ行つては、おとなしく慎ましやかに坐つて、椅子に凭れかかることさへもしなかつた。お客が入つて來ると、わがアンドリュエーシャは立ちあがつて、控へ目に微笑みを作つて顔を赧らめる。お客が出て行くと、また腰をおろして、ポケットから刷毛と、懷鏡を取り出して髪を撫でる。彼は極く小さい時分から繪ごころがあつた。紙きれを見つけると、直ぐに女中頭のアガフィヤに頼んで鏡を借り、よく氣をつけて、その紙を四角に切り、紙のまはりに縁をとつて仕事にとりかかる。瞳の大きな眼を描いたり、希臘風の鼻を描いたり、煙突のある家を描いて、螺旋形の煙を吹いてゐるところを描いたり、腰掛かと思はれ

るやうな前向きの犬とか、二ひきの鳩のとまつてゐる小さな樹などを描いて、それに「何年何月何日マイルイエ・ブルイキ村にて、アンドレイ・ペロヴゾーロフ畫く」と署名した。タチャーナ・ポリソヅナの命名日のまへ二週間ばかりといふものは特に精を出して仕事をした。先づ第一に出て來てお祝ひの言葉を述べるのはこの子で、薔薇色のリボンで括つた巻物を叔母さんに差し上げる。タチャーナ・ポリソヅナは甥の額に接吻して、結び目をほどく。巻物は披げられて、圓柱があり、中央に祭壇があつて、大膽に陰影をつけて描き上げた神殿が、物珍しさうに見てゐる叔母さんの眼の前へあらはれる。祭壇には心臓が燃え、花束が置いてあつて、その上の方には、曲りくねつた飾り枠の上に、はつきりした文字で「敬愛に充ちたる甥より叔母さんにして恩人なるタチャーナ・ポリソヅナへ、深甚なる愛慕の標章として」と書いてある。これを見るとタチャーナ・ポリソヅナは再び接吻をして、一ルーブリの銀貨を與へる。しかし彼女は心から甥を愛する氣にはなれなかつた。アンドリュエーシャのさもしい心根が全く氣にいらなかつたのである。さうかうしてゐるうちに、アンドリュエーシャはずんずん大きくなつて行つた。タチャーナ・ポリソヅナには、その行く先が案じられるやうになつて來た。が、このとき、思ひもよらない事が起きて一先づ苦勞を免れることになつた……。

といふのはかういふことである。今から八年ほど前の或る日のこと、六等文官の帶勳者ピョー



トル・ミハイルイチ・ベネヴォレンスキイ氏なる人が訪ねて来た。ベネヴォレンスキイ氏は、嘗つては程遠からぬ郡役所のある町に官吏をしてゐたが、その頃は足繁くタチャーナ・ポリソヴナのところへ遊びに来たものであつた。その後ベテルブルグへ移つて、本省に入り、かなり重要な地位を得た。ところで屢々公用で旅行をするが、このたびは昔の知合ひを思ひ出して、『村の静寂に抱かれて、』二日ばかり公務の疲れを休めようと考へ、彼女のところへ立寄つたのである。タチャーナ・ポリソヴナはいつものやうに感慙に彼を迎へた。そしてまたベネヴォレンスキイ氏も……。しかし、この話を進める前に、親愛なる讀者よ、この新しい人物を紹介さしていただきたい。

ベネヴォレンスキイ氏は中柄な、見たところおとなしきうな、小肥りな人で、脚は短かく、手はやんはりふくれてゐた。ゆとりのある、かなりきちんとした燕尾服に、高い、幅の広いネクタイをつけ、雪のやうに眞白いワイシャツを着て、絹のチョッキに金鎖をからませ、人差指には寶石入りの指環をはめ、金髪の鬘をかぶつてゐる。話をするときは諄々と人を説くやうな、物やはらかな調子で、歩くときにも音を立てない。見てゐても氣持のよい微笑みをうかべ、眼を快よく動かし、襟飾りの中に頸を埋めるのも見てゐて氣持がよい。概して彼は氣持のよい男であつた。生まれつき實に氣だての善い男で、容易に涙を流したり、物に感動したり、その上に、藝術のこと

になると後先の考へもなく火のやうに熱中するのであつた。後先の考へもないといふのは實際のことであつた。なぜといふのにベネヴォレンスキイ氏には、正直にいへば、藝術のことなどは全く何一つ譯がわからなかつたからである。ところが、どうしてこんな熱情が湧いて来たのか、如何なる神祕的な、不可解な法則の力によるものかは驚異ですらもあつた。どうも、見たところは獨りよがりな、むしろ世間並な人間だつたのである……。尤も、わが露西亞には、こんな人間は實に夥しい。

藝術および藝術家に對するかういふ手合の愛情といふものはお話にならないあくどさを帯びてゐる。こんな連中と附合つたり、話をしたりするのは閉口である。彼等は全く蜂蜜を塗つた丸太棒のやうなものである。例へば、ラファエルをそのままラファエル、コレッジオをそのままコレッジオなどとは決して彼等はいはない。『神のごときサンツィオ、匹儔なきデ・アレギリス』といひ、必らず〇に力を入れていふ。大抵のお國のもの、己惚れの強い、極めて蟲のいい凡才を彼等は天才として、即ち一そう正しくいへば天才として祭りあげるのである。『イタリヤの碧なす空』『南國の檸檬樹』『ブレンタ河畔のかぐはしき風』などといふ言葉はいつも彼等の唇にのぼる。『ああ、ワーニャよ、ワーニャ、』とか『サーシャよ、サーシャ。』と互ひに情を含めていふ。『行かむかな、南の國へ、南の國へ、……君も我も魂に於ては希臘びと、古代の希臘びとならず



「や！」展覧會の露西亞の畫家の作品の前などへ行くと、かういふ人たちを見ることが出来る。(これらの紳士の大部分が熱烈なる愛國者であることを注意しなければならぬ。) 彼等は或ひは二歩ほど後ろにさがつて、頭を仰向けにし、或ひはまた畫に近づいて行く。彼等の眼は油のやうな滑ほひを一ぱいにたたへてゐる……。『ふう、見あげたものぢやのう！』と遂には感きはまつていふのである、『魂が、じつに魂が！ ああ、生きてる！ 生きてる！ ああ、魂がこもつてゐる！ 磅礴たる魂が！ ……よくもこんな想を構へたものだ！ この構想たるや眞に大家の風ありだ！』ところで、彼等の自分の家の客間にある繪はどんなものか！ 毎晩のやうに彼等のところへやつて来て、お茶を飲んで彼等の話に耳を傾けてゐる畫描きどもはどうであるか！ 彼等自身の部屋が即ち遠近法を見せてゐるのを見よ、前景には右の方に刷毛があり、磨き立てた床にはうつすらと塵がたまり、窓に近い卓子のうへには黄色いサモワールがあり、この家の主人は寢巻を着て頭布をかぶり、頬に明るい日光をうけてゐる！ 熱病やみのやうな賤しい微笑をうかべて、彼等を訪れる髪の長い美神の弟子たちは如何なるものであらう！ 彼等のところでピアノに向つて、きやっきやつとさざめく蒼ざめた緑いろの顔をした御婦人がたは如何に！ これが抑ゑわが露西亞におけるお定まりなのだ。露西亞人は美術にはかり専心してはゐないのだ、——何にでもかんにでも手を出すのである。だからこそ、これらのアマチュアの紳士諸君が露西亞の文學、

わけても劇文學に非常な援助をしてゐることは毫も怪しむに足らないのである……。『ジャコーブ・カンナザール』は彼等のために書かれたものだ。何百遍とはなしに書き古された世に認められない天才と世の人々、全世界との葛藤は彼等を心から感動させるのである。ベネヴォレンスキイ氏が來た翌る日に、タチャーナ・ポリソヴナは茶話をしながら甥に向つて、その繪をお客様にお眼にかけるやうにといひつけた。「こちらの方は繪を描くんですか？」とベネヴォレンスキイ氏はいささか驚いていひ、物珍しさうにアンドリュエシヤの方を向いた。「ほんとに描きますの。」とタチャーナ・ポリソヴナはいつた。「ああ、さう、お見せなさい、見せて下さい。」とベネヴォレンスキイ氏は後を引き取つた。アンドリュエシヤは赧くなつて微笑をうかべながら、お客に畫帖を持つて來た。ベネヴォレンスキイ氏はその道の通らしい様子をして、畫帖をめくり始めた。「うまいねえ、坊ちゃん」と彼は遂にいひ出した。「うまい、なかなか上手だ。」それからアンドリュエシヤの頭を撫でた。アンドリュエシヤは素早くその手に接吻した。「どうです、何ていふ腕前でせう！ ——おめでたう、タチャーナ・ポリソヴナ、おめでたう。『ピョートル・ミハイリチ、ここでは先生を捜してやることも出来ません。町から頼めばお金が大變ですし、お隣りのアルタモノフさんのお宅なんかには畫家さんがいらして、大へんお上手な方ださうですけど、奥様がほかの者に教へることを禁じていらつしやいましてね。



手際が落ちるとおつしやいましてね。」「ははあ、」とベネヴォレンスキイ氏はいつて、じつと考へ込み、上眼づかひにアンドリュウシヤを眺めた。「まあ、そのことについては、いづれ御相談いたしませう。」と急に付け加へて、手をこすつた。その日、彼はタチャーナ・ポリソツナに、ちよつと内々で話をさせてくれと頼んだ。二人は一室に閉ぢこもつた。半時間ほどして、二人はアンドリュウシヤを呼んだ。アンドリュウシヤが入つて来た。ベネヴォレンスキイ氏はいささか顔を赧らめて、眼をかがやかしながら窓ぎはに立つてゐた。タチャーナ・ポリソツナは片隅に坐つて、涙を拭いてゐた。「さあ、アンドリュウシヤ！」とやがて彼女は言ひ出した。「ピョートル・ミハイルイチ様にお禮をおつしやい。このお方がお前のお世話をして、ペテルブルグへ連れて行つて下さるんですよ。」アンドリュウシヤは全くその場で気が遠くなつてしまひさうだつた。「さあ、正直にいつて御覽よ、」とベネヴォレンスキイ氏は威厳にみちた、しかも勢はるやうな優しい聲で言つた。「坊ちゃん、あんたは畫家になりたかありませんか、藝術に向いて行くのが聖いあなたの使命だとは思ひませんか?」「ぼくは畫家になりたいんです、ピョートル・ミハイルイチ、」とアンドリュウシヤは聲をふるはして言ひ切つた。「さういふことになれば私も嬉しい。そりや勿論、あんたも、」とベネヴォレンスキイ氏はつづけた、「あんたの大事な叔母さんに別れるのは辛いでせう。あんたは心から叔母さんを有難いと思はなければなりませんからね。」

「ぼくは叔母さんを崇拜してます。」とアンドリュウシヤは遮つて、眼をしぼたいた。「さうだと、さうだと、それはもうよく分かつてる、それはそれは感心なことだ。だがしかし、考へて御覽、これからさき、どんなに嬉しいことか……あんたが成功して……」  
「アンドリュウシヤ、私を抱いて、」と人のよい奥さんは口ごもつた。アンドリュウシヤは叔母さんの頸筋にすがりつた。「さあ、今度はお前の恩人にお禮をおつしやい。」  
「アンドリュウシヤはベネヴォレンスキイ氏の腹に抱きついた、そして爪立ちをして伸びあがり、彼の手をとつて接吻した。恩人は實際になすがままにさせたが、それほど氣乗りをして、おいそれと許した譯でもなかつた……。彼は子供を落ちつかせ、満足させなければならなかつた。だからこそ、我慢も出来たのである。二日の後、ベネヴォレンスキイ氏は新しい弟子をつれてこの家を立ち去つた。  
別れてから最初の三年の間はアンドリュウシヤは實に屢々手紙をよこし、時には手紙に畫を添へて来た。ベネヴォレンスキイ氏も、時にはまた大抵は稱讚の言葉を簡単に添へてよこした。ところがその後、手紙が漸く稀れになつて、遂には全く跡を絶つた。丸一年といふもの、甥から一言の消息もなかつた。タチャーナ・ポリソツナは早くも氣がかりになつて来た。ところへ不意に次のやうな文面のたよりが届いた。  
なつかしい叔母上さま!



一昨々日、私の保護者ビョートル・ミハイリイチさんは亡くなりました。烈しい腦溢血の發作が私の杖とも柱とも頼む人を奪つてしまつたのです。もとより今は私も二十歳となりました。私は七年の間に著しい進歩を致しました。私は充分の技倆に自信をもち、それによつて暮らしても行けるのであります。私は失望は致しません。しかし兎に角、若し御都合がつかましたら早速二百五十ルーブリを手形でお送り下さいまし。あなたのお手に接吻し、いつまでも、いつまでも……匆々

タチャーナ・ボリーソヴナは甥に二百五十ルーブリを送つてやつた。二箇月経つて彼はまた無心をいつてよこした。彼女はあるだけの金をかき集めて、また送つてやつた。ところが二度目の送金をうけて六週間とも経たぬうちに、彼は公爵夫人チエルチェレーシエネワから註文された肖像畫を描くの要る繪具代だといつて、三度目の無心をした。タチャーナ・ボリーソヴナは拒絶つた。『かういふ状態では、』と、彼は叔母に書き送つた、『私は田舎へ歸つて静養したいと存じます。』さうして實際に、その年の五月にアンドリュエ・ブルイキにかへつて來た。

タチャーナ・ボリーソヴナは初めは誰だかわからなかつた。甥の手紙から推して、病弱の瘦せた人を見ることが思つてゐたのに、自分の前にあらはれたのは、血色のよい大きな顔に、油じみ

た捲髪の、肩幅の廣い、肥つた若者であつた。華奢な、蒼白いアンドリュエ・シヤは今はかつりしたアンドレイ・イワーノキッチ・ペロヴゾーロフになつてゐたのだ。變つたのは外觀ばかりではなかつた。昔のこせこせして内氣なところや、細心なところ、潔癖なところは影にも見えず、粗雑な、そそつかしい、見るからに厭ならぬ風が眼につくのであつた。歩くにも右によろよろ左によろよろして、安樂椅子にどつかと身を投げるやら、卓子の上に寝轉んだり、伸々と横になるやら、大きな口を開けて欠伸をするやら叔母さんにも下男どもにも傍若無人の振舞ひをして見せた。『俺は畫家だぞ、全く自由なんだ！ こちとらの方を見ろ！』といふ。時には幾日も筆をとらなかつた。一たびいはゆるインスピレーションなるものが湧きおこつて來ると、まるで酔ばらつてでもゐるかのやうに呂律の廻らぬ舌で、騒がしく勿體ぶつたことを並べ立てる。頬はいやに赤くなり、眼はぼんやりと霞んで、自分の技倆や、自分の成功や、自分が發展し進歩しつつあるといふことなどを得々と話し立てる……。そのくせ實際のところは一寸した肖像畫さへも満足に描くだけの力量のないことは分かり切つてゐたのである。彼は全くの明盲で、何一つ讀んだこともない。尤も畫家が本を讀んで何のためになるのか？ 自然と自由と詩とが、畫家の要素なのだ。捲髪を振り立てて、鷲のやうに囀つて、せいぜいジュエフ煙草を吹かして居ればそれでよいのである！ 露西亞人が剛膽なのは甚だ結構である、但しこれは人によりけりで、天分



のない下等のボレジャーエフに至つては、とても鼻もちがならない。わがアンドレイ・イワーヌイチは叔母さんのところに暮らしてゐた。居候をするのが趣味に合つてゐるのらしかつた。お客たちには蛇蝎のやうに嫌はれた。彼はよくピアノの前に坐りこんで(タチャーナ・ポリソヅナの家にはピアノも据ゑつけられてゐた)、『早き櫓を』といふ曲を一本の指で弾き始める。調子を合はせ鍵盤を叩いて、何時間も立てつづけに、ワルラーモフの『ひとり寂しき松』とか、『いや、いや、醫者、来ちやいやよ、』とかいふ戀歌を苦しうに唸る。さうして、彼の眼もとは脂ぎつて、頬は太鼓のやうに光り出す……。さうかと思ふと、だしぬけに、『しづかなれかし、浪たちさわぐわが愛慾、』を喚き立てる……。タチャーナ・ポリソヅナは全く身ふるひするのである。

「どうも不思議ですねえ、」と彼女はあるとき、私にいつた、「この頃はどうしてあんなに捨鉢な歌をつくるんでせう。私どもの若い時分とは、まるで違ひます。それは悲しい歌もあるにはありませんけれど、聽いてて氣持のいい歌ばかりでした。……まあ、こんな風に、

さあさ、おじやれよ、草場のなかに、

あだにおぬしを待つものを、

さあさ、おじやれよ、草場のなかに、

つきぬ涙は 誰がゆゑに……

ああ、おぬしが草場のなかに

おじやるその時や夜も明ける

タチャーナ・ポリソヅナは人の悪い微笑みを見せた。

『わたしや、くるしい、なやましい、』隣の部屋で甥が唸り出した。

『いい加減におし、アドリューシャ。』

『君にわかれて、わがこころ、なげき悲しむ、』 倦くことを知らぬ歌ひ手はなほもつづけてゐた。

タチャーナ・ポリソヅナは仕方のない子だといふやうに頭を振つた。

「ああ、もうこんな晝家には私も！」

その時から一年は過ぎた。ペロヴゾーロフは依然として叔母さんのところに暮らし、今もなほペテルブルグへ行かうとしてゐる。田舎へ来てから、彼は一そう横肥りになつた。叔母さんは——こんなことは誰が思ひがけたらう、———したい放題に甘やかし、また近所の若い娘たちは彼に想ひを懸けてゐる……。



多くの昔の知合ひはタチャイナ・ボリーソヅナのところへは行かなくなつた。

## 死

私の近所に獵の好きな若い地主がある。よく晴れた七月の或る朝、私は一しよに松マツ 鶏トリを撃ちに行かうとおもつて、彼のところへ乗りつけた。彼は承知をした。「しかし、」と彼はいつた、「うちの柴山しばやまを通つてズーシャの方へ行かうぢやありませんか。さうすると、私はついでにチャプリーギノの方も見て來ますから、御存じでせうか、うちの榎の木山を？」今、あそこを伐らしててゐるんです。「ではお伴をいたませう。」彼は馬に鞍を置かせ、野猪イノシシの頭を淫き出しにした。青銅の釦ボタンのついた緑いろの上衣を着、毛糸で縫ひとりをした獵袋と銀の水筒をぶらさげ、肩には新型の佛蘭西銃ピストルをかついで、いかにも満足さうに鏡に向つてからエスベランスといふ犬を呼んだ。この犬は、まことに氣のいい、しかしながら今は一本の髪の毛もない老オールド 嬢ミスの従姉から贈られたものであつた。私たちは出かける。私の隣人は村の監督をしてゐるアルヒーブといふ四角い顔をして、不釣合ひに頬骨の高い、肥つた背の小さい百姓と、ついこの頃バルチック沿岸の地方から雇はれて來た管理人のゴットリーフ・フォン・デル・コックといふ、瘡かさせて、髪の毛のきれいな、



眼つきの鈍い、撫で肩で頸の長い、年は十九ばかりの若者とを連れて出た。私の隣人は近ごろ初めてその土地を手に入れたのである。五等文官夫人でカルドン・カタージェワといふ叔母さんからの遺産として彼の手に入ったのである。その叔母さんといふのは恐ろしく肥え太つてゐるので、床に横たはつてゐる時でさへも、絶えず悲しさうに唸つてゐた。私たちは『柴山』へやつて来た。「お前たちはこの空地で待つてくれ。」とアルダリオン・ミハイリイチ（私の隣人）は連れの者に向つていつた。獨逸人はお辭儀をして、馬を下り、ポケットから本を取り出して——どうやらヨハンナ・ショーペンハウエルの小説らしい——藪かげに坐り込んだ。サルヒープは日向にじつとしてゐて、一時間のあひだ身じろぎだにもしなかつた。私たちは藪から藪を廻つたが、雛鳥ひとつ見つからなかつた。アルダリオン・ミハイリイチは森の方へ行くつもりだと言ひ出した。私も何だかその日はうまい獲物にありつけさうにも思へなかつたので、彼の後からぶらぶら跟いて行つた。私たちは空地へ引き返した。獨逸人は讀みさしの頁にしるしをつけて、立ちあがつて、本をポケットにしまひ込み、やつとのことで尾の短い、仕様のない牝馬にまたがつた。この馬と來たら一寸さはつただけでも嘶いて、蹴り立てるといふ厄介な代物。ルヒープが身ぶるひして、兩方の手綱を一緒にぐいと引き絞り、足をゆすぶると、驚いて、暫し茫然としてゐた馬も力なく、しやうことなしに、たうとう歩き出した。私たちはそこを發つた。

アルダリオン・ミハイリイチの有つてゐる森は自分も子供の頃からよく知つてゐた。佛蘭西人の家庭教師デジレ・フルーリイ氏（Désiré Fleury）といふ至つて氣だてのよい人（尤も先生は毎晩わたしにレルア水薬を飲ませたので、生涯わたしは身體を悪くした）につれられて私はよくチャプルーイギノへ行つたものだ。森全體が凡そ二三百本の巨きな榎の木と秦皮の木とから成り立つてゐた。形のよい、堂々たる幹は胡桃や清涼茶の金色に透きとほるばかりの緑葉のうへに、うるはしく、一きは黒く、高く聳えて、晴れ渡つた空に整然と美しい線を描き、そこに蔽ひかぶさるやうな、少しく節くれたつた樹枝を天幕のやうに張りひろげてゐた。兀鷹や小鷹、野鷹など、さゆらぎだもしない梢のかげを、啼きながら飛んでゐる。縞啄木鳥は厚い木の皮をこつこつとはげしく叩き、よく徹る黒鶇の聲音は、不意に繁み葉のなかに高麗うぐひすのやうな啼きこゑにつづいて聞こえてくる。下の藪には鶴鴿や鴉や田鼠が歌を歌つたり、囀つたり。小徑に沿つて忙しげに金絲茨鴉が趨つて行く。白兎が用心深く『跛をひきながら』、森の縁を忍び足して通つたり、落葉色の栗鼠が樹から樹へと面白さうに跳びうつり、頭のうへに尾をのせて、不意に足をとめたりする。刻んだやうに美しい蕨の微かな葉かげ、高い蟻塚のほとりの草のなかには董や鈴蘭の花が咲いて、青葙、粟葙、平葙、楯葙、赤い蠅取葙などが生えてゐる。廣い藪の間の芝生には白花蛇莓が赤らんでゐる……。それにしてもあの森の中の、あの樹蔭はどうであつたか！ 晝



の<sup>ひなか</sup>日中の暑いさかりに、まぎれもない夜があつた。あの静寂、あの香り、あの涼しさ……。チャ  
 ブルイギノで私は楽しい時を過ごした、だからこそ今、正直にいへば、こんなにもよく知りぬい  
 てゐる森の中へ入つて何となく物悲しい氣持になるのである。思へば、\*一八四〇年の、あの呪ふ  
 べき、雪のない冬は私の古い友達——榎や秦皮をも容赦はしなかつた。これらの樹々は今は枯れ  
 はてて、裸にされて、ところどころ肺病やみのやうに頼りない病葉<sup>わづな</sup>に包まれながら、哀れにも、  
 『昔の面影を忍ぶよすがはなくとも、そのかはりとなつた』若木<sup>わかぎ</sup>の林のうへに聳えてゐる。  
 中には下の方に葉を繁らせて、天を怨み、絶望に沈むかのやうに、生氣のない折れた枝を高く  
 擧げてゐるのもあれば、豊かな、満ちあふれるやうな昔の面影はないまでも、なほこんもりと繁  
 つた葉の間から、太い乾からびた枯枝を出してゐるものもある。また皮がすつかり落ちてしまつた  
 のや、遂に倒れて、死骸のやうに地べたに腐つてゐるものもある。その昔、かういふことにならう  
 とは誰が夢にも思つたらう。樹蔭はチャブルイギノには今どこを見わたしても見られなくなつ  
 た！ 『ああ、どんなにお前たちは恥かしく、心悲しいことだらう？』と私は枯れかかつてゐる  
 樹を眺めながら考へた……。ゆくりなくも\*コリツォフの詩が思ひ出される。

高き話ごゑ、

誇りかなる力、

王者の剛毅、

今やいづこにかくれたる？

かのみどり葉の

生氣や 今いづこ？

死

「どういふわけでせうね、アルダリオン・ミハイルイチ、」と私は口を切つた、「どうしてこの  
 木を直ぐ翌る年に伐らさなかつたんでせうか？ これぢや、元値の一割にもならんぢやありません  
 んか。」

彼はただ肩をすくめるばかりであつた。

「そんなことは叔母に訊いたらいいでせう、——商人<sup>あきんど</sup>が金を持つて来て、うるさく付き纏つた

んですよ。」

「Mein Gott! Mein Gott! <sup>まあ</sup>」とフォン・デル・コックは一足ことに叫んだ、「悪戯<sup>いたづら</sup>

にも程<sup>ほど</sup>がある！ 程<sup>ほど</sup>がある！」

「何が悪戯<sup>いたづら</sup>だね？」と隣人は微笑みながら言つた。



「つまりその、あんまり傷はしと、言たかつたんです。」

地べたに横たはつてゐる木を見て特に彼は傷はしいと思つたのである。いかにも粉屋でもあつたら臼にするために高い金を拂つて買ったことであらう。しかし監督のアルヒーブは平然と落ちつき拂つて、一向に悲しがりもせず、却つて、さも満足さうに、倒れた木を跳び越えながら、鞭でびしびし叩いたりしてゐた。

私たちが樹を伐つてゐる所へ来たとき、不意に樹の倒れる音がしたかと思ふと、つづいて叫びごとゑと騒ぐこゑが聞こえて来た。と思ふ間もなく、藪かげから蒼ざめて髪をみだした若い百姓がこちらの眼の前へ跳び出して来た。

「何だ？ どこへ行く？」と、アルダリオン・ミハイリイチが聲をかけた。百姓は直ぐに立ち止まつた。

「ああ、アルダリオン・ミハイリイチ様、大變なことで！」

「どうしたんだ？」

「マクシムが、あんた、樹で怪我して。」

「どういふ風に？ ……請負師のマクシムがか？」

「さうですよ、あんた。わし等、秦皮の樹を伐つてて、親方はそれを立つて見てたんです……。」

しばらく、まあ、立つて見てたんですが、水飲みを井戸の方さ少し歩き出すと、きつと水を飲みたくなつたんでせうが、さうすると、いきなり秦皮がみじみしいひ出して、親方の眞上へ倒れてくる。わし等あ、逃げる、逃げる、逃げる！ つて、唝鳴つたんですけれど、……傍へ避けりやよかつたのに、前の方へ眞直ぐに駆け出しつちやつたんで、……全く怖ぢ氣ついたのでせう。たうとう秦皮の梢つべの枝がおつ覆さつちやつて。どうしてこんなに早く倒れたんだか、——さつぱり譯がわかんねえ……、きつと心が腐つてたんでせう。」

「それで、マクシムは殺られたんだね？」

「へえ、さうで。」

「死んぢやつたか？」

「いんえ、あんた、まだ息はあります、けんど仕様がありません、手も足ももぎれちやつて。わしは醫者どんのセリヴェーストイチさん呼びに行くところで。」

アルダリオン・ミハイリイチは監督にも一走り、村へセリヴェールストイチを迎へに行くやうにとひつけて、自分は大急ぎで開墾地の方へ馬を走らせた……。私は後につづいて行つた。

行つて見ると、哀れにもマクシムは地べたに横たはつてゐた。十人ばかりの百姓が彼を取巻いて立つてゐる。私たちは馬を下りた。彼は蟲の息で唸つてゐた。時をり眼を大きく見開いて、び



つくりしたやうに、あたりを見まはし、蒼ざめた唇を噛んで……。額はがたがたふるへ、髪の毛は額にひつつき、胸は不規則な動悸を打つてゐる、彼は死にかかつてゐるのだ。若い菩提樹の淡い影が静かに彼の顔を滑つてゐた。

私たちは屈んで覗きこんだ。すると彼はアルダリオン・ミハイリイチの顔を見つけた。

「どうか、旦那」と聞きとれないやうな聲で彼は言ひ出した、「お坊さんを……むかへに……やつて下さい……、神様の……罰で……足も、手も、みんな粉微塵こなみじんにされちやつて……今日は……日曜なのに……、それに……ああ、わしは……若え衆わかしらに、暇をやらなかつたんで。」

彼は黙つてしまつた。息がつかまつたのである。

「それから、わしの金は……嬢に……嬢にやつておくんなせえ……、誰に……いくら借りがあるか……、ここにゐるオニシムが知つてますから……、それを差引さひきいて……」

「マクシム、醫者をいま迎へにやつたからね、きつとまだ死にやしないよ。」

彼は眼を開けようとして、無理に眉と瞼を上げた。

「いんえ、助かりません。それ、もう死神しにがみが寄つてくる……、あれ、あれ……、若え衆わかしたち、悪い事あつたら、許してくれよ……」

「神様は許して下さいよ、マクシム・アンドレーキッチ、」と百姓たちは、ぼんやりと聲を揃へて言つた、そして帽子をとつて、「わしらを許しておくんなせえ。」

彼は忽ち絶望したやうに頭を振り、痛々しげに胸につき出したが、又もや、ぐつたりしてしまつた。

「けれど、ここへかうして置いて、死なしちゃならん、」とアルダリオン・ミハイリイチが叫んだ、「おい、若い衆、あそこの馬車から錠をもつて来てくれ、そして病院へ連れてつて。」

死

男が二人、馬車の方へまつしぐらに駆けて行つた。

「わたしは、スイチョーフカのエイムから……、」と死にかかつてゐる男が呟き出した、「……昨日、馬を買ひました、……手付けは遣つてある……、だからあの馬は私のだ……、あれ……嬢に……」

百姓たちは錠の上に移しはじめた……。彼は傷手いたでを負つた鳥のやうに全身をふるはせて、身體をまつすぐに伸ばした。

「死んぢやつた、」と百姓たちは口ごもつた。

私たちは、言葉もなく馬に乗つて、そこを發つた。

哀れなマクシムの死は深く私を物思ひに沈ませた。露西亞の百姓は實に驚くべき死方しにがたをする！

臨終の心境は、決して無頓著だの魯鈍だのと言ひ得ない。彼らはあたかも儀式を行ふかのやう



に死んでゆく、冷然と、又あつさり。

數年前のこと、村のもう一人の隣人のところにゐた百姓が乾場で酷い火傷をした。(若しあの時、通りがかりの町の者が半死半生の彼を引き出してやらなかつたら、乾場でそのまま黒焦げになつてゐたかも知れぬ。町の人は水の入つてゐる桶に浸つて、まつしぐらに突き進み、燃えてゐる檐の下の戸を打ち破つたのである。) 私は彼を見舞ひにその小舎を訪れた。小舎のなかは暗く、燻つて、むせかへるやうであつた。「病人はどこにゐるかね?」と私は訊いた。すると「あそこ、はい、臥煖爐のうへに。」と顔を手に埋めてゐた女房が、長く引つばつて答へた。近づいて見ると、毛外套をかぶつて、百姓は苦しさに息をしながら寝てゐる。「どうだね、鹽梅は?」病人は爐に倚つて、起き上らうとする。けれど體おゆうに火傷を負つて、死に瀕してゐるのである。「まあ、まあ、そのまま、寝てゐなさい。……さあ、どうだね……鹽梅は?」「どうも、悪くて。」と彼はいふ。「痛むかえ?」黙つてゐる。「何か欲しいものはないかえ?」それでも黙つてゐる。「茶でも届けようか、え?」「結構です。」私は側を離れて、腰掛に腰をおろした。十五分、三十分と坐つてゐる。小舎のなかは墓場のやうに闇としてゐる。隅の聖像の下の卓子のかげに五つばかりの女の子がかくれて麵麩をたべてゐる。母親が時をり感しつける。表の部屋には人が出たり入つたり、扉をたたいたり、言葉を交はしたりしてゐる。兄嫁は甘藍を切つてゐる。

「これ、アクシーニャ!」と遂に病人が言ひ出した。「なあに?」「クワスをくれ。」アクシーニャは病人にクワスをやつた。またもや、しんと靜まりかへる。私は低い聲で訊いてみる。「聖餐はいただいたのかい?」「はい。」先づ、そんなら何もかもが滞りなく済んだのだ。今はただ死を待つばかりである。私はたまらなくなつて、彼の許を辭した……。

また思ひ出すが、或るときのこと、私はクラスノゴリエ村の病院に、かねて知合ひの熱心な遊獵家で、代診をやつてゐるカピトンを訪れたことがあつた。

この病院は、元はお邸の傍屋であつた。それを地主の奥方が病院にしたので、いひかへると、入口の扉の上に白い文字で『クラスノゴリエ病院』と書いた青い板を打ちつけさせ、患者の名前を記入する赤いアルバムを、カピトンに親から手渡ししただけのことである。このアルバムの一枚目には情深い奥方の食客で、お世辭のうまい或る男が次のやうな句を書きつけてゐた。

« Dans ces beaux lieux, où règne l'allégresse,

« Ce temple fut ouvert par la Beauté;

« De vos seigneurs admirez la tendresse,

« Bons habitans de Krasnogorié ! »



うるはしき快樂の園に  
 美きひとぞ、この殿堂を建てたまふ、  
 汝が主のやさしき心たたへよ、  
 クラスノゴリエの善き人たち！

そして、も一人の紳士はその下の方へかう書いた、

《Et moi aussi j'aime la nature !》

《Jean Kobiliatnikoff》

われもまたこの自然を愛す！

ジャン・コビリヤトニコフ

代診は自分から金を出して、寢臺を六つも買ひ、神の子なる人々を癒しやうといふ殊勝な心がけを以て仕事にとりかかった。彼のほかに病院には更に二人の役員がゐた、氣違ひじみた彫

刻師のパーウエルと、料理番の役を勤めるメリキトリサといふ、手の自由の利かない百姓女と。この二人は藥を調合したり藥草を乾かしたり、水に浸したりもすれば、また癩癩を起す病人を鎮めもした。氣違ひの彫刻師は澁い顔をして、めつたに物をいはない。毎晩のやうに、『うるはしきヴェネレの歌』を歌つて、道ゆく人さへ見れば近づいて行つて、疾うの昔に死んでゐるマラーニヤとかいふ娘と夫婦にしてくれとせがむのである。手の不自由な百姓女は彼をやりこめて、七面鳥の番をさせる。さて、或る日、私は代診のカピトンのところにゐた。私たちは、この間の獵の話を作り出してゐた。すると突然、粉屋でもなければもつてゐないやうな、非常に肥つた葦毛の馬に曳かせた小馬車が中庭へ乗り込んで來た。小馬車の中には新しい上衣を身につけた、ごま鹽髯の、がつしりした百姓が坐つてゐた。「やあ、ワシーリイ・ドミトリッチ、さあ、どうぞ……」と、窓からカピトンが叫んで、「リュボフシノの粉屋です、」と私にささやいた。百姓は唸りながら馬車を出て代診の部屋へ入つて來たが、眼を見はつて聖像をさがすと、十字を切つた。「さあ、どうです、ワシーリイ・ドミトリッチ、何か變つたことでもありますか？……おや、工合が悪いんでせう、きつと。お顔の色がよくありませんね。」「ええ、カピトン・チモフェーキッチ、何だか調子が悪くて。」「どうなすつたんです？」「なあに、まあ、かういふ譯でして、カピトン・チモフェーキッチ。つい先だつて、町で挽臼を買ひましてね、家へ持つて來まして、馬車



から下ろしかかつたんです。そのとき、無理に力を出したせゐるか、腹ん中が何だか、ちぎれるやうに、ぐらついて……それからといふもの、どうも本當ぢやないんですよ。今日はまた痛みがひどいもんで……」。「ふむ」とカピトンはいつて、喫煙草を喫いだ、「それあ、ヘルニヤ病ですよ、きつと。だが、そんなになつたのは大分前のことですか?」「ええ、もう今日で十日目になるんで……」。「十日?」(代診は齒の間から息を吸ひこんで、頭を振つた。)「まあ、診てあげませう。」やがて遂に、「さあ、ワシーリイ・ドミトリッチ」と口を切つた、「大へんお氣の毒なことですが、好くありませんな。あなたの病氣は丈々むづかしい。まあ、私んところへ滞まるんのですね。私としては出来るだけのことをして見ませう、——尤もお請け合ひは出来ませんけど。」「そんなに悪いんですか?」と粉屋は驚いて、謔言のやうにいふ。「ええ、悪いですね、ワシーリイ・ドミトリッチ、二日も早くおいでになつたら良かつたのに、さうすりや文句はない、直ぐに癒せたんですがね。今は炎症をおこしてゐる。だから何です、丹毒にならなけりやいいが。」「だつて、そんな筈ありませんよ、カピトン・チモフェーキッチ。」「いや、今申した通りで。」「だつて、どうしてそんなことが?」(代診は肩をすくめた。)「これ式のつまらんことで死なにやならんでせうか?」「そんなことは言へませんが……、ここへ滞まることですね。」百姓は深く深く考へこんで、床を見つめてゐたが、やがて私たちの方をちらりと見て、頭を掻いて帽子をつか

んだ。「どこへいらつしやる、ワシーリイ・ドミトリッチ?」「どこへつて?」そりや、決まつてまさね、そんなに悪いんなら、家へ歸らにやなりません。若しさうだと、後の始末もして置かなきゃ。」「しかし、そりやあ、自分で悪くするやうなもんですよ、ワシーリイ・ドミトリッチ、とんでもない。私はどうしてここまで貴方が來られたのか不思議に思つてゐるからなんです。是非お滞まんさい。」「いや、あんた、カピトン・チモフェーキッチ、どうせ死ぬんなら、家で死にたい。何でここで死ぬことがあるもんですか、——家があるのに。それで死んぢまつたら、そりやもう天命ですよ。」「まだ死ぬと極まつた譯でもないし、ね、ワシーリイ・ドミトリッチ……むろん、危いことは實に危い、ほんとに……。しかし、だからこそ、ここにゐなくちやいけなんです。」(百姓は頭を振つた。)「いや、カピトン・チモフェーキッチ、私は歸ります、……が、處方は書いて下さるでせうね。」「薬だけぢや駄目ですよ。」「いや、もう歸るといふのに。」「そんなら、まあ好きなやうに……後で咎めるんぢやありませんよ!」

代診は帳簿から一枚の紙を切りとつて、處方を書いて、それ以上なすべきことをよく注意してやつた。百姓は處方箋を受け取り、カピトンに五十哥の銀貨を渡し、部屋を出て、馬車に乗り込んだ。「ぢや、さやうなら、カピトン・チモフェーキッチ、どうか悪く思はねえで下せえ、萬一のことがあつたら、後の子供らのことは頼みますよ……。」「おうい、ワシーリイ、滞まんさい



「よー」百姓はただ頭を振つて、手綱で馬をたたいて、庭を出て行つた。私は通りに出て、後を見送つた。道はぬかづて、でこぼこしてゐた。粉屋は氣を配つて、ゆつくりと巧みに馬を御して、會ふ人ごとに挨拶しながら乗つて行つた……。四日目に彼はこの世を去つたのである。

大體、露西亞人は驚くべき死方をする。今は亡き多くの人々が、私の胸にうかんで来る。私は君を思ひ出す、むかしの友達、大學の業なかばにして退いたアヴェニール・ソロコウモフ君、あのきれいな、實に氣高い人！ 今も見る、肺を病む縁がかつた顔、あの淡い亞麻色の髪、あのやさしい微笑み、あの夢見るやうな眸、あの長い手足、今も聴く、あの弱々しいやさしい聲。君は露西亞の地主グール・クルピャニコフの邸に住んで、その子供のフォーファとジョージヤに露西亞語の読み書きや地理や歴史を教へ、主人グールのわけのわからぬ駄洒落にも、家令の有難迷惑な親切にも、意地のわるい腕白どもの俗悪な悪戯にもよく耐へ忍んで、微苦笑を浮かべながら、日も暮れて、夕餐のすんだ後、どんなに君はほつとしたことであらう。幸福に浸つたことであらう。そのときは、あらゆる務めや仕事から解き放されて、窓ぎはに坐る。物思はしげに煙草をくゆらす。或ひはまた貪るやうに、手擦れのした脂じみた厚い雑誌の頁をめくる。それは君と同じやうに哀れな宿なしの測量師が町から持つて来てくれたものだ。そのとき、詩といふ詩、小説と

いふ小説が、どんなに君を悦ばしたとか、どんなにたやすく涙が君の眼に浮かんだとか、どんなに満足さうに笑つたことか！ 人に對する如何ばかりの純情、あらゆる善なるものに對する如何ばかり氣高い同情の念が、若々しい、けがれなき魂に滲み渡つてゐたことか！ 正直にいへば、君は決して人並すぐれて才氣の鋭い人ではなかつた。生まれつき人にすぐれた記憶力もなく、勤勉といふのでもなかつた。大學にゐた頃はかなりの劣等生と見做されてゐた。講義の時には眠つてゐた、試験の時には尤もらしく黙つてゐた。しかも友達の進歩や成功に對して、喜びの眼を「かしたのは、息をはずませたのは誰であつたか？ 他ならぬアヴェニールであつたのだ……」また自分の友達の榮達を盲目的に信じてゐたのは、誇りに友を讃へ、奮然として友を擁護したのは誰であつたか？ 羨むことを、己れをよしとすることを知らず、一身を顧みず己れを犠牲にし、何の役にもたぬ者にまで、いさぎよく従つてゐたのは誰であつたか？ それはみな、それはみな君だつたのだ、わがよき友よ、アヴェニール！ 忘れもしない、君が家庭教師として、田舎へ行くとき、斷ちきられるやうな思ひをして、私たちと別れたことを。悪い豫感が君を苦しめてゐたのであらう……。さうして實際に田舎へ行くと、いけないことになつたのだ。村には恭しく耳を傾けるほどの人もなく、驚くべき人も、愛すべき人もなかつた……。村びとも教養のある地主たちも、ひとしく君をありふれた教師として、或る者は無躰に、或る者は粗略に遇してゐる



た。おまけに君は風采で人を引きつけるといふやうな人でもなかつた。怖ぢ氣づいて、顔を赧らめたり、汗をかいたり、吃つたり……。そのうへに、田舎の空氣は身體のためにはならなかつた。君は蠟燭のやうに瘠せ衰へた、ああ、可哀さうに！なるほど、君の部屋は庭に面してゐた。花は蝦夷櫻、林檎、菩提樹など、心の卓子や、インク壺や本の上に、かろい花びらを撒き散らして。壁には別れる時に、美しい捲毛の碧い眼の家庭教師、あの人のよい、情に脆い獨逸人の女の人から贈られた青絹の時計入れがかかつてゐた。時には昔の友達がモスクワから訪ねて来て、他人の詩や、或ひは自作の詩まで持ち出して、いたく君を歡ばした。けれど、孤獨は、教師の身の堪へがたい奴隷のやうな境涯は、自由になるあてもない果敢なさは、かぎりも知れぬ秋また冬、あの執拗な永わづらひは！……ああ、哀れなるアヴェニール！

私はソロコウモフが死ぬ少し前に訪ねて行つた。彼はもう殆んど歩けなかつた。地主のグール・クルビヤニコフは強ひて追ひ出してもしなかつたが、給料は呉れなくなつてゐた、ジョージヤには別の教師が雇はれた。……フォーフアは陸軍幼年學校に入れられた。アヴェニールは窓際の古いヴォルテール型の安樂椅子に腰をおろしてゐた。天氣の珍しく好い日であつた。葉の落ちた菩提樹が濃い蔭色の列をなしてゐるうへに、明るい秋の空はかがやかしい青みをたたへ、そこここに取り残された黄金いろにかがやく葉が揺れたり、囁いたりしてゐた。霜に蔽はれた大地は陽

ざしをうけて、濕りもち、ゆるんで来る。斜めにさしてくる太陽の紅の光線は蒼白い草に微かにあたる。空には軽く、物の爆ぜるやうなひびきがただよひ、庭の中には仕事をしてゐる人たちの聲が、はつきりと澄んで聞こえる。アヴェニールはすり切れた麻屑織の寬服を着てゐた。緑いの頸巻は、ひどく瘠せ衰へた顔に死人のやうな感じをあたへてゐた。彼は私に會つたことをひどく喜んで、手をさしのべて話し出したが、また咳きこむのであつた。私は彼を落ちつかせ、その側に坐つた……。アヴェニールの膝の上には、念入りに寫したコリツォフの詩のノートがあつた。彼は微笑みながら、軽くそれを叩いた。「これは、たしかに詩人だ。」と、むせび出る咳をやうやく抑へて、ぼんやりいつた。そしてやうやく聴きとれるくらゐの聲で朗讀しはじめた。

鷹は翼を

縛められしか？

鷹は行く手を悉く

さへぎられしか？

私は彼を押しとめた。醫者は人と話することを禁じてゐたのである。私はどうしたら彼を喜



ばすことが出来るか、よく識つてゐた。ソロエウーモフは、學術といふものに所謂『道従』<sup>つみじよう</sup>は一度たりともして行かなかつた。しかし世の偉大なる學者たちが、どういふところまで到り着いたかを知りたがつてゐた。どこかの隅で友達をつかまへると、質問をはじめ。耳を傾け、驚歎し、相手の言葉を信じ、後で鸚鵡がへしにそれを繰り返したりした。彼は獨逸の哲學には非常な興味をもつてゐた。私がヘーゲルの語をすればじめると(勿論、これは遠い昔のことである)、アヴェニールは頭を縦に振つて、眉を上げて、微笑み、「なるほど、なるほど! ……ああ! すてきだ、てきただ! ……」とささやくのであつた。死にかかつてゐて、宿るべき家もなく、孤りぼつちの哀れな男のいぢらしい好奇心に、私は涙を忍びえぬほど動かされた。言ひ添へて置かなければならないが、アヴェニールは世の肺を病む人々とちがつて、自分の病氣に迷ひはしなかつた。しかし、それが何であらう? 彼は歎息も洩らさず、歎きもせず、ただの一度たりとも自分の境涯について、愚痴がましいことはおくびにも出さなかつた……。

だんだん元氣を恢復して来るにつれて、彼はモスクワのこと、友達のこと、ブーシキンのことや劇場のこと、露西亞文學のことを話した。彼は昔のささやかな宴會のこと、私たちの仲間の熱烈な論争のことを思ひ出して、痛惜の色をうかべて、二三の今は亡き友の名を口にした……。「ダーシャを覚えてるかね?」と遂には附け足した、「あの、可愛い、可愛いひと! あの清

らかな心! どんなにあの女は僕を愛してくれたらう! 今はどうしてゐるかしら? きつと、瘠せただらう、やつれただらう、可哀さうにね?」

病人に私は幻滅を感じさせるに忍びなかつた。實際のところ、當のダーシャが横肥りに肥つて、商人のコンダチコフ兄弟と交はり、白粉をつけ、臙脂をつけて、金切り聲を出したり悪態をついたりしてゐると、どうして知らせる必要があつたらうか。

『それにしても、』と私は疲憊した彼の顔を見ながら考へた、『ここから彼を連れ出すことは出来ぬものかしら? おそらく、彼を癒してやる可能性はまだまだある筈だ……』けれどアヴェニールは私の申し出をいひ終らせはしなかつた。

「いや、君ありがたう、」と彼はいつた、「どこで死ぬのも同じことさ。僕は冬までは生きないんぢやないか……、それなのに、人にわざわざ無駄な心配をかけてどうするのさ? 僕はこの家に住み馴れたんだ。なるほど、ここのお方は……」

「意地悪なのかい、え?」と私は口を挟んだ。

「いや、意地悪ぢやないよ、まあ、木偶の坊さ。けど、まあ、あの人たちの苦情はいへないよ。けど、近所にもいろんな人がゐて、カサトキンといふ地主には娘があつて、それがなかなか教養もあるし、親切で、氣立てのいい娘で……、高ぶつてもゐないし……」



ソロコウーモフはまた咳をした。

「僕はもう何も願ふことはない。」と彼は一息ついてから言葉を繼いだ、「煙草さへ一服喫まして貰つたら……、なあに、死にはしないよ、僕は一服やる！」と彼は悪鬼に憑かれたかのやうに眼くばせして、付け足した、「やれやれ！　もう僕は散々いい目をしたんだ、立派な人とも附合つたし……」

「ところで、親身の者にくらゐは手紙を出しといたら。」と私は口を挿んだ。

「何だつて親類なんぞへ？　何のたよりに——何のたよりになるぢやなし。死んだら、死んだら、死んだら分かるだらうよ。けど、そんなこといつたつて始まらない、……まあ、それより外國で見て来たことでも話してくれないかな？」

私は話し出した。彼はひどく乗り氣になつた。日の暮れぎはに私はそこを立つた。それから十日ほどして、クルピヤニコフ氏から私は次のやうな手紙を受け取つた。

「謹啓、陳者、兼ねて拙者宅に罷り在り候貴殿の御親友たる大學生アヴェニール・ソロコウーモフ氏は、一昨々日午後二時逝去仕り候。埋葬の儀は本日、小生の出費にて當教區内の教會に於て相営み申し候。別封の書物及び手帖は故人より送附依頼ありたるものに御座候。故人の所持金は二十五留五十哥有之候へ共、他の遺品と共に當然親類の方に御届け申すべく候。御友人

は臨終の際まで全く意識明瞭にて、敢へて申せば殆んど平然として、拙者共家族一同にて最後のお別れを申せし時にすら、何等心残りの氣色もなく御逝去なされしに御座候。猶ほ愚妻クレオパトラ・アレクサンドロヅナよりも貴下へ宜敷と申し候。御友人の御逝去には、勿論、愚妻も痛惜いたし居り候。末筆乍ら、拙者は御蔭様にて恙なく罷り在り候間憚りながら御休神なし下され度候。敬具

辱知 G・クルピヤニコフ

死

かういふ例はまだまだたくさん私の腦裡に浮かんで来るが、全部が全部、いひ盡せるものではない。ただもう一つだけ話すことにしよう。

私の居合はせたとところで或る年老いた女地主が息を引き取らうとしてゐた。僧侶はこの婦人に最後の祈禱を讀み始めた。すると急に余く息絶えさうに見えたので、彼女に大急ぎで十字架を渡した。女地主は不興げに傍を向いてしまつた。「何をそんなにお急ぎなさる、あなた、」と彼女は舌もつれしながら言ひ出した、「間に合ひますよ。」……彼女は十字架に接吻して、枕の下に手をやつて、最後の息を引きとつた。枕の下には一留の銀貨があつた。彼女は自分の臨終の祈禱をしてくれたお坊さんにお布施を上げようとしたのである……。

いや實に、露西亞人は驚くべき死方をする！



## 歌うたひ

コロトフカの小さい村は、嘗ては性質が果敢で抜け目がなかつたところから、近所近邊の人たちに『切れ者』（本名は全く忘れられてゐた）と綽名されてゐた女地主のものであつたが、今ではペテルブルグの或る獨逸人のものになつてゐる。村は草も木もない丘陵の斜面にあるが、その眞ん中を頂から麓まで斷ち割つたやうに、怖ろしい谿が走つて、その谿といふのは雪崩れに掘り上げられ雨に洗はれて深淵のやうに口をひろげ、村の通りの眞ん中をうねり、川ならば少くとも橋をかけることも出来るが、川よりもひどく、哀れな村の兩側を隔ててしまつてゐる。五六本のひよろひよろの柳が砂目の崖におおづとおおづと這ひさがつて、乾き切つて銅のやうに黄色い谷の底には粘土質の平たい大岩が横たはつてゐる。いふまでもなく、こんな面白くもない眺めではあるが、この界限の人は誰でもコロトフカへ行く道を實によく知つてゐる。彼等はよく、楽しみにしてこの村へ出かける。

谿間が狭い裂け目からだんだんに擴がりさがる數歩手前の、その頂のあたりに、小さな四角い

小舎が立つてゐる。他の家と、まるきり立ち離れて、ぼつたり立つてゐる。屋根は藁葺で、煙突が一つ附いてゐて、鋭い眼のやうに、たつた一つの窓が谿の方に向いてゐる。それが冬の夜などは、内に灯が點つて、ぼんやりした冷たい霧のなかに遠くから望まれ、通りすがりの多くの百姓の眼に星のやうに明滅するのである。小舎の戸口には青い板が打ちつけられてゐる。この小舎は『安樂亭』といふ居酒屋である。この居酒屋では、酒をおそらく定價より安く賣つてゐるわけでもあるまいが、そこらあたりのこれと同じ類ひの店よりは、ずつと繁昌してゐる。それといふのも亭主のニコライ・イワーヌイチの手柄によるのである。

ニコライ・イワーヌイチは嘗ては、すらりとして、髪の毛を縮らせた紅顔の美少年であつたが、今では人一倍に肥つて、圓々した顔に、相當に達者らしく、人のよささうな小さい眼をして、脂ぎつた額に、細い糸のやうな皺を漂はせてゐる白髪の老爺になつて、すでにコロトフカにはもう二十年以上も暮らしてゐる。ニコライ・イワーヌイチは居酒屋の亭主といふものの大部分がさうであるやうに、手早い、利口な男である。別に愛嬌があるわけでもなく、口數が多いわけでもないが、お客を煮きつけて逃がさないだけの腕前をもつてゐる。お客にとつては、冷淡な亭主が鋭い眼を配つて見てゐるとはいふものの、その中にいかにも落ち着きがあつて、温か味がこもつてゐるので、この人の賣臺の前に坐るのが、かなりいい氣持らしいのである。彼は常識に富んで



ゐて、地主の生活も百姓や町人の生活も實によく呑み込んでゐる。むづかしい事件などが起きた場合には、相當に筋の通つた口添へも出来る筈であるが、いかにも用心深いエゴイストらしく、なるべく局外に立つてゐようとする。せいぜいお客に、——それも上得意のお客に限つて、何の氣なしに口から出たといふやうに、遠まはしにほめかして、探るべき道を教へてやるくらゐなものである。彼はまた露西亞人にとつて重要なこと、興味のあることは何でも知りぬいてゐる。馬のことやその他の家畜のこと、森林のこと、煉瓦、陶磁器、織物、革製品のことから歌のこと、踊りのことなど、何事にも通じてゐる。客のない時には、いつも小舎の入口の前の土間に細い脚を組んで、だらしなく坐り、通りがかりの誰彼と馴れ馴れしい言葉を投げ交はしてゐる。彼はこれまで生涯にいろんなことを見て来た。彼のところへ『清酒』を買ひに来た小貴族には何十人となく先立たれてゐる。今では百露里四方がうちに起こることならば何でも知つてゐるが、決してそれを喋りもしないし、慧眼な郡警察分署長でさへもうつかり見逃してゐるやうなことも多々知つてはゐるが、そんなことはおくびにも出さない。他人のことなど、おかまひなしに、黙りこくつて、笑つて、コップを動かしてゐる。近所の人たちは尊敬してゐる。この郡で身分の一番高い地主で、今は文官ながら閣下といはれてゐるシチュレスベチェンコも、彼の家の前を乗り過ぎるときには、いつも丁寧<sup>ていねい</sup>にこちらから挨拶をして行く。ニコライ・イワーヌイチは人を感化する

力を有つてゐる。昔に聞こえた馬泥棒に、其奴が或る知合ひの厩から盗み出した馬を返させたり、新しい管理人に應待することを厭がつた隣り村の百姓たちを説き伏せたり、等々、いろんなことをして来た。それにしても、彼がかういふことをするのを、正義を愛する心や、隣人のためにつくさうとする熱意によるものだと考へてはならない。とんでもないことだ！、彼はただ單に自己の安逸を妨げるやうなものは、何ごとによらず出来るだけ豫防しようとするに過ぎない。ニコライ・イワーヌイチには女房もあり子供もある。妻といふのは抜け目のない、鼻の尖つた、眼の鋭い町の女であるが、やはり最近は夫と同様にいくらか身體<sup>からだ</sup>が重くなつて来た。夫は女房を信頼し切つてゐて、弗箱<sup>ぶさば</sup>の鍵まで預けてある。この女は酔つ拂つて管を巻く手合を怖れてゐる。蟲が好かないのである。一體、あの連中から得る儲けは知れたものだ、騒ぎばかり大きくて。それよりか黙つてゐて無愛想な連中の方が、寧ろこの女の意に適つてゐる。ニコライ・イワーヌイチの子供等はまだ小さい。初めに生まれた子供たちは次から次へとみんな亡くなつたが、残つてゐる者は両親によく似てゐる。身體の丈夫なこの子供等の賢さうな顔は見ても楽しい。

七月の堪へられぬほど暑い日のことであつた。私はのろのろと足を運びながら、犬をつれてコロトフカの隘添<sup>あいに</sup>ひに『安樂亭』の方へと登つて行つた。太陽はいよいよ猛威を振ふかのやうに空に燃えあがり、執拗<sup>しやくあつ</sup>に燬<sup>や</sup>きつけるばかりであつた。空氣は息づまるやうな埃の雲にみちてゐる。



光をうけて艶々しい羽を輝やかせながら白嘴鴉や大鴉は嘴をあけて、憐れみを乞ふかのやうに通りがかりの人々を眺めてゐる。ただ雀だけは情れもせず、羽をひろげて、前よりも一そう勢ひよく囀り、生垣を抜けたり、埃の道から一せいに飛び立つて、緑の大麻の畑に灰色の雲を撒き散らしたやうに舞ひあがる。私は咽喉が渴いて苦しかつた。あたりに水はなかつたのである。コロトフカには、曠野の村の御多分に洩れず、泉一つ、井戸一つもないので、百姓たちは池から汲んで来た濁り水を飲む……。しかし、こんな見るのも厭な家畜の飲み物のやうなものを一體だれが水でございますなどといふものか？ 私はニコライ・イワーヌイチのところへ行つて、麥酒かクワスを一杯もらはうと考へてゐた。

正直のところ、コロトフカの村は年が年中、どんな季節がめぐつて来ようと、人の眼を愉しませるやうな景色は見せてくれないのである。わけても鳶色の半ばむくれ返つた屋並やこの深い谿や、瘦せきつた脚の長い鶏がやるせなげにうろろしてゐる乾からびた埃だらけの牧場や、地主の邸の跡とはいへ、今はあたり一面に蕁麻、荒草、苦蓬などが生ひ茂つて、窓のかはりに穴がいくつもあいてゐる灰いろの白楊の骨組や、さては半ば乾いた泥土と片方が崩れてゐる堤（そのほとりの、こまかく踏み馴らされた灰のやうな土のうへには、牝羊たちが、息苦しさうに喘いで、暑さに噓をしながら、悲しさうに互ひに身をすり寄せて、遂にいつかはこの堪へがたい暑さの去

つて行くのを待ちうけてゐるかのやうに、心もとない我慢をしながら、頭を出来るだけ低く垂れてゐるが）とに縁どられ、家鴨の羽に覆はれて、眞黒い、沸き立つてもゐるかのやうな池を七月の赫々たる太陽が容赦ない光線を浴びせかけて燦きつけるとき、この村へ来ると、すっかり憂鬱になつてしまふ。疲れはてた足を引きずつて、私はニコライ・イワーヌイチの家に近づいたが、例によつて村の子供等を驚かし、じつと何のわけもなしにこちらを見させたり、犬を驚かしたりした。犬は怒つて内臓が破れたかと思はれるばかりに吠れた兇猛な聲で吠えついたが、やがてせかせかと息を切らしてゐた。丁度、このとき、居酒屋の敷居のところへ、ひよつくり背の高い百姓があらはれた。帽子もかぶらず、毛織の外套を着て、青い帯を低く締めてゐる。見たところはお郎づとめの男らしく、濃い胡麻鹽の髪の毛が、やつれた皺だらけの顔のうへに蓬々と生えてゐる。彼はせはしげに手を振りながら誰かを呼んでゐたが、たしかにその手は彼が自分の思つてゐたよりもずつと大きく振り廻されてゐた。もう大分きこし召した風が、ありありと見える。

「おい、来いよ！」濃い眉毛を無理につりあげて口重くいひ出した、「おい、バチクリ、来いよ！　なんて、おめえ、ぐづぐづしてゐるんだえ、ほんとに。おうい、しつかりしろよ。みんなここで待つてんだぞ。それなのに、おめえ、そんなにぐづぐづしてて、……来いよ。」

「よし、行くよ、行くよ、」といふ震へ聲が聞こえて、小舎の右手の蔭から、背の低い、肥つ



た跛ちんぱの男があらはれて来た。彼はかなりさつぱりした羅紗ラクシャの上衣をひつかけて、片袖だけを通してゐる。目深にかぶつた高い先の尖つた鍔なし帽子が、圓くふくれた顔を悪賢アクケンこく、おどけた風に見せてゐる。小さな黄いろい眼は絶えず動いて、薄い唇にはいつも無理な作り笑ひをうかべ、尖つた長い鼻は舵機カウチのやうに、お行儀わるく前へ突き出てゐる。「今いくよ、な」と彼は酒屋の方へ跛をひきひき歩きながら、つづける。「何でおれを呼ぶんだ？……誰がおれを待つてる？」

「何で呼ぶんだつて？」と毛織モウシの外套を着た男が咎め立てるやうにいふ。「何てまあ、おめえは奇態な奴だろ、えい、おい、パチクリ、酒屋へ来いつて呼んでるのに、『何で呼ぶんだ？』なんて訊いてる。みんな善いお方が待つてるんだぞ、土耳古人・ヤーシカ、それに蠻マンカラ大將ダイシャウとジーズドラの請負師と。ヤーシカは請負師と賭をしたんだ、麥酒一杯と決めてな。どつちが勝つか、どつちが上手に歌ふかつていふんだ、それ……いいか？」

「ヤーシカが歌ふのか？」パチクリと綽名チャクナされてゐる男が乗り出していふ、「けんど、おめえ、かつぐんぢやあんめえな。拔作？」

「かつがねえよ。」と拔作は威丈高になつて答へる、「てめえ、勝手なことを吐かしやがる。賭をしたら歌ふのは當り前だよ。何て手前、天邪鬼アマノヤクなんだ、このべてん師のパチクリ！」

「さあ、行こ、馬鹿野郎！」とパチクリがやり返す。

「さあ、口をつけてよ、まあ一つ、ねえ、こちの人」と拔作は大手をひろげて、口ごもる。

「何だい、この甘つたれのイソップ。」とパチクリが脇鐵ワキテをくらはせながら蔑むやうに答へる。

さうして、二人は身を屈めながら、低い入口をくぐつた。

私は二人の話を聞いてゐて、ひどく好奇心をそそられた。すでに一度ならず、土耳古人のヤーシカが、この界限切つての歌ひ手であるといふことは私の耳にも入つてゐた。それが今日、計らずも、よその名人と競争して歌ふのを聞く好い機會がめぐつて來たのだ。私は足を早めて、居酒屋の店へ入つた。

讀者諸君のうち、田舎の居酒屋をよく見る機會を得られたお方は、恐らく少いことと思ふ。しかし、私たち、鐵砲テッポウうちの仲間、寄らないところはない！ 居酒屋の構造は至つて簡單である。大抵はまづ暗い入口と煙突がついて爐のある奥の間とから成つてゐて、奥の間は仕切りがついて二等分され、仕切りから奥へはどんなお客でも入れないことになつてゐる。この仕切りには、廣い柵サシの卓子の眞うへのところ、大きな縦タテの口が切つてある。この卓子といつていいか、賣り臺といつていいか、とにかくこの上で酒を賣るのである。仕切りの口にすぐ向つての柵サシのうへには、大小とりどりの未だ封印をした角饅カクマウが立つてゐる。お客に充てた部屋の前の方には、ベンチがあり、二つ三つの空樽カラヅケがあり、隅には卓子がある。田舎の居酒屋は中がきはめて暗く、羽目板ウバのう



へに張つてあるびかびかに彩色した、大ていのところにはある安物の繪なども、殆んど何時もといつていくらゐる、お客の眼には入らないのである。

『安樂亭』に私の入つたときには、すでにかなり大ぜいの連中が集まつてゐた。

例の賣り臺のうしろに、殆んど仕切りの穴いつばいになつて、色まだらな更紗の襦袢を着たニコライ・イワノヴィチが立つてゐた。ふくれた頬に、だるさうな微笑みをうかべて、肥つた白い手で、今しがた入つて来たパチクリと抜作に酒を注いでやつた。そのうしろの、窓に近い隅の方には眼のきつい妻の姿が見うけられた。部屋の内中には土耳其人・ヤリシカが立つてゐた。二十二三になる瘡せた、すらりとした男で、空色の南京木綿の裾の長い上衣を着てゐる。彼は勇み肌の下つ端の職人らしく、どうやらあまり丈夫な方ではないらしかつた。落ちこんだ頬、大きな落ちつかない灰色の眼、小さな鼻の孔をびくびく動かしてゐる筋のとほつた鼻、白い坂なりの額のうへに、撫であげた淡い亞麻色の捲髪、大きいけれども美しく、いきいきした唇、——これら全體の顔たちは、感じ易い、多情の人間であることを示してゐる。彼はかなり興奮してゐた。眼をしばたたき、息をはずませ、まるで、熱でも病んでゐるかのやうに手をふるはしてゐた。彼はたしかに熱病にかかつてゐた。人の集まつてゐる前で話をしたり、歌をうたつたりする人ならば必らず知つてゐる、あの急激に來る不安な熱病にかかつてゐた。彼のわきには四十恰好の、肩幅

が廣く、頬骨が突き出て、低い額に韃靼人のやうに細い眼をし、短かく平たい鼻をして、顎の四角い、黒光りする髪の毛が刷毛のやうに剛い男が立つてゐた。鉛のやうな色を含んで淺黒い彼の顔の表情は、わけても蒼白い唇の表情は、若しも靜かに物思ふやうなところがなかつたなら、殆んど兇惡なものといつても差支へはなかつたらう。彼は殆んど身じろぎもしないで、靴につながられた牡牛のやうに、あたりをのろのろと見まはすばかりである。滑らかな銅の釦のついた、相當に着古したフロックを着、古びた黒い絹のハンカチを太い頸に巻きつけてゐる。彼は蠻カラ大將と呼ばれてゐた。この男と丁度むき合つて、聖像の下のベンチにはヤリシカの競争相手になるジーズドラの請負師が腰をかけてゐた。これは背の高くない、圓い仰向いた鼻に、いきいきした藍色の眼をして、薄髯を生やしてゐる、あばた面の縮れ毛の三十恰好の男であつた。じろじろとあたりを見まはし、両手を腰の下に敷いて、縁飾りのある粹な長靴を履いた足を平氣でぶらぶらさせたり、ユトユト音をさせたりした。絹綿天鵞絨の襟のついた灰色の羅紗の新しい薄い上衣を着てゐたが、その襟は、頸にしつかりと釦をかけた紅い襦袢の端をはつきりと浮き立たせてゐた。反對側の隅、戸口の右の方には、一人の百姓が、肩に大きな穴のあいた窮屈さうな古ぼけた野良着を着て卓子に向つてゐる。太陽の光は二つの小さい窓の埃だらけの硝子を透して、淡い黄色な流れのやうに降りそいでゐたが、いつもの暗い部屋を明るくすることは出來ないらしかつた。



あらゆる物がところどころに黠のやうな光をうけてゐるだけで、ぼんやりしてゐた。そのかはり、部屋のなかは涼しいくらゐで、息づまるやうな暑さの感じは、ここの敷居を跨ぐとから、重荷を肩から卸したかのやうになくなつて行つた。

私がやつて来たので、——ありありと私の眼についたことだが、——初めのうち、ニコライ・イワーヌイチのお客様たちはどぎまぎしたが、やがてニコライがまるで舊知でもあるかのやうに人なつこく私に挨拶するのを見ると、意を安んじて、そのうへ私のことなどはもう氣にもとめなかつた。私は麥酒をいひつけて、ぼろぼろの野良着をきた百姓のそばの、隅のところ腰をおろした。

「さあ、どうだ！」と拔作はひと息に一杯の酒を飲み乾して妙な手振りをしながら喚き出した。この男はこんな手振りをしなければ、一口もきけないと見える。「何をぐづぐづしてるんだい？ 始めるなら始めよう。え？ ヤーシャ？ ……」

「始めたり、始めたり、」とニコライ・イワーヌイチも相槌をうつた。

「そんなら始めるぞ。」と自信のあるやうな微笑みをうかべて、冷やかに請負師がいふ、「俺はいつでもいいんだ。」

「俺もいい。」ヤーコフは興奮していふ。

「さあ、始めたり、始めたり、みんな。」とパチクリが細い聲でいふ。

けれども、かうして口を揃へて所望してゐるのに、二人とも始めない。請負師はベンチから立ちあがりもしない。二人とも何かを待つてゐるらしかつた。

「始める！」と蠻カラ大將は不愛想に、厳しくいふ。

ヤーコフはぎよつとした。請負師は立ち上つて、帯を引き上げて、咳拂ひをした。

「だが、誰から始めるんですね？」と彼は蠻カラ大將に一寸つくり聲をして訊ねる。蠻カラ大將は肥つた脚を大きくひろげ、だぶだぶのズボンのポケットに逞ましい腕を肘のかくれるほど差し込みながら、相も變らず部屋の眞ん中に身じろぎもしないで突つ立つてゐた。

「そりあ、お前、お前よ、親方、」と拔作が口ごもりながら、「お前だよ、兄弟。」

蠻カラ大將は額越しに彼を見た。拔作はそつと細い聲を出して口ごもり、天井のどこかへ眼を向けて、肩を一寸うごかして、黙りこんでしまつた。

「籤引だ、」と蠻カラ大將が言葉に力を入れていふ、「それから賣り臺の上へコップを一つ。」ニコライ・イワーヌイチは屈んで喘ぎながら、麥酒のコップを取り上げて、卓子のうへに置いた。

蠻カラ大將はヤーコフをちらと見ていふ、「さあ！」



ヤイコフはポケットに手を入れて、二哥銅貨を取り出して、齒で印しをつけた。請負師は上衣の裾から新しい革の財布を引き出して、念入りに紐をほどいて、小錢を掌のうへに振り出して、新しい二哥銅貨を擇り出した。拔作は目庇がへし折れて、とれかかつてゐる古ぼけた帽子を差し出した。ヤイコフは帽子のなかへ自分の錢を投りこんだ。それにつづいて請負師。

「おめえ、そんな中から一つ採れ。」と蠻カラ大將がパチクリの方を向いていふ。  
パチクリはほくそ笑んで、兩手で帽子をとつて、振りだした。

一瞬の間、ひつそりと一座は静まりかへる。銅貨が互ひに打ち合つて、微かな音を立てる。私は氣をとめて、あたりを見まはした。誰も顔に、張りつめた期待の色がうかぶ。蠻カラ大將は軽く眼ばたきしてゐる。私の隣りにゐる例のぼろぼろの野良着をきた百姓は物好きさうな様子さへ見せて頸を伸ばしてゐる。パチクリは帽子の中へ手を入れて、請負師の錢を取り出した。みんながほつと息をつく。ヤイコフは顔を赧らめた。請負師は髪の毛に手をあてた。

「俺あ、お前からやれつて言つたぢやねえか。」拔作が叫んだ、「俺はちやんと言つたぢやねえか。」

「さあ、さあ、がやがやするんぢやねえ！」蠻カラ大將が見くびるやうにいふ、「始めろ、」と請負師の方へ頷いて、彼はつづける。

「どんな歌をやつたらいいかな？」請負師は興奮に陥りながら訊ねる。

「お前の好きなのを。」とパチクリが答へる、「思ひついたので、それをやれ。」

「さうさう、むろん、好きなのを。」ニコライ・イワーヌイチがゆつくりと胸のうへに兩手を組みながら附け加へる、「何も指圖されることはねえんだ。好きなのを歌ふさ。ただ上手にやりやいいんだ。こつちは聞いた上で公けに定めるんだかんな。」

「公けに、違えねえ。」拔作が後を引き取つて、空になつたコップの縁を舐める。

「ちよつと咽喉慣らしをさしてくろよ、なあ、」請負師は上衣の襟のところを指で直しながらいひ出した。

「さあ、さあ、呑氣なことはよして、始めろ！」蠻カラ大將は言ひ切つて、うつむいた。請負師はちよつと考へてゐたが、頭を振つて、前へ進み出た。ヤイコフは穴のあくほど彼を見つめる……。

ところで私はこの業くらべそのものの描寫にとりかかると前に、この物語に出てくる人物の一人一人について少しばかり話をしておくのも、あながち無益なことではなからうと思ふ。彼等の中の或る者の身の上は、私が『安樂亭』で逢つたときに既に私には分かつてゐた。そのほかの連中のことは後から聞き集めたものである。



先づ拔作から始めよう。この男の實の名はエヴグラフ・イワーノフといった。しかしこの界限ではどこへ行つても拔作としかいはなかつた。また自分でもこの綽名を使つて威張つてゐた。それくらゐ、この名前はよく當て嵌まつてゐた。また實際に、とりどころのない、いつもざわついてゐる性質には、この上もなく似つかはしい名前であつた。この男は放埒な獨り身の下男であつたが、昔々、疾うの昔にその主人たちに見放され、何一つ仕事もなく、鏝一文の儲け口もなかつたが、ただ毎日毎日、他人様の錢で飲み食ひする算段をつけてゐた。彼には酒やお茶を振舞つてくれるたくさんの知合ひがあつたが、それらの人たちも何故そんなことをしてやるのか、自分では分からなかつた。何故といふのに、この男が一座に興を添へるといふやうなことは一向になく、それどころか、却つて、譯も分からないことを喋り散らしたり、いやに執拗しつこかつたり、熱病やみみたいな身振りをしたり、始終取つて付けたやうな高笑ひをするのには、誰も彼も倦き倦きしてさへもゐたのである。彼は歌ふことも踊ることも出来なかつた。生まれてこのかた、氣の利いたことは申すに及ばず、辻褄の合つたことさへ言つた例がない。いつも『べらべらと』出まかせを喋つてゐる、——まぎれもない拔作であつた！ そのくせ、四十露里四方が間なら、どんな酒の席にでも、お客の間を、ひよろ長い姿がうろつき廻らなかつたことはない。かういふ譯で、みんなが彼に馴れ切つて、悪魔に見込まれたものと諦めて、彼の來るのに任せてゐた。もとより彼等

は見下げて附合つてゐる。けれどもこの男の馬鹿らしい出しやばりも、鬻カラ大將にかかつては忽ち押へつけられるのであつた。

パチクリは拔作とは全くちがつてゐた。別に人一倍、眼ばたきするといふ譯でもないが、このパチクリといふ綽名はよくまた彼に嵌まつてゐた。誰も知つてゐることだが、一體に露西亞の大衆といふものは、綽名の名人である。この男の過去をもつと詳しく探らうと私が努めたのにも拘らず、彼の生涯には私にとつて、——また恐らくは他の多くの人たちにとつてもさうであらうが、——奇怪な點、學者たちの所謂『暗々裡に葬られた』ところがあつた。私のやうやく知り得たところによれば、彼は嘗て、子供のない老婦人のところに馭者を勤めてゐた。するうちに預つてゐた三頭の馬を持つて逃げ出し、まる一年の間、行方を晦くらましてゐたが、放浪生活の無益なことや不幸なことを身を以て具さに悟つたものと見えて、自分から戻つて來た。しかし、その時は跛になつてゐた。女主人の足もとに彼は身を投げた。それから數年の間、他人のお手本になるやうに身持をよくして、今までの罪ほろぼしをしながら、だんだんと主の寵を蒙つて行つた。つひには全くその信用を得て、執事に取り立てられ、やがて奥方が亡くなるに及んで、どういふ工合でか分からないが、自由の身となり、町人の仲間いりを許されて、近所の百姓たちから土地を借りて、商賣を始め、たうとう身上しんじやうを築き上げて、今では何不自由なく、幸福な暮らしをしてゐる。彼は酸



いも甘いも嘗め盡くした腹悪はらごころの男で、善い悪いといふのではなく、それよりは打算的な人間であつた。大ぜいの人を知り、彼等を利用することを心得てゐる古狸なのである。狐のやうに用心深く、それと共に冒険心もあり、また年とつた女のやうにお喋りで、そのくせほかの人には打明け話をさせながら、自分だけは決して、うっかりと喋り出さなかつた。ところで、大體、こんな狡猾い男は馬鹿の振りをするものだが、彼はそんなことはしなかつた。尤も、馬鹿の振りをするなどは、却つて彼には難かしかつたのであらう。私は未だ曾てこの男の極めて小さな、ずるさうな眼まなこほど鋭い、才走つた目を見たことがない。この目は何時も、ただ見てゐるといふのではなく、つねに左見右見、腹のなかまで探るやうに見てゐるのである。パチクリはどうかすると、見たところは何でもなささうなことを何週間も打つ續けに考へ込むことがある。さうかと思ふと、やけに思ひ切つたことをやつてのける。こんなことは人には得て失敗を招きさうに思はれる、……ところが萬事がうまく行つて、すらすらと運んで行く。彼は運のいい男で、自分でも運勢のいいことを信じ、縁起といふものを信じてゐる。一體に彼は中々の御幣擔ぎなのである。誰にも仕事の上で關り合はないので、人から好かれてはゐないが、一かどの尊敬は受けてゐる。家族といつては、たつた一人の息子があるだけで、その子を眼の中へ入れても痛くないほどに可愛がつてゐるが、こんな父親に育てられてゐるからには、恐らく出世もするだらう。「パチクリの子供はあれ

の親父にそつくりだ。」と、今では老人たちは夏の夕方など、盛り土のうへに坐つて、互ひに世間話をしながら、ひそひそとこの子のことを話してゐる。誰も彼もよくその意味を覺つてゐるので、もうこれ以上は一言もいはない。

土耳其人・ヤーシカと請負師のことは長々と述べるがものはない。實際に、俘はれの身となつた土耳其女の腹から出たといふところから土耳其人と呼ばれてゐるヤークフは、根は文字通りの藝術家であつたが、商賣は或る商人の有つてゐる製紙工場の紙抄ひであつた。請負師のことになると、彼の運命については正直のところ私は今なほ知らない。手際のいい、抜け目のない、大きな町の町人らしくは思はれたけれど、ところが鬻カラ大將のことは、もう少し詳しく話をしなければならぬ。

この男の風態を見て最初にうける印象は何となく粗野で、鈍重で、しかも抜くべからざる力をもつてゐるといふ感じであつた。體つきは不恰好で、私たちの方でいふ『出来そこなひ』であつたが、そこには挫くことのできない健康そのものが感じられた。そして、不思議なことに、熊のやうな容子には、恐らく自分自身の力を全く冷靜に信じてゐるところから來るのであらうが、一種特別な優雅なところがなかつた。最初の一度で、このハーキューリーズがどういふ階級に屬してゐることかを判断するのはむづかしかつた。邸づとめの男らしくもなし、町人らしくも



なし、職を退いて貧乏になつた小役人とも見え、少しばかりの土地を有つてゐる落ちぶれ貴族で、獵大方や喧嘩屋になつた者とも見えない。彼は全く獨特な人間である。誰ひとり、この郡へどこから落ち込んで来たのかは知らなかつた。噂によると、郷土の出で、もとはどこかで役に就いてゐたとかいふが、誰もこれについて確かなことは知らない。それに、そんなことを誰から聞き出せるものか、——もとより御當人から聞くわけには行かない。あんなに黙りこくつてゐる氣むづかし屋もないものだ。さて、どうして暮らしてゐるのかといふことも、誰ひとり、はつきりしたことはないへなかつた。何商賣をするわけでもなく、人を訪ねて行くでもなし、殆んど人づきあひもしなかつた。ところが金だけは持つてゐた。むろん大した金ではないが持つてゐた。彼は控へ目に暮らしてゐたといふのではないが、——およそ彼には控へ目なところはなすが、彼は靜かに暮らしてゐた。周圍の人などを、てんで氣にも留めてゐないかのやうに、また世間の人なんかには全く用がないといつたかのやうに暮らしてゐた。蠻カラ大將（これは綽名で、本當の名前はベレヴレーソフといつた）はこの地方一帯に非常な勢力をもつてゐた。誰に命令を下すといふやうな權利は有つてゐなかつたし、偶然に出會つた人に自分のいふことを聴けなどは、おくびにさへも出しはしなかつたが、誰も彼も彼のいふことならば即座に喜んで従つた。彼が口を開けば人みな唯々として従ふ。實際、力といふものはどんな時にも物をいふものである。彼は殆んど

酒も飲まず、女に手出しもせず、ただ一圖に歌を聴くのが好きであつた。どうもこの男には謎めいたところが多い。その身のうちには何か大きな力が根強く潜んでゐて、一たび首をもたげ、一たび破れ出た曉には、彼をはじめとして、あらゆるものを手あたり次第に粉碎しなければ已まないといふことを知つてでもゐるかやうに思はれる。さうして、この男の生涯に、かういつたやうな爆發の起ることがなかつたとしたら、また若し彼が世路の經驗によつて教へられ、危く身の破滅を免れて、いま現に、あんなに頑として嚴めしく自分を抑へてゐるのでなかつたとしたら、私はひどい勘違ひをしてゐることになる。特に私を驚かしたのは、彼には或る生まれながらの兇暴性と、同じやうに生まれながらの高潔な心との混合したものがあつたことであつた。このやうな二つの性質の混合したものは、ほかの誰にも私は見たことがない。

さて、請負師は前へ進み出て、半ば眼を瞑ぢ、きはめて高い喉フレイムセツトで歌ひ始めた。少し噎れ氣味の聲であるが、かなり氣持のいい、好い聲であつた。歌をつづけて、鴉鴉のやうに聲をころがし、絶えず歌つて、高いところから低いところへ落し、絶えず高い調子へ引き返して來てはその調子をつづけ、特に氣をつけて聲を長く引きのばし、ふつと切つたかと思ふと、一種豪快な力強い調子をもつて、もとの節にかへつて行く。彼の歌ひ方は、時にはかなり大膽で、時には可なり可笑しかつた、これらはその道の人を大いに喜ばせることであらう。また獨逸人はこれを聴いて



憤慨することであらう。これは實に露西亞の *tenore di grazia* (優美) (中音)、*ténor léger* (輕快) (中音) であつた。彼は陽氣な舞踊の曲を歌つた。はてしない潤飾や、附け加へてゆく諧音や歎聲のなかに、私かわづかに聞き得たものは次のやうなものであつた。

可愛いお前のためならば、ちさい畑はたけの土くれも

掘つて均ならしてあげませう

可愛いお前のためならば、ちさい紅花べにばな、紅い花

種子たねをまいてもあげませう

彼は歌つた。一同は一心に耳を傾けた。彼はたしかに音楽のわかる人たちを相手にしてゐることを感じてゐた。だからこそ、ひたすらに全力を傾注してゐたのである。まことに彼等はこの地方での歌の通人であつた。またオルロフ街道のセルギエフスコエ村が、特に氣持のいい、調子のいい節をもつて、その名を露西亞中に謳はれたのも宜なる哉であつた。請負師は永いこと歌つてゐたが、格別に聴く人たちに強い感動を起こさせはしなかつた。後ろ立てになる合唱がなかつたからである。しかし、最後の一段の、流石の蠻カラ大將をさへも微笑ませたほどの極めて見事な

歌ひぶりに至つては、拔作も堪まらなくなつて快心の叫びをあげた。誰も彼もが身ぶるひした。拔作とパチクリは、聲低く、あとをつけ、言葉をひつぱり、時をり叫んだりし始めた、「うまいぞ！……しつかりやれ、食はせ者！……しつかりやれ、聲を伸ばせ、悪たれ！もつと伸ばして！もつと穿くつて、えい、こん畜生、犬ころ奴！……くたばれ、畜生！」などと。ニコライ・イワーヌイチは賣り臺の向ふから感心して、頭を右に左に振つてゐる。拔作は、しまひには、足踏みをしたり、脚をあつちへ置いたり、こつちへ置いたり、肩を振つたりしはじめた。――またヤーシカの眼は炭火のやうにかがやいた。彼は木の葉のやうに全身を慄はし、落ちつかない微笑を洩らしてゐた。ただひとり、蠻カラ大將だけは顔の色も變へずに相變らずじつと佇つてゐた。けれども請負師の方を向いてゐる彼の眼はいくらか和らいだ、唇には、やはり蔑むやうな色が残つてはゐるが。一同の満足げな様子に勢づいた請負師は、旋風の吹きまくるやうな聲で歌ひ出した。いよいよ旋風のやうな聲に移つて、舌をうち、舌を鳴らし、はげしく咽喉も裂けよと聲を張り上げてゐるうちに、たうとう彼は疲れはてて、顔は蒼ざめ、熱い汗にびつしより濡れてしまつた。やがて、ぐつたりと後ろに身を反らしながら、最後の絶え入るやうな聲を放つたかと思ふと、一同は一せいに烈しい拍手喝采を浴びせかけた。拔作は彼の頸根にしがみついて、長い骨ばつた両手で彼を抱きしめた。ニコライ・イワーヌイチの脂ぎつた顔は紅らみを帯びて若返つた



やうに見える。ヤーコフは氣でも違つたやうに、「出かしたぞ、出かしたぞ！」と叫んだ。——私の隣りにゐたぼろぼろの野良着をきた百姓でさへも堪まらなくなつて、拳をあげて卓子をたたき、「なるほど！ うまいもんだ、いやはや、——うまいもんだ。」と叫んで、『全くその通りだ、間違ひがあるものか』と言はぬばかりに、横を向いて唾を吐いた。

「やあ、兄弟、面白かつたぞ！」と拔作は疲れ切つた請負師をしつかと抱きしめたまま喚き立てる、「面白かつたぞ、ほんとに！ 勝つたぞ、兄弟、おめえが勝つたぞ！ おめでたう！ 小唄一本はおめえのもんだぞ！ ヤーシカなんぞにや、どうしてどうして、……さうだ、まだまだ、とても……。俺が受け合ふ！」（と、又しても胸に請負師を抱きしめる。）

「これ、放してやれ、放してやれ、しつこい……」とパチクリが業腹たてて言ひ出した、「腰かけさせてやれよ、それ、疲れてんのに……。何て、おめえ、馬鹿なんだ、全く馬鹿野郎だ！ 何だつて、さうべたべた引つ付くんだ！」

「まあ、何だ、それぢや、掛けさせる、おらあ、お祝ひに一杯やるから。」拔作はかういつて賣り臺のところへ歩み寄つた。「おめえの御馳走になるぞ、兄弟、」と請負師の方を向いて附け加へた。

相手はうなづいて、ベンチに腰をおろし、帽子の中から手拭を出して、顔を拭き始める。拔作

はそそくさと、貪るやうに一杯ひつかけて、ひどい呑んだくれにはよくあることだが、咽喉を鳴らしながら、悲しさうに心配してゐるやうな顔をした。

「巧えなあ、兄弟、巧えよ。」とニコライ・イワーヌイチは愛想よくいつて、「さあ、ヤーシャ、今度はお前さんの番だ。いいかい、びくびくするなよ。見てやる、誰が勝つか、見てやる……。しかし親方は巧えなあ、ほんとに巧え。」

「とっても巧いわね。」とニコライ・イワーヌイチの細君は微笑みをうかべながらヤーコフをちらと見た。

「巧え、はあ！」私の隣りの男が小聲で繰り返した。

「ははあ、山男の木偶の坊！」と、だしぬけに拔作がどなる。さうして肩のところの穴のある百姓の方へ近づいて行つて、百姓を指さし、跳びあがつたり、散々にふるへ聲で嘖つたりした。

「山男！ 山男！ はあ、怒つて見る。はあ、木偶の坊め、何しに御座つたえ、この木偶の坊？」と笑ひながら喚き立てる。

可哀さうに、百姓はどきまぎして立ちあがり、そこそこに出て行かうとしたが、そのとき不意に蠻カラ大将の割れ鐘のやうな聲がひびいた。

「一體、何ちふ穢らはしい獣だ！」齒をぎりぎり鳴らしながらいつた。